（表紙）

彌寝氏文書　元

平氏彌寝家系圖

幕紋梶之丸

人王五十代
『∴』桓武天皇

『○』葛原親王

一品　式部卿　母參議長野女、

仲野親王

式部卿

良峯安世

大納言

遍昭

號花山僧正、俗名宗貞、歌人、

經成

素性

俗名左近將監玄利、歌人、

宜子内親王

班子女王

宇多國母、

好風

左中將

貞文

高棟王

『○』高見王
無官無位

『○』高望王
上総介　従五位下　始賜平姓、

『○』良望
改國香常陸大丞　鎮守府將軍、

良將
従五位下　鎮守府將軍

良兼
上総介　長田元祖

良繇
鎮守府將軍

良文
村岡五郎　鎮守府將軍

良持

下総介

『○』貞盛
従四位下　鎮守府將軍

繁盛
鎮守府將軍

『○』維衡
上総介　従四位下

維將
肥前守　北條祖

『○』正度
左衛門尉　武藏守　少納言　正五位下
越後守

『○』正衡

右衞門尉

『○』正盛

右京大夫　從四位下　右馬權頭　讃岐權守

維盛

從五位上

『○』忠盛

刑部卿　從四位下　內昇殿院執柄

○仁平三年癸酉正月十五日卒、年五十八、

忠正

右馬頭

『○』清盛

安藝守　從一位　太政大臣　法名淨海、

○白河院貞仁之子、母祇園女御、子母共賜忠盛而爲継子也、

○養和元年閏二月四日薨、年六十三、

家盛

右馬頭　從四位下　早世、

頼盛

正二位　大納言　號池殿、

教盛

從二位　中納言　號門脇、

○文治元年乙巳三月廿四日、於長門國檀浦入水薨、

經盛

正三位　參議

○文治元年三月廿四日、於檀浦入水薨、

祐圓

阿闍梨

詮眞

二位僧都

忠度
正四位下　薩摩守　歌人
○元暦元年甲辰二月七日、於摂州一谷戰死、

宣元

正明
兵部少輔

女子
中山中納言顕時室、

女子
判官代親政室、

經政（正イ）
正四位下　但馬守
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

經俊
若狭守　刑部卿
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

敦盛
無官大夫
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、年十六、

通盛
従三位　越前守
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

國盛

忠快
中納言　律師

教經
従五位上　能登守
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、（二年三月廿四日壇浦入水死矣イ）

業盛
藏人大夫
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

女子

敦子　宗盛室、

女子

成経室、

保盛

正三位　中宮亮

光盛

従三位

爲盛

静遍

女子

女子

『○』重盛

正二位　左大將　號小松内大臣、母〔平卍高階左近將監知章女時信女〕、二位尼、

○治承三年己亥八月一日薨、年四十二、法名浄蓮、

基盛

安藝守　卍正〔従〕四位下

○平治年中爲大和國司下向之時、於宇治川溺死、

行盛

正五位下　左馬頭

○文治元年三月廿四日、於壇浦入水死、

『○』宗盛

右大將　従一位　内大臣

○文治元年乙巳六月廿一日、於近江國篠原被誅戮、

清宗

右衛門督

○文治元年六月廿一日、於近江國野路被誅、

能宗
従五位下

宗親
土佐守

知盛
(権)〔新〕中納言　従三位
○文治元年乙巳三月廿四日、於壇浦入水薨、

重衡
正三位　中將
○文治元年六月、於南都所誅戮、

知度
従五位(上)〔下〕　三河守
○壽永二年五月十二日、於加賀國戰死、

清貞
尾張守　清盛之猶子也、

清房
淡路守
○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

清邦
丹後守

良衡
寺園祖

女子
花山院左府兼雅公臺飯所

女子
德子建禮門院安德母后

女子
(盛)〔寛〕子六條攝政基實公北政所

女子
普賢寺攝政基通公北政所

女子
冷泉大納言隆房卿北政所

七條修理大夫信隆卿室、

女子

後白川院更衣、母嚴島内侍、

女子

花山院上臈女房、號廊御方、

知章

武藏守

○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

增盛

法師

知忠

從五位下　伊賀守

維盛

正三位　左中將

○元暦元年潛登高野山、遂出家、三月廿八日於

那知沖沈海、年廿七、法名淨圓、

資盛

從三位　右中將

○文治元年三月廿四日、於壇浦入水死、

清經

〔從〕(正)四位下　左中將

○於豊前國柳浦入水死、

有盛

從四位下　左少將

忠房

丹後守　侍從

師盛

備中守

○元暦元年二月七日、於一谷戰死、

宗實

土佐守　於足柄死、

重眞

僧

行雲　僧

清雲　僧

『○』高清

字六代　律師妙覺　母権大納言成親卿女也、

○文治元年乙巳、平氏盡没、西海之後、十二月十七日於遍照寺奥大覺寺北菖蒲澤、爲北條遠江守時政被搜出爲囚人、令我乘輿以赴関東、到野路之際、神護寺文覺上人謂有師弟昵、請得免許、時政曰、宣啓子細於鎌倉、待其返言之交可宥置云云、由是文覺上達鎌倉、則六代及叔父土佐守宗實、在府猶子暫有可免許之旨、仍逃誅戮、而六代爲文覺之弟子者也、于時十二歳也、

○文治五年巳酉、遂薙髪、着僧衣、名妙覺實十六歳也、

○建仁三年十一月廿七日、於関東田越川被誅、年三十法名良潮、

女子

夜叉御前　母同、

『元祖』『△』清重

沙弥行西　妙覺律師　居住于高尾之際子也、

○稱清重者、用清盛之清與重盛之重也、

○北條遠江守時政者、平氏同流也、以故前右大將頼朝卿薨御之後、嚴親妙覺密達時政曰、先是壽永元暦文治之際、平氏悉以雖曰滅亡、而只予一身幸而免死、悲平氏之至断絶矣、今也予有一子、所庶幾者、只有得恩免移遠國思

保命全身耳、強以訴之於時政、時政許諾、達於　左衞門督頼家卿之上聽者、及再三而後頼家卿所以許容也、

○鎭西大隅州禰寢院主、有菱刈重延者、既死去矣、有渠之賜先領之命、而賜袖判之下文頂戴、所以清重法師行西下向禰寢也、御下文及北條遠江守時政副狀共記左、

○　関東下文

（本文書ハ一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　北条時政書狀

（本文書ハ二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○廳宣　留守所補任祢寢向保『俣』院地頭職事有大介藤原朝臣在判之書記在『左』々

○　大隅國司廳宣

（本文書ハ三号文書ト同文ニツキ省略ス）

有留守所下文記左、

○　大隅國留守所下文

（本文書ハ四号文書ト同文ニツキ省略ス）

○有　正宮公文所下文記左、

○二六八　大隅國正八幡宮公文所下文

『正文有之』

御使中原（花押）

正宮公文所下　祢寢院南俣

可早任京都御下文旨致沙汰祢寢南俣郡司地頭職事、

沙弥行西

右、去八月　日御下文今月三日到来偁、寺家公文所下正宮公文所、可早以清重法師爲祢寢南俣院地頭職事、右件職爲相傳之由依訴申、賜預　將軍家御消息

也、有限御年貢物等、無懈怠可令進済、奉爲社家不可忽緒之狀、依　長吏仰、下知如件者、任御下文之旨、可致沙汰之狀如件、敢勿違失、故下、

建仁三年十月三日

権　政　所　散　位　息　長（花押）
御供所検校散位息長（花押）
政所検校散位大蔵（花押）
権　執　印　散　位　息　長（花押）

○有北條相模守義時之書記左、

○　北條義時書下

（本文書ハ五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○寺家公文所下文

○正宮公文所下文

右二通各記左地者也、

○二六九　弥勒寺寺家公文所下文

『正文有之』
寺家公文所下　正八幡宮公文所

可早任鎌倉殿御消息、停止菱刈重能濫妨、以清重法師、爲地頭職、勤本寺役神領祢寝南俣院間事、右件職事、清重法師依申相傳之由、去建仁三年任將軍家御成敗之旨、寺家又成給下文畢、而彼重能背兩方下知、去々年稱訴申關東遠江守之由、号賜御教書令押領云々、仍清重法師、去二月參向關東、重預奉書畢者、可停止重能濫妨之狀、依仰下知如件、

建永二年三月卅日　公文伊勢介藤原（花押）
少別當大法師
少別當大法師（花押）

○二七〇　大隅國正八幡宮公文所下文

『正文有之』
正宮公文所下　祢寝南俣住民等

可早任　鎌倉殿御教書并本家御下文旨、停止重能濫妨、以清重法師爲地頭職事、

副下

一通　鎌倉殿御教書

一通　本家御下文

右、去三月卅日御下文、今月十七日到来狀偈、寺家公文所下正八幡宮公文所、可早任鎌倉殿御消息、停止菱刈重能濫妨、以清重法師爲地頭職勤本寺役神領祢寢南俣院間事、右件職事、清重法師依申相傳之由、去建仁三年任　將軍家御成敗之旨、寺家又成給下文畢、而彼重能背兩方下知、去々年稱訴申關東遠江守

▽(欠)(條目裏花押)△

之由、号賜御教書、令押領云々、仍清重法師、去二月參向關東、重預奉書畢者、可停止重能濫妨之狀依仰下知如件云云者、早任　鎌倉殿御教書并本家御下文旨停止重能濫妨、以清重法師爲地頭職、可隨彼所勘之狀如件、故下、

建永二年五月十七日

執印兼少別當大法師(花押)権政所散位息長

田所検校僧▽(欠)(花押)△

御供所検校散位息長▽(欠)(花押)△

政所検校散位大蔵

御前検校大法師▽(欠)(花押)△

権執印散位息長宿祢「余」▽(欠)(花押)△

『次目裏判』(花押)

○菱刈住人有重能者、企僞謀專私慾押領祢寢南俣院已訴乎、關東因茲不得已面行西、亦先是建仁三年七月三日

將軍頼家卿所補彼院地頭職之旨、賜袖判下文矣、故爲上達其趣、建永二年(卽承元元年也)丁卯之春參向鎌倉、所以陳謝重能濫訴之故也、於問注所訴陣、既以決定矣、於茲再賜安堵下文於行西也、開愁眉欣々然而於赴領國之海程忽黒風之難逃丁、此之特匪啻祈願于氏神睿山山王大權現伏仰于祢寢院建部大明神

專爲祈誓、日遁風波之急難有保身命、則宜當家之敬信氏神一、爲祈誓之外無有他念至誠通神冥也、黒風漸變順風白浪、亦爲平波得到著于領土海岸熟慮、焉非人力之所致、實大明神之助也、於茲改平氏祢建部氏者也、

建暦元年辛未七月廿二日逝去、

—清忠

次郎　右近大輔　法名沙弥浄光、

嚴親清重法師行西死去之後、又菱刈重能訴祢寝院内南俣地頭職、於關東於鎌倉清忠与重能遂問注、地頭職弥清忠可領掌之旨、賜政所下文北條相模守義時之有袖判矣、記左、

○　北條義時袖加判散位藤原某奉書

（本文書ハ七号文書ト同文ニツキ省略ス）

祢寝院内南俣地頭職任下文之旨、可致沙汰之旨有宮内大輔兼守藤原朝臣在判之書記左、

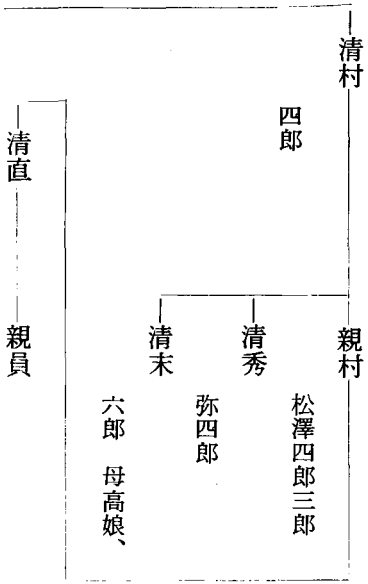
○　大隅國司廳宣

（本文書ハ八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○兼文二年庚辰七月三日逝去、

（表紙）

禰寝氏文書　亨



松澤四郎三郎　　松澤四郎太郎

『△』清綱

弥二郎　三位　中將　法名了本、

○兄清忠早世、於茲予雖爲三男得家督之讓矣、以故有小祢寝院地頭職補任、下文守護所刑部丞大江在判、證書記左、

○　大隅國守護所下文

（本文書ハ一一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○自兩六波羅至　大炊御門殿、有注進之書、記左方也、

○二七一　六波羅御教書案

『正文有之』

大隅國祢寝院南侯地頭清綱申、名主等不從所勘由事、申狀具書進覧之、子細載狀候欤、恐惶謹言、

『貞應二年』六月廿八日　　散位時輔

陸奥守時茂

『右各下裏ニ有之』
『時茂』(花押)

『時輔』(花押)

進上　大炊(家嗣)御門殿

○祢寝院南俣地頭職任父之譲状可領掌之旨、北條陸奥守義時在判之書二通有之、記左、

○　関東下知状

(本文書ハ一二号文書ト同文ニツキ省略ス)

○　北條義時書状

(本文書ハ一三号文書ト同文ニツキ省略ス)

北條武蔵守泰時・同姓相模守時房在判之書有之、記左、

○　六波羅施行状

(本文書ハ一四号文書ト同文ニツキ省略ス)

○寺家公文所下文有権校法印在判之書記左、

○　弥勒寺寺家公文所下文

(本文書ハ一五号文書ト同文ニツキ省略ス)

北条武蔵守泰時在判之書有之記左、

○二七二　北条泰時書状

『正文有之』
大隅國正八幡宮御神領之名頭神人清綱爲御家人之上、依有可入見參之事、參向關東之由、承候了、恐々謹言、

二月廿日　　（北条泰時）武藏守（花押）

『上書ニアリ』関東御『返』上事

○兵部房圓運雖訴南俣名主職賜清綱旨北條陸奥守義時袖判之書有之、記左、

○　名越朝時袖加判藤原宗康奉書

（本文書ハ二二号文書ト同文ニツキ省略ス）

有北條陸奥守義時袖判之書二通記左、

○二七三　北條朝時袖加判右衞門尉宗康奉書

（北條朝時）（花押）

『正文有之』大隅國御家人祢寢院郡司清綱折紙二枚被遣之、如狀者、公事奉行事、任先例、名主百姓等可從郡司催促之旨、可令下知給欤、次正八幡宮御放生會陣頭役事、曰守舊跡、可令載被給之由所〔者〕（候）也、仍執『啓』達如件、

仁治二年十一月〔一〕（八）日　　右衞門尉宗康（奉）▽

謹上　肥後入道殿

○二七四　北條朝時袖加判沙弥生阿奉書

（北條朝時）（花押）

『正文有之』大隅國祢寢南俣地頭清綱折紙證文等入見參候訖、此條論人兵部房圓運、先度有訴申旨之間、雖被成召府、如今所進之證文等者、度々被經御沙汰、事切之条顕然次第也、然者賜身暇、可被下遣之由所候也、仍執達如件、

寛元々年八月廿九日　　沙弥生阿奉

藤内右衞門尉殿

○有左近將監在判之書記左、

○　六波羅御教書

（本文書ハ二六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○廳宣　大隅国留守所　大介藤原朝臣有袖判之書記左、

○　大隅國司廳宣

（本文書ハ二八号文書ト同文ニツキ省略ス）

文永九年壬申九月廿日逝去、

『△』清親

弥次郎　大夫丞　法名行惠、

大神在判之書有之記左、

○二七五　尊良親王令旨

『正文有之』

爲朝敵追討、所被召軍兵也、致合戰之忠者、可有恩賞之由、依仰執達如件、

元弘三年六月十五日　（盛光）大神（花押）

祢寝三郎次郎殿

將軍家政所下文有北条相模守貞時・同姓前武蔵守宣時在判之書、記左、

○　將軍（惟康親王）家政所下文

（本文書ハ三二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○先是弘安四年蒙古合戦之賞賜之其目録記左地、

○　蒙古合戦勲功賞配分狀

（本文書ハ三三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○北條越後守仲時同姓丹波守在判之書二通有之記左、

○　六波羅施行狀

（本文書ハ三四号文書ト同文ニッキ省略ス）

○二七六　六波羅施行狀

『正文有之』

山本小次郎清方并乙万丸与祢寝弥次郎清親代子息清治相論大隅國山本充松兩名事、

右、任今年三月十二日関東御下知狀、可致沙汰之狀如件、

正應二年五月廿八日　　丹波守平朝臣（北條盛房）（判同）（花押）

越後守平朝臣（北條兼時）（同）（花押）

○元亨二年壬戌六月廿二日逝去、

- 頼重
  - 五郎　號宮原、
  - 清祐
    - 六郎　號（正河）川窪、
    - 清郷
      - 孫六
      - 清元
        - 七郎左衛門尉　號西本、
        - 清賀
          - 孫八
          - 重郷
            - 三郎
            - 清連
              - 弥三郎
              - 清純
                - 又五郎
                - 重之
                - 五郎次郎
                - ○祢寝院南俣之内領鶴丸河内
                - 重廣
                - 右衛門五郎　号七目木
                - 頼純　弥五郎
                - 清田　又五郎
                - 清長　又五郎
                - 清滿　五郎　號窪、
                - 『△』清治

字房丸　孫次大夫　法名住恵、

○將軍家尊氏卿賜御教書三通記左、

○　足利尊氏御判御教書案

（本文書ハ四九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利尊氏御判御教書

（本文書ハ五〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利尊氏御判御教書

（本文書ハ五二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○尊氏將軍令弟左馬頭直義在判之書有五通記左、

○　足利直義感狀

（本文書ハ五三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直義感狀案

（本文書ハ五四号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直義軍勢催促狀

（本文書ハ五五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直義軍勢催促狀

（本文書ハ五六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直義感狀

（本文書ハ五七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○有畠山治部大夫源直顕在判之書記左、

○　畠山直顕書下

（本文書ハ五八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○左近將監高家奉　三條侍從殿袖判之書有之記

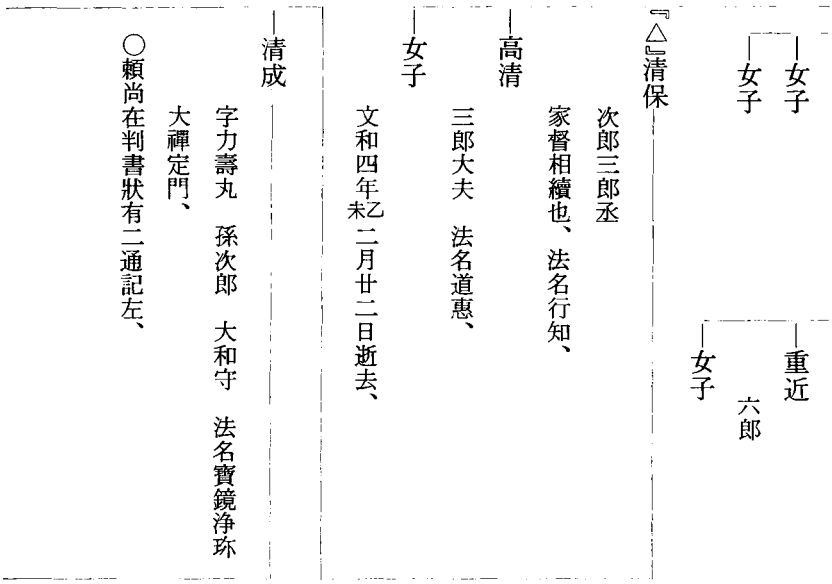
左、

○　三條泰季御教書

（本文書ハ五九号文書ト同文ニツキ省略ス）

- 清任
  - 則清　亦三郎
  - 重治
- 清實　四郎　號野間、
- 清政　九郎　號丸嶺、
  - 清有　弥三郎
    - 女子
- 貞綱　余三　號今村、
  - 清時　彦三郎
  - 女子
- 清經　彦三郎　號嶺崎、
- 女子

- 本田太二郎系妻、（マヽ）
- 女子
  - 正宮修理所宗清妻、
- 清信　弥次郎　先親早世、
- 清國　弥（正太）〔次〕郎　号角、先　祢寝八郎　法名常連、親早世、法名理円、
  - 清逸
- 清種　弥（正一）〔次〕郎　號池端、
  - 清里
- 清家
  - 清一
- 清數　彦三郎　號西、　弥三郎　號馬場、
  - 清武　八郎　大炊助　法名道智、



○二七七　少貳頼尚書狀

『正文有之』

就世上事、態御音信喜入候間、自京都被仰下子細候之間、参佐殿候之處、御同心之至、殊以喜悦候、仍執進御教書候、弥被致忠節候者、且其子細可注進候、恐々謹言、

十二月六日　　頼尚（少貳）（花押）

祢寝孫二郎殿

○二七八　少貳頼尚書狀

▽（裏封目）

『正文有之』

去九月廿日御狀到来、条々承悦候了、抑於國御忠節殊以目出（奥）（ナシ）〔度〕候、此子細可執申候、相構〳〵被廻御方便可有退治候、恐々謹言、

十二月九日　　頼尚（少貳）（花押）

祢寝孫二郎殿御返事

筑前国比伊郷内田地屋敷長渕庄内畠地等、如元可被返付之旨、頼尚在判之書有之記左、

○　少貳頼尚書下

（本文書ハ六二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○畠山治部大輔直顕被獻注進状於奉行所其書記左、

○　畠山直顕擧状

（本文書ハ六三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津道鑒被獻注進状於　奉行所其書記左、

○　島津道鑑貞久擧状

（本文書ハ六四号文書ト同文ニツキ省略ス）

○將軍家尊氏郷令弟左兵衛督直義在判之書六通有之、記左、

（表紙）

禰寝氏文書　利

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ六六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ六七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ六八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ六九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ七〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬軍勢催促状
（本文書ハ七一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○畠山修理亮直顯在判之書有五通、記左、

○　畠山直顯感状
（本文書ハ七二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　畠山直顯軍勢催促状
（本文書ハ七三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　畠山直顕感狀

（本文書ハ七四号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　畠山直顕感狀

（本文書ハ七五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　畠山直顕擧狀

（本文書ハ七八号文書ト同文ニツキ省略ス）

左兵衞督直義在判之書三通有之、記左、

○　足利直冬軍勢催促狀

（本文書ハ七九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬感狀

（本文書ハ八〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬感狀

（本文書ハ八一号文書ト同文ニツキ省略ス）

—清氏

三郎次郎　號北、

—清有

孫次郎

爲兄清成猶子、

—清義

字亀壽丸　次郎三郎　號東、

—女子

應安元年戊申三月四日

『△』清有—

○孫次郎　右馬助　法名清有大居士、

○雖爲清成之弟爲猶子、連續當家者也、

○左兵衞督直義在判之書、有之記左、

○　足利直冬感状

（本文書ハ八五号文書ト同文ニツキ省略ス）

將軍方大將尾張左馬助義冬在判之書有之記左、

○　尾張義冬兵粮料所預ヶ状

（本文書ハ八六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○左兵衛督直義在判之書二通有之記左、

○　足利直冬感状

（本文書ハ八七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　足利直冬感状

（本文書ハ八八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○畠山修理亮直顕在判之書有之記左、

○　畠山直顕地頭職宛行状

（本文書ハ九三号文書ト同文ニツキ省略ス）

康安元年辛丑六月廿日逝去、

『△』久清

字犬房丸　孫次郎　右馬助　法名遠山成久大居士、

○畠山治部大輔在判之書有之、記左、

○　畠山直顕兵粮料所預ヶ状

（本文書ハ九五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津修理亮氏久　在判之書有四通記左、

○　島津氏久兵粮料所預ヶ状

（本文書ハ九六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津氏久書狀

（本文書ハ一〇七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津氏久宛行狀

（本文書ハ九七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津氏久兵粮料所預ケ狀

（本文書ハ九九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○西征（マヽ）將軍　宮方左少將胤房在判令旨有之記左、

○　征西將軍宮懐良親王令旨

（本文書ハ一〇〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○九州探題今川伊豫入道了俊在判之書三通有之、記左、

○　今川了俊貞世書下

（本文書ハ一一二二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川了俊貞世書下

（本文書ハ一一二三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川了俊貞世書下

（本文書ハ一一二六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○兵部大輔在判之書右有二通、記左、

○　今川滿範書下

（本文書ハ一一二七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川滿範兵粮料所預ケ狀

（本文書ハ一三〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○今川了俊在判之書六通有之、記左、

○　今川了俊貞世安堵状

（本文書ハ一三一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川了俊貞世兵粮料所預ケ状

（本文書ハ一三二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　祢寝久清与党交名注文

（本文書ハ一三三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川了俊貞世書下

（本文書ハ一三六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　今川了俊貞世安堵状

（本文書ハ一三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○二七九　今川了俊貞世書状

▽（裏封目）

『正文在之』

御注進状到来委細承候了、

抑自最前御忠節至目出候、三ヶ國事堅可有其沙汰

候、可有御待候、八代對治事不可有幾候、相構被

致忠節候者、可目出候、兼又比井郷内五町分事、

聊不可有子細候、関口差遣藝州候之間、此分申遣

候、可遵行候、其間者、可有御待候、返々御音信

悦入候、委細重可申候、恐々謹言、

三月三日　（今川）了俊（花押）

祢寝殿

○西征將軍宮方散位親世奉書有之、記左、

○　征西將軍宮良成親王令旨

（本文書ハ一四〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津氏久公有在判之書記左、

○　島津氏久書狀

（本文書ハ一一七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津陸奥守元久　在判之書有之記左、

○　島津元久施行狀

（本文書ハ一四五号文書ト同文ニツキ省略ス）

理教房

僧住叡山

女子

○永徳三年癸亥六月二日逝去、

『△』清平

字鬼房丸　孫次郎　山城守　左馬助　法名

明山安清大禅定門、

○百一代之上　後小松院御字昇進口宣有之記左、

○　蔵人頭広橋兼宣奉口宣案

（本文書ハ二〇三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○右兵衛佐満頼在判之書有之、記左、

大隅国本領者　大禰寝　小祢寝　佐多　田代

邊津賀　姶良　大姶良　西俣　高州　鹿屋　百

引　下大隅　大津村　種子島半分也他州領地略

之、

○　渋川満頼安堵書下

（本文書ハ二〇四号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津陸奥守元久　在判之書二通有之記左、

○　島津元久宛行狀

（本文書ハ二〇五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津玄仲元久契狀

（本文書ハ二〇六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津陸奥守久豊在判之書五通有之記左、

○　島津久豊宛行書下

（本文書ハ二〇八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津久豊宛行書下

（本文書ハ二〇九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津久豊宛行書下

（本文書ハ二一〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津久豊宛行書下

（本文書ハ二一一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津久豊宛行書下

（本文書ハ二一二号文書ト同文ニツキ省略ス）

○嶋津陸奥守尊久後改忠國在判之書有之記左、

○　島津尊久忠國書下

（本文書ハ二一三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○應永廿四年丁酉九月十一日、太守陸奥守久豊公當欲攻川邊城之時、與弟能登守清息俱遂戰死家臣数十人共以戰死也、　法名安清號清浄山園林寺殿、

―清息

字犬房丸　次郎　能登守　號竹崎、

○於川邊與兄清平俱戰死、

直清
字又房丸　孫三郎　出羽守　號野久尾、
清員
字久曽房丸　四郎　号野間、
清篤
字彦房丸　孫五郎　左衞門尉　近江守　號堀内、
清家
字地藏房丸　次郎三郎
○東清義爲猶子、
時治
字菊房丸　七郎　號入鹿山、
女子
忠清
孫二郎　大和守　右馬助　出羽守　法名茂清道繁居士、

○嶋津陸奥守久豊　有可賜二十町領地之證狀記左、

○　島津久豊書下
（本文書ハ二三三号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津陸奥忠國　在判之書四通有之記左、

○　島津忠國安堵書下
（本文書ハ二二七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國宛行書下
（本文書ハ二二八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國宛行書下
（本文書ハ二二九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國宛行書下
（本文書ハ二二〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○法名茂清岩殿、寺殿永享三年辛亥六月朔日、

└女子
└女子
└女子

（表紙）

禰寝氏文書　貞

└元清
　孫次郎
『△』重清
　字〔益〕房丸（注沙）　孫〔大〕郎（注太）　右馬助　山城守

○島津陸奥忠國　在判之書五通有之記左、

○　島津忠國宛行書下

（本文書ハ二二五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國行宛書下

（本文書ハ二二六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國宛行書下

（本文書ハ二二七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國契狀

（本文書ハ二三一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津忠國安堵書下

（本文書ハ二三三号文書ト同文ニツキ省略ス）

天文五年丙申四月　日逝去、法號寶屋清珎居士

寶屋庵殿、

―爲清

三郎次郎　駿河守

―清植

―女子

『祢』称寢八郎妻、

―清隆

―女子

―女子

孫七郎

―國清

―豊清

孫太郎　右馬助　早世、

孫次郎

―清存

建次郎　出雲守

―清常

孫次郎　九郎〔右〕衛門尉（左）

―清長

孫九郎　早世、

―尊重

初忠清　又五郎　右兵衛尉　大和守

○母奈良次郎藤原宗成女、

○加冠之時島津陸奥守武久　賜證書記左、

○　島津武久加冠狀

（本文書ハ二三五号文書ト同文ニツキ省略ス）

○予素嗜敷島道矣漸粗有得心則世人曰歌道甲衆人焉、予未知是非也、有故在京師之日不計漏達後柏原院一百五代天聽有可奉愚詠之旨不得辭退雖奉数首省以略之唯一首記左、

様なからおひにもあらぬ心こそ
花になくさむ志賀の山を

依此歌志賀男と被呼傳りぬ

丁此之時賜尊字故改忠清称尊重矣、且賜昇進口宣記左方者也、

○　右中弁藤原宣秀奉口宣案

（本文書ハ二三六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　右中弁藤原宣秀奉口宣案

（本文書ハ二三七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○島津又三郎忠治　證書有之記左、

○　島津忠治書狀

（本文書ハ二三九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○天文十六年丁未八月廿九日逝去、法名一味庵主、

―女子

出羽守清充母、

―女子

島津薩摩守國久室、薩摩守成久駿河守忠綱僧伊心之母、

―女子

東藏人清友妻、

—女子
種子鳥左近(マヽ)將監時氏妻、武藏守忠時左兵衞尉朝世母也、
—女子
河窪遠江守政清妻、

『△』重就
又四郎　式部大輔　母肝付周防守兼連女、
—實助
又次郎　右馬助　改清廉　母同上、好助爲猶子相續田代、
—頼治
孫次郎　駿河守　重頼
母同上、　—重昌
覺内
—重良
又五郎　常陸介　母同上、

—才州良藝和尚　他腹、
京都康臺寺　大閤秀吉公北政所菩提所　住持、
—女子
字德満北鄕一雲母、母肝付周防守兼連女、
—女子
字初益　肝付越後妻、母同上、
—女子
字乙益　野間武藏妻、母同上、
天文三年甲午四月三日逝去、法名劦山成益大禪定門、

『△』清年
字金千代丸　孫次郎　式部少輔　母島津豊後守息女、
○島津勝久在判之書有之記左、
○　島津勝久宛行狀

（本文書八二四六号文書ト同文ニツキ省略ス）

○永禄七年甲子四月十日逝去、法号光巌了清大居士光巌寺殿、

—重貞
兵部少輔、
宮原氏爲猶子　無子孫、

—女子
太守勝久簾中、

—女子
伊地知周防介妻、

—女子
祢寝常陸妻、

『△』重長
字菊千代丸　七郎　右近太夫　母島津薩摩守女、

○予有其故而与同於伊東大脇大夫義祐三位入道・肝付河内守兼續入道省釣・伊地知周防介重興等、而背大守者有年於茲矣、

○天正元年癸酉之春　島津義久　先使鹿児島寶持院八木越後守昌信乗扁舟來祢寝達旨趣於重長日離一揆之與黨屬島津旗下則可依諸行其黨云々、数日留滞之際密談粗皈心於島津而後令両使皈舟也、再遣新納刑部大輔忠元・伊集院右衞門兵衞尉久治・上原長門守尚近決定和諧之儀焉、於茲即離一揆之黨徒屬島津之旗下可抽無二忠切之旨堅断誓約之、

○離肝付氏之黨可屬島津旗下之旨誓約既堅矣、依爲密事八人使衆有誓紙記左、

○　島津家國老・三使・副使等連署起請文

（本文書八二四七号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　島津家國老・三使・副使等連署狀

（本文書八二四八号文書ト同文ニツキ省略ス）

○右誓紙以爲密事充書無之、

○和義既成則義久及國老使衆有誓紙、記左、

○　島津義久起請文

（本文書八二四九号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　喜入季久外二名連署起請文

（本文書八二五〇号文書ト同文ニツキ省略ス）

○　新納忠元外四名連署起請文

（本文書八二五一号文書ト同文ニツキ省略ス）

○天正元年三月十日太守催薩隅二州軍衆入祢寢城而欲討肝付氏之徒黨　太守亦陣薩州指宿矣、

○同月十四日進太守之兵於肝付封疆今日春雨如洗然以故難戰、而到鷹栖浦則漁父等周章悉以退散故取舟船各歸去矣、

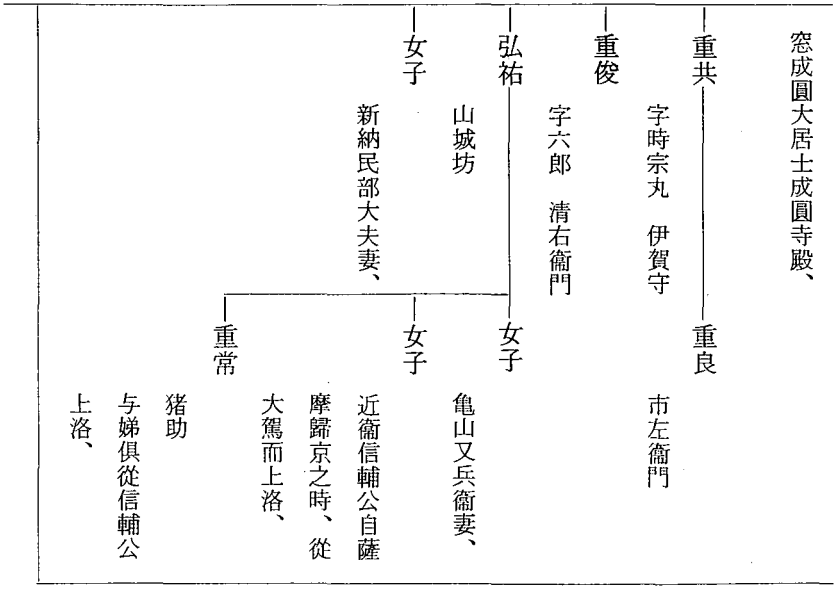
○同月十八日諸將率軍衆進到西俣敵兵相對防禦堅矣、然而島津右馬頭征久曰、肝付氏者亡父之敵且今日當敵也、其氣象宛如疾風迅雷諸將亦力戰相挑之際、敵軍敗得勝利重長有軍功、仍唱凱歌而後歸陣也、

○賜鹿屋院有國老奉書記左、　御吏衆伊集院右衞門兵衞尉久治・上原長門守常尚・新納刑部大輔忠元

○　島津家國老連署奉書

（本文書八二五二号文書ト同文ニツキ省略ス）

天正八年庚辰二月十六日逝去、年四十五、法號月



『△』重張

字菊千代丸　七郎　右近大夫　安藝守

永禄九年丙寅四月九日誕生、母肝付河内守兼續女也、

天正十年壬午戴誓紙献　太守則賜返誓紙記左、

○　島津義久書狀

（本文書ハ二五五号文書ト同文ニツキ省略ス）

文禄四年乙未九月三日称先領七ヶ所返地、吉利村田数三千二百解（解）餘號一作光配本田下野入道三清・伊集院右衛門大夫入道幸侃在判目録受、又以既移居彼之地者也、

慶長五年庚子依城州伏見宅地警衛之有高命五月廿五日首途於吉利七月十四日到着於摂州大阪矣、石田治部少輔三成與内大臣家康卿有隙、是以三成催開西之諸侯而欲拒関東先陽伏見城、尓時進

先登顕戦功　惟新君使川上久右衛門達褒美感言矣、

○同年九月十五日於濃州関之原東西大軍相對合戦移刻之際不計筑前中納言逆戈斬味方之首、由此関西之軍敗各分散不知所退去、故重張亦離于惟新君族下與喜入摂津守新納族(旗)庵本田助丞父子等倶入伊吹山任是退去、翌日到山中開則家臣等或戦死或分散、只主後四人耳其中一人祢頼實僧也、自山中至海津三里之間懼敵人之怪我謀時之宣或疾行或緩行、無障导到海津幸而乗舟到着江州小松、則前後左右敵人如堵牆充満矣、欲行而無前路欲止而無寄宿進退無如之、何以不得已而入称庄屋伊東次郎右衛門者之宅求寄宿而不許焉、不出戸外再三強以請之則日居野中之有窟穴者可午雖日居民衆多不得寄宿、僅得一穴之許在于此者一七个日、然而無食用之有助嘆息待穴中之餓死之際、爲越前州兵士忽被捜出主徒、即爲黒索拘率渡于湖水奉行観音寺観音(衍カ)寺、亦送大坂而進附于山岡修理亮殿、則所入獄舎唯頼實以爲僧體宥獄舎恣行歩矣、是以廻智略憑知識匪啻請重張之思免於修理亮殿、訴浅野紀伊守殿、紀伊守殿容訴之不可忍建乎、修理亮殿於茲乎修理殿聽乎、頼實之訴自十月朔日至拾一月六日共三十六箇日屈居獄舎、今也得原免出獄中往泉州堺寄宿於津乎久佐留滞者既有日矣、其後經陸路到藝州廣島、憑祢寝僧文識房爲学問在彼地所以越年也、

○歸思満胸徒費思慮之際會便船之行舊里、而慶長七年正月十五日帰故郷者也、

○寛永六年己巳三月十九日逝去、年六十四也、法名龍雲存白居士、

○下此之時、　太守黄門家久卿賜追悼之詠歌曰、それ生死無常ハ世の慣なから、あまり頓の事なれは、和哥一首つらね、安藝靈前に手向る物ならし

中納言家久

おもひきや春のわかれの夕かすミ
いさなはれつゝ幾らんものとは

女子

本田内藏丞親孝妻、伊豫守親正女也、

重次

母求麻相良氏女、

○早世、法名幼容、

重政

七郎

○寛永元年甲子九月廿二日早世、年廿二、法号桃谷叢甫居士、

『△』福壽丸

安藝守

七郎重政早世而安藝守重張無世子以故爲後嗣實太守黄門家久卿之庶子也、

寛永四年乙卯之秋七月予六歳之時從于家久卿到于吉利村重張之宅是又以爲後嗣所連續當家之據佳儀也、

寛永十一年甲戌十三歳之時辭當家去者也、

『△』重永

字〔安〕(伊康)千代丸　七郎　右近

重張實子皆早世福壽亦辭當家去而無継子、以故寛永十一年甲戌五月十四日爲重張猶子十三歳也、實、　黄門家久卿庶子也、

慶安二年己丑十一月十八日登江戸城謁　將軍家家光公是亦以薩摩守光久主之爲弟也、此時賜大老酒井讃岐守殿賀書矣、

○慶安三年庚寅二月廿八日於武州江戸三十三間堂射通於軽矢数百矣、同年四月十五日射通鐵根数矢勿後書矢數額所以打置也、

禰寝文書（東京大学史料編纂所影写本）

番号	年月日	文書名及びその他の収載本
		禰寝文書一
		禰寝氏正統文献外集　巻之一
		〔元祖清重文献六通〕
二八〇	建仁三年　八月　日	弥勒寺寺家公文所下文……斎藤
※（二六八）	建仁三年　十月　三日	大隅国正八幡宮公文所下文……斎藤・系図
※（二六九）	建永二年　三月　卅日	弥勒寺寺家公文所下文……斎藤・系図
※（二七〇）	建永二年　五月十七日	大隅国正八幡宮公文所下文……斎藤・系図
二八一	建永二年　五月廿四日	大隅国留守所下文……斎藤
二八二	承元五年　四月　日	大隅国留守所下文……斎藤
		〔二代清忠文献一通〕
二八三	建保二年　六月十五日	大隅国正八幡宮神官所司等解……斎藤

〔三代清綱文獻二通〕
二八四　貞應二年十一月　日　大隅国正八幡宮神官所司等解……斎藤
※（二七二）　二月卅日　北条泰時書状……斎藤・系図・県図
〔四代清親文獻二通〕
二八五　建部清綱譲状……斎藤
二八六　文永十一年二月廿八日　建部清綱所領注文……斎藤
※（　）　建仁三年七月三日　関東下文案……斎藤・正譜・系図・県図
※（　）　七月廿七日　北条時政書状案……正譜・系図・県図
〔五代清治文獻一通〕
二八七　弘安十年三月十日　沙弥善法書状……斎藤
〔六代清保文獻二通〕
二八八　元亨三年十一月廿九日　鎮西探題下知状……斎藤
二八九　嘉暦元年十二月廿日　鎮西探題下知状……斎藤
祢寝氏正統文獻外集　巻之二
〔七代清成文獻十六通〕
※（四九）　建武三年三月五日　足利尊氏御判御教書案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図

※（五〇）　建武三年　三月十日　足利尊氏御判御教書案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
※（五二）　建武三年　三月廿六日　足利尊氏御判御教書案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
※（五三）　建武三年　四月十七日　足利直義感状案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
二九〇　建武三年　九月廿八日　足利直義御判御教書案……斎藤
※（五四）　建武四年　二月廿八日　足利直義感状案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
※（五六）　建武四年　九月十五日　足利直義御判御教書案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
※（六二）　暦應三年　五月廿日　少弐頼尚書下案……東洋・斎藤・正譜・系図・県図
二九一　観應三年　正月　日　僧興融申状土代……斎藤
二九二　観應三年　八月廿二日　建部清成申状案……斎藤
二九三　観應三年　八月廿三日　尾張義冬挙状……斎藤
二九四　正平八年　十月廿二日　僧興融請取状……斎藤
二九五　四月六日　大蔵直平書状……斎藤
二九六　五月廿八日　大蔵直平書状……斎藤
二九七　八月五日　今川満範書状……斎藤
二九八　十二月八日　小石某書状……斎藤
〔八代清有文獻十五通〕
二九九　建武五年　九月十二日　島津庄政所下文……斎藤・影写

三〇〇　文和二年　十月廿二日　建部清有寄進状案……斎藤
三〇一　建徳三年　二月　日　伴兼氏外二名連署契状……斎藤
三〇二　（文和三年カ）　二月　三日　畠山直顕書状案……斎藤
三〇三　五月　三日　畠山直顕書状……斎藤
三〇四　六月　二日　相良前頼書状……斎藤
三〇五　六月　四日　相良前頼書状……斎藤
三〇六　六月十五日　畠山直顕書状……斎藤
三〇七　六月十五日　畠山直顕書状……斎藤
三〇八　八月十三日　相良前頼書状……斎藤
三〇九　八月廿九日　安楽清綱書状……斎藤
三一〇　（文明年間カ）　九月　五日　相良正任書状……斎藤
三一一　（応永二年）　九月十五日　安楽清綱書状……斎藤
三一二　九月廿二日　祐重書状……斎藤
三一三　十月十三日　安楽清綱書状……斎藤

禰寝文書　二

禰寝氏正統文獻外集　巻之三

〔九代久清文獻上巻三十三通〕

三一四　永和三年十月廿八日　一揆神水契状案……斎藤
三一五　正月十四日　祥鶴書状……斎藤・影写
三一六　正月廿三日　某書状……斎藤
三一七　正月廿九日　宮内大輔守政書状……斎藤・影写
三一八　正月廿七日　名和慈冬書状……斎藤
三一九　閏正月十八日　今川満範書状……斎藤
三二〇　二月四日　今川満範書状……斎藤・影写
三二一　二月五日　建部久清請文……斎藤
三二二　二月九日　今川三雄書状……斎藤
三二三　二月十日　今川満範書状……斎藤・影写
三二四　二月十三日　兵庫助久兼書状……斎藤
三二五　二月十七日　今川満範書状……斎藤・影写

三二六　二月廿二日　今川満範書状……斎藤
三二七　二月廿五日　紹喜書状……斎藤
三二八　二月廿八日　今川満範書状……斎藤
三二九　三月三日　道讃書状……斎藤・影写
三三〇　三月三日　斎藤明真書状……斎藤
※（一七九）　三月三日　今川了俊（真世）書状……斎藤・影写・系図・県図
三三一　（永和三年カ）三月六日　税所介祐義請文……斎藤・影写
三三二　三月六日　今川満範書状……斎藤・影写
三三三　三月八日　彦子書状……斎藤
三三四　三月廿四日　今川満範書状……斎藤・影写
三三五　四月廿日　和田正直書状……斎藤
三三六　（至徳二年カ）四月廿八日　今川三雄書状……斎藤・影写
三三七　（永和二年）六月二日　今川満範書状……斎藤
三三八　五月廿七日　名和慈冬書状……斎藤
三三九　六月七日　沙弥堯覚書状……斎藤
三四〇　六月七日　建部久清請文……斎藤
三四一　六月十二日　建部久清請文案……斎藤

三四二　六月十四日　名和慈冬書状……斎藤・影写
三四三　六月廿日　今川満範書状……斎藤・影写
三四四　六月廿六日　今川満範書状……斎藤
三四五　六月廿九日　名和慈冬書状……斎藤・影写

櫛寝氏正統文獻外集　巻之四

〔九代久清文獻下巻四十通〕

三四六　（永和二年）七月三日　今川了俊貞世書状……斎藤
三四七　七月三日　久清書状……斎藤
三四八　七月十日　今川満範書状……斎藤
三四九　七月十二日　今川満範書状……斎藤・影写
三五〇　七月十六日　兼忠書状……斎藤
三五一　七月十六日　今川満範書状……斎藤
三五二　七月十九日　今川満範書状……斎藤
三五三　（永徳元年）七月廿一日　今川満範書状……斎藤
三五四　七月廿一日　野辺盛久書状……斎藤・影写
三五五　七月廿二日　斎藤明真書状……斎藤

三五六　七月廿五日　名和慈冬書状……斎藤
三五七　七月廿七日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
三五八　七月卅日　今川満範書状……斎藤・影写
三五九　七月卅日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
三六〇　閏七月八日　今川満範書状……斎藤
三六一　八月三日　今川満範書状……斎藤
三六二　八月三日　今川満範書状……斎藤
三六三　八月十一日　彦子書状……斎藤・影写
三六四　八月十四日　播磨守家秀請文……斎藤
三六五　八月十六日　平千代熊丸書状案……斎藤・影写
三六六　八月十七日　名和慈冬書状……斎藤・影写
三六七　八月十八日　今川満範書状……斎藤
三六八　八月十九日　今川満範書状……斎藤
三六九　八月廿一日　能登守右忠請文……斎藤
三七〇　八月廿二日　税所介祐義書状……斎藤
三七一　八月廿四日　沙弥昌賢書状……斎藤
三七二　八月卅日　建部久清書状……斎藤

三七三　九月十四日　今川満範書状……斎藤
三七四　九月廿一日　斎藤明真書状……斎藤・影写
三七五　十月八日　今川満範書状……斎藤・影写
三七六　十月八日　野辺盛久書状……斎藤・影写
三七七　十月十日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
三七八　十一月九日　今川満範書状……斎藤・影写
三七九　十月廿七日　相良為続書状……斎藤・影写
三八〇　十一月十九日　今川了俊貞世書状……斎藤
三八一　十一月廿四日　斎藤明真書状……斎藤
※（二七七）　十二月六日　少弐頼尚書状……斎藤・影写・系図・県図
※（二七八）　十二月九日　少弐頼尚書状……斎藤・影写・系図・県図
三八二　十二月十日　忠右書状……斎藤・影写
三八三　十二月十一日　今川満範書状断簡……斎藤

禰寝文書 三

禰寝氏文獻雑聚　巻之一

〔諸文獻二十通〕

※（一七三）　仁治二年十一月　八　日　北条朝時袖加判右衛門尉宗康奉書……斎藤・系図・県図

※（一七四）　寛元元年　八　月廿九日　北条朝時袖加判沙弥生阿奉書……斎藤・系図・県図

三八四　徳治三年十一月　　日　祢寝南俣水田名寄帳……斎藤

三八五　文保二年　八　月十三日　目代法橋盛範請取状……斎藤・影写

三八六　元亨四年　二　月　廿　日　鎮西探題御教書……斎藤

三八七　元亨四年　二　月　廿　日　鎮西探題御教書……斎藤

三八八　嘉暦三年　九　月　　日　大宰府主神司本司等申状……斎藤

三八九　元徳三年　八　月　卅　日　関東御教書案……斎藤

三九〇　應安七年十二月　　日　建部久清譲状……斎藤

三九一　永和二年　八　月　四　日　将軍足利義満家御教書案……斎藤

三九二　永和二年　八　月　四　日　将軍足利義満家御教書案……斎藤

三九三　永和二年　八　月十二日　将軍足利義満家御教書案……斎藤

三九四　永和二年　十月廿四日　今川了俊（貞世）事書案……斎藤
三九五　康暦二年　十月　十日　今川了俊（貞世）吹挙状……斎藤
三九六　永徳元年　八月　六日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
三九七　永徳元年　十月十一日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
三九八　永徳二年　十月十七日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
三九九　将軍（足利義満）家事書案……斎藤
四〇〇　應永元年　八月十六日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
四〇一　應永元年　八月十六日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
四〇二　應永元年　八月十六日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
四〇三　應永元年　八月十六日　将軍（足利義満）家事書案……斎藤
四〇四　應永元年　八月十六日　将軍（足利義満）家御教書案……斎藤
四〇五　「應永二年」　京都不審条々事書……斎藤
四〇六　應永五年　七月　日　初任引出物支配注進状……斎藤
四〇七　應永十八年三月十九日　清茂譲状……斎藤

禰寝氏文獻雑聚　巻之二

〔諸文獻二十四通〕

四〇八　正月廿五日　新平右衛門尉某書状……斎藤
四〇九　二月六日　清俊書状……斎藤・影写
四一〇　三月九日　法印某書状……斎藤
四一一　（康暦二年カ）六月十四日　名和慈冬書状……斎藤
※（二七一）　六月廿八日　六波羅御教書……斎藤・系図・県図
四一二　七月二日　忠清書状……斎藤
四一三　七月十日　今川満範書状……斎藤
四一四　七月十三日　胤久・貴幸連署書状……斎藤
四一五　七月十二日　是親書状……斎藤
四一六　七月十六日　兼房書状……斎藤
四一七　七月廿八日　今川満範書状……斎藤
四一八　八月廿一日　能登守右忠書状……斎藤
四一九　八月三日　足利義満御内書案……斎藤・影写
四二〇　八月三日　足利義満御内書案……斎藤・影写

四二一　八月廿七日　大隅守護所代藤原某書状……斎藤
四二二　九月八日　西阿書状……斎藤
四二三　八月廿日　今川満範書状……斎藤
四二四　九月十五日　某施行状……斎藤
四二五　十二月廿五日　今川満範書状……斎藤
四二六　今川了俊貞世事書案……斎藤
四二七　祢寝氏代々日記案……斎藤
四二八　今川満範書状断簡……斎藤・影写
四二九　菊池一族注文……斎藤
四三〇　今川了俊貞世書状断簡……斎藤・影写

禰寝氏文獻雜聚　巻之三

〔諸文獻二十通〕

四三一　正元元年後十月　五日　沙弥蓮生・僧弁継連署起請文……斎藤
四三二　延慶二年　九月十二日　鎮西探題下知状……斎藤
四三三　正和元年　八月廿二日　実清・静玄連署奉書案……斎藤
四三四　正和五年　三月廿五日　正八幡宮造営表葺用途支配注文……斎藤

四三五　元亨三年　五月十八日　紀宗継請文……斎藤
四三六　嘉暦二年　十月　八日　沙弥そんち譲状案……斎藤
四三七　建武三年　四月　五日　平中村家忠着到状……斎藤
四三八　「暦應三年」　五月　十日　高水普果書下案……斎藤
四三九　暦應三年　五月十三日　沙弥円妙請文案……斎藤
四四〇　貞和六年　二月　九日　建部清成譲状案……斎藤
四四一　應安二年十二月十九日　蔵人藤原仲光奉口宣案……斎藤・影写
四四二　祢寝南俣水田取帳断簡……斎藤
※（一四四）　明徳元年　七月十八日　将軍足利義満家御教書……斎藤・正譜
四四三　閏五月　三日　清秀書状……斎藤
四四四　九月廿八日　頼泰書状案……斎藤
四四五　某書状追而書……斎藤
四四六　諏訪祭礼頭役支配状……斎藤
四四七　犬追物手組……斎藤
四四八　犬追物矢答事書……斎藤
四四九　十一月廿一日　僧栄春奉書案……斎藤
四五〇　某起請文前書……斎藤

四五一　島津庄大隅方寄郡田数注文……斎藤
四五二　建部重虎契状案……斎藤
四五三　祢寝氏代々日記案……斎藤・影写
四五四　某書状断簡……斎藤

禰寝文書　四

水戸黄門詳覧文集乾

四五五　建武三年十一月廿一日　建部重種着到状……鹿大
四五六　建武三年十二月十四日　畠山直顕軍勢催促書下……鹿大
四五七　建武三年十二月十四日　畠山直顕軍勢催促書下……鹿大
四五八　建武四年　四月廿三日　建部清道軍忠状……鹿大
四五九　暦應二年　八月廿七日　建部清道軍忠状……鹿大
四六〇　暦應四年後四月　日　祢寝重種軍忠状……鹿大
四六一　暦應四年後四月　日　祢寝清増軍忠状……鹿大
四六二　暦應五年　九月　日　祢寝重種軍忠状……鹿大
四六三　暦應四年　九月　日　祢寝重種軍忠状……鹿大

四六四　暦應四年　九月　日　祢寝清増軍忠状……鹿大
四六五　暦應五年　九月　日　祢寝清増軍忠状……鹿大
四六六　観應二年　八月　日　建部清増軍忠状……鹿大
四六七　文和三年　三月　日　祢寝清増軍忠状……鹿大
四六八　文和五年　四月廿八日　畠山直顕書下……鹿大
四六九　延文二年　五月　日　建部清増軍忠状……鹿大
四七〇　延文二年　五月　日　祢寝重種軍忠状……鹿大
四七一　應永十九年　三月廿日　建部清平置文……鹿大
四七二　正平八年　三月　二日　浄西書状……鹿大
四七三　建武二年　八月十八日　大隅国目代源某書下……鹿大
四七四　延文三年　六月　十日　建部清増譲状……鹿大
四七五　應永九年十二月　九日　沙弥祐泉（角信俊）譲状……鹿大
四七六　應永九年十二月　九日　沙弥祐泉（角信俊）譲状……鹿大
四七七　一味（建部尊重）書状案……鹿大
四七八　一味（建部尊重）書状案……鹿大
四七九　一味（建部尊重）書状案……鹿大
四八〇　一味（建部尊重）書状案……鹿大

四八一　慶長二年　十一月廿八日　建部重虎起請文……鹿大
四八二　正安四年　正月廿六日　有栄沽却状……鹿大
四八三　乾元二年　六月廿一日　沙弥行恵譲状
四八四　嘉元二年　四月四日　清元避状……鹿大
四八五　嘉元三年　三月十八日　沙弥しやうい・建部親明連署沽却状案……鹿大
四八六　嘉元三年　六月八日　沙弥さいれん沽却状案
四八七　嘉元三年　六月十日　沙弥さいれん請取状
四八八　嘉元四年　二月廿四日　建部清元譲状……鹿大
四八九　元弘三年　正月十一日　浄西書状……鹿大
四九〇　けんこう（元弘）三年十一月四日　日念（清政）譲状……鹿大
四九一　元弘三年十二月廿二日　沙弥某書下……鹿大
四九二　建武元年　十月廿五日　建部清光譲状
四九三　建武二年　十月七日　修理所検校源某請文案……鹿大
四九四　康永三年　六月廿九日　沙弥道恵譲状……鹿大
四九五　貞和六年十一月十七日　沙弥道恵譲状……鹿大
四九六　文和四年　八月廿五日　沙弥道恵譲状……鹿大
四九七　延文三年　六月十日　建部清増譲状……鹿大

四九八　應永九年　十月廿八日　角九郎入道譲状
四九九　應永十七年　六月三日　祢寝清平沽却状……鹿大
五〇〇　應永卅二年三月廿九日　角清茂沽却状……鹿大
五〇一　應永卅二年三月廿九日　角孫四郎清種沽却状
五〇二　明應五年十二月　五日　角清宣譲状……鹿大
五〇三　一味建部尊重書状案……鹿大
五〇四　正嘉二年　十月十八日　大隅守護名越時章裁許下知状……坂口
五〇五　正嘉二年　十月廿五日　沙弥某施行状……坂口
五〇六　文永六年　九月　廿日　六波羅御教書……坂口
五〇七　文永八年　十月十六日　関東御教書……坂口
五〇八　文永九年　十月廿一日　大隅守護代藤原盛定挙状……坂口
五〇九　文永十年　四月　八日　大隅守護代沙弥浄念挙状案……坂口
五一〇　弘安二年　三月廿六日　関東御教書……坂口
五一一　弘安四年　六月　二日　関東下知状……坂口
五一二　弘安六年　十月廿二日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五一三　十一月　四日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五一四　弘安六年十一月十八日　大隅守護千葉宗胤裁許下知状……坂口

五一五　弘安六年十一月廿二日　大隅守護代道意書下……坂口
五一六　弘安七年　五月十二日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五一七　弘安八年十二月十八日　大隅守護千葉宗胤書下……坂口
五一八　弘安九年　二月廿一日　唯仏書状……坂口
五一九　弘安九年　八月晦日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五二〇　正應元年　八月一日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五二一　正應四年　九月三日　大隅守護千葉宗胤覆勘状……坂口
五二二　正應六年　五月七日　佐多定親代治部房了親着到状……坂口
五二三　永仁三年　五月一日　関東下知状……坂口
五二四　八月六日　為清書状……坂口
五二五　永仁五年　八月四日　大隅守護北条時直覆勘状……坂口
五二六　永仁二年　八月二日　大隅守護北条時直覆勘状……坂口
五二七　正安元年　十月十四日　光忠・家綱連署書下……坂口
五二八　正安元年十一月八日　大隅守護北条時直覆勘状……坂口
五二九　正安元年十二月四日　鎮西探題裁許下知状……坂口
五三〇　正安二年　後七月廿六日　大隅守護北条時直覆勘状……坂口
五三一　正安三年　七月廿五日　大隅守護北条時直覆勘状……坂口

五三二　嘉元三年　後十二月廿九日　為国覆勘状……坂口
五三三　正和四年　十月　十日　建部信親避状
五三四　正和五年後十月　五日　建部信親沽却状
五三五　嘉暦三年　八月廿九日　鎮西下知状……出水
五三六　建長五年十二月廿八日　将軍宗尊親王家政所下文案……坂口
五三七　久安三年　七月十五日　前大隅掾建部親助申状……影写
五三八　文永十一年九月　日　佐汰宗親所領注文案
五三九　弘安四年　七月　三日　六波羅施行状案……坂口
五四〇　弘安六年　五月　日　執印大法師某下文
五四一　正安元年　十月廿五日　建部親治和与状案
五四二　弘安八年　十月　日　建部定親所領注文案……坂口
五四三　弘安九年閏十二月　日　建部定親重申状……坂口
五四四　（永仁）ゑんにん二年六月一日　ゆしん・建部定親連署譲状……坂口
五四五　永仁四年　二月十三日　建部親治書状……坂口
五四六　弘安八年　十月　日　建部定親所領注文案
五四七　元亨三年　三月十八日　建部信親沽却状……出水
五四八　正和五年十一月十二日　建部信親譲状……出水

五四九　元徳四年　八　月十五日　有河福寿丸代宗純和与状……坂口
五五〇　暦應五年　五　月十二日　建部親房沽却状……坂口
五五一　建武五年閏七月卅日　世戸山のゆいあ請文……坂口
五五二　けんかう（元亨）四年正月廿六日　建部ちかあつ沽却状……出水
五五三　正嘉二年　九　月廿一日　建部親綱和与状
五五四　文永二年　十　月十二日　関東御教書写
五五五　文永六年　正月　卅　日　関東御教書写
五五六　文永六年　六　月廿四日　関東御教書写
五五七　文永七年　五　月廿六日　関東御教書写
五五八　文永七年十二月廿五日　関東御教書写
五五九　文永八年　十　月十六日　関東御教書写
五六〇　正和元年十二月廿七日　鎮西探題裁許状案
五六一　文保二年十一月　日　佐多掾親治代建部親純申状案
五六二　元應二年十二月　一　日　鎮西探題施行状案
五六三　弘安十年　十　月廿四日　関東下知状写……鳥濱
五六四　元亨三年　四　月廿一日　藤原時義譲状写……鳥濱
五六五　嘉暦二年　二　月　四　日　沙弥行智譲状写……鳥濱

五六六　嘉暦二年　二月　四日　沙弥行智所従譲状写……鳥濱
五六七　元徳二年十一月十九日　沙弥行智譲状写……斎藤・鳥濱
五六八　天授三年十一月廿一日　祢寝院見作田畠注進状写……鳥濱
五六九　貞治二年　六月　一日　島津氏久軍勢催促状写
五七〇　元仁二年　三月　七日　沙弥仏念譲状……鳥濱
五七一　嘉暦三年十一月十五日　沙弥道勝重譲状案……鳥濱
五七二　嘉暦三年十一月十五日　沙弥道勝書下案……鳥濱
五七三　嘉暦三年十一月十五日　沙弥道勝・藤原義子連署譲状案……鳥濱
五七四　嘉暦三年十一月十五日　沙弥道勝・義子連署譲状案……鳥濱
五七五　暦應元年十二月廿二日　藤原義親置文……鳥濱
五七六　暦應二年十一月　十日　沙弥道勝譲状案……鳥濱
五七七　暦應二年十一月　十日　沙弥道覚・藤原義村連署証状案……鳥濱
五七八　暦應二年十一月　十日　沙弥道勝外三名連署契約状写……鳥濱
五七九　暦應三年十一月廿三日　沙弥道心請取状写……鳥濱
五八〇　暦應三年十一月廿三日　藤原義子置文写……鳥濱
五八一　観應二年　十月　九日　藤原義武契約状案……鳥濱
五八二　観應二年　十月　九日　藤原義武契約状写……鳥濱

五八三　元亨二年十一月十一日　鎮西探題裁許下知状
五八四　元徳二年　四　月廿三日　建部助清和与状
※（四四一）　應安二年十二月十九日　蔵人藤原仲光奉口宣案……斎藤・影写
五八五　永和四年　二　月　九　日　今川満範軍勢催促書下
五八六　天文十三年　七月　六　日　堯清証状
五八七　天文廿四年　八月　吉　日　紙漉河内日記
五八八　文禄二年　三　月廿四日　建部重虎証状
五八九　天正廿一年二月廿四日　建部重虎証状
五九〇　文禄二年　三　月廿三日　建部重虎証状
五九一　文禄五年　建部重虎証状
五九二　慶長二年　三　月廿一日　根占重張・野久尾重忠連署証状

禰寝文書　五

水戸黄門詳覧文集坤

※（一五七）　六　月　二　日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（三七六）　十　月　八　日　野辺盛久書状……斎藤・影写

※（三三一）　三月六日　税所介祐義請文……斎藤・影写
※（一九三）　十二月十二日　前出雲守師綱書状……東洋・正譜
※（三五八）　七月卅日　今川満範書状……斎藤・影写
※（三五四）　七月廿一日　野辺盛久書状……斎藤・影写
※（三六六）　八月十七日　名和慈冬書状……斎藤・影写
※（三七五）　十月八日　今川満範書状……斎藤・影写
※（一四六）　正月五日　沙弥昌賢書状……正譜
※（三一五）　正月十四日　祥鶴書状……斎藤・影写
※（一五一）　二月十八日　今川了俊貞世書状……正譜
※（一六七）　八月六日　肥後高基書状……東洋・正譜
※（一五三）　四月八日　今川了俊貞世書状写……正譜
※（一八七）　十一月十五日　今川了俊貞世書状写……東洋・正譜
※（三四五）　六月廿九日　名和慈冬書状……斎藤・影写
※（三六三）　八月十一日　彦子書状……斎藤・影写
※（一七三）　八月廿二日　周防介隆能書状……東洋・正譜
※（一七七）　八月廿八日　今川満範書状……東洋・正譜
※（四一九）　八月三日　足利義満御内書案……斎藤・影写

※（四二〇）　八月三日　足利義満御内書案……斎藤・影写
※（三七八）　十一月九日　今川満範書状……斎藤・影写
※（三三六）　四月廿八日　今川三雄書状……斎藤・影写
※（一六四）　七月十四日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（三二九）　三月三日　道譜書状……斎藤・影写
※（三四九）　七月十二日　今川満範書状……斎藤・影写
※（四三〇）　今川了俊貞世書状断簡……斎藤・影写

五九三　（永和二年カ）　七月卅日　斎藤明真書状……斎藤
※（四〇九）　二月六日　清俊書状……斎藤・影写

五九四　九月十五日　実久書状
※（一九二）　十二月廿五日　今川満範書状……東洋・正譜
※（一七六）　八月廿七日　今川満範書状……東洋・正譜
※（三三四）　三月廿四日　今川満範書状……斎藤・影写
※（一六六）　閏七月廿二日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（一七五）　八月廿六日　肝付兼氏書状……東洋・正譜
※（三三二）　三月六日　今川満範書状……斎藤・影写
※（一七四）　八月廿二日　今川満範書状……東洋・正譜

※（三二三）　二月十日　今川満範書状……斎藤・影写
※（三七七）　十月十日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
※（三四二）　六月十四日　名和慈冬書状……斎藤・影写
※（一五五）　五月四日　今川了俊貞世書状……正譜
※（一七九）　三月三日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写・系図・県図
※（三八二）　十二月十日　忠右書状……斎藤・影写
※（一五八）　六月五日　野辺盛久書状……東洋・正譜
※（一五二）　三月五日　今川了俊貞世書状写……正譜
※（三五七）　七月廿七日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
※（一五〇）　閏正月十八日　今川了俊貞世書状……正譜
※（三七九）　十月廿七日　相良為続書状……斎藤・影写
※（二七七）　十二月六日　少弐頼尚書状……斎藤・影写・系図・県図
※（二七八）　十二月九日　少弐頼尚書状……斎藤・影写・系図・県図
※（一六五）　七月廿日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（三四三）　六月廿日　今川満範書状……斎藤・影写
※（三二五）　二月十七日　今川満範書状……斎藤・影写
※（三二〇）　二月四日　今川満範書状……斎藤・影写

※（一八八）　十一月十七日　今川満範書状……東洋・正譜
※（一六一）　六月廿五日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（三一七）　正月廿九日　宮内大輔守政書状……斎藤・影写
※（一八一）　九月四日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（一八〇）　九月四日　今川了俊貞世書状……東洋・正譜
※（三五九）　七月卅日　今川了俊貞世書状……斎藤・影写
※（一七九）　九月三日　斎藤明真書状……東洋・正譜
※（三七四）　九月廿一日　斎藤明真書状……斎藤・影写
※（三六五）　八月十六日　平千代熊丸書状案……斎藤・影写
※（一八五）　十月七日　今川満範書状……東洋・正譜
※（二〇一）　応安四年八月十四日　建部久清譲状……正譜
※（二〇三）　応永三年八月十一日　蔵人頭広橋兼宣奉口宣案……正譜・系図・県図
※（二〇四）　応永四年六月十五日　渋川満頼堵安書下……正譜・系図・県図
※（二〇六）　応永十五年十月十九日　島津玄仲元久契状……正譜・系図・県図
※（二〇八）　応永十八年十月九日　島津久豊宛行書下……正譜・系図・県図
※（二〇九）　応永十八年十一月十八日　島津久豊宛行書下……正譜・系図・県図
※（二一二）　応永廿一年六月廿三日　島津久豊宛行書下……正譜・系図・県図

※（二二三）　應永廿一年六月廿五日　島津久豊書下……正譜・系図・県図
※（二二〇）　應永十八年十二月十一日　島津久豊宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二一）　應永十八年十二月廿七日　島津久豊契状……正譜・系図・県図
※（二二三）　應永廿三年九月　九日　島津尊久忠国書下写……正譜・系図・県図
※（二二五）　六月　九日　島津好久挙状……斎藤・正譜
※（二二四）　十一月廿四日　島津久豊書状……正譜
※（二二二）　應永十六年七月十七日　建部清平譲状……正譜
五九五　永享六年十二月十二日　伊作安鶴丸島津教久契状案……斎藤・影写
五九六　永享七年　四月　廿日　和田正直契状……斎藤・影写
※（二二七）　永享七年　八月廿三日　島津忠国安堵書下……正譜・系図・県図
※（二二八）　永享七年十二月　五日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二九）　永享七年十二月　五日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二五）　永享八年　八月　三日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二〇）　永享八年　八月　三日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二六）　永享九年　二月廿八日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二二七）　永享九年　八月　一日　島津忠国宛行書下……正譜・系図・県図
※（二三一）　文安二年　十月　三日　島津忠国契状……正譜・系図・県図

※（二三三）　文安三年　九月十六日　北郷知久契状……正譜
五九七　文安三年　九月十六日　秀兼・正存・兼綱連署契状……斎藤・影写
※（二三四）　享徳二年　七月十二日　島津忠国安堵書下……正譜・系図・県図
※（二三一）　七月十五日　島津忠国書状……正譜
五九八　六月十日　金王丸書状案……斎藤
※（三八五）　文保二年　八月十三日　目代法橋盛範請取状……斎藤・影写
五九九　九月十三日　長房書状……斎藤・影写
※（二七五）　元弘三年　六月十五日　尊良親王令旨……斎藤・影写・系図・県図
六〇〇　元弘三年　七月　日　祢寝清武申状……斎藤・影写
六〇一　元弘三年　七月廿日　建部清武着到状……斎藤・影写
六〇二　元弘三年　十月廿五日　掃部助某請取状……斎藤・影写
六〇三　建武元年　六月十六日　雑訴決断所牒……斎藤・影写
六〇四　建武三年十一月廿一日　建部清武着到状……斎藤・影写
六〇五　康永二年　四月十三日　建部清武置文案……斎藤・影写
六〇六　元亨三年十二月　七日　関東安堵下知状……斎藤
※（二九九）　建武五年　九月十二日　島津庄政所下文……斎藤・影写
※（二二八）　嘉吉元年十二月十二日　将軍足利義勝家御教書……正譜

※（二三〇）　嘉吉二年　十月廿五日　将軍足利義満家御教書……正譜
※（二二九）　六月廿八日　建部重清請文……斎藤・正譜
※（二三四）　文明十二年二月廿七日　沙弥茂清重清置文……東洋・正譜
六〇七　八月廿二日　尾張義武書状……斎藤・影写
六〇八　十二月廿日　藤原定□書状……斎藤
六〇九　五月二日　菊池持朝書状……斎藤
六一〇　十二月三日　村田経安・本田兼親連署書状……斎藤
六一一　八月十七日　町田助久書状……斎藤
六一二　九月廿八日　永久書状……斎藤
※（二三九）　閏四月六日　島津忠治書状……東洋・正譜・系図・県図
※（二四三）　十二月十二日　伊東義祐書状……東洋・正譜
※（二四七）　二月八日　島津忠朝書状……東洋・正譜
※（二四〇）　七月十二日　島津忠治書状……東洋・正譜
六一三　六月廿一日　島津忠朝書状……斎藤
※（二四二）　十月二日　有馬尚鑒書状……東洋・正譜
六一四　閏八月十七日　貞景書状……斎藤
※（二三八）　永正九年　四月廿四日　伊地知重周起請文……東洋・正譜

※（二三六）　文亀三年十二月十六日　右中弁藤原宣秀奉口宣案……東洋・正譜・系図・県図
※（二三七）　永正元年　三　月　廿　日　右中弁藤原宣秀奉口宣案……東洋・正譜・系図・県図
※（二四四）　飛鳥井雅縁詠三十首和歌……東洋・正譜

禰寝文書　六

禰寝氏庶流文獻　巻之二

〔諸家文獻十七通〕

※（二七五）　元弘三年　六　月十五日　尊良親王令旨……斎藤・影写・系図・県図
※（六〇〇）　元弘三年　七　月　　日　祢寝清武申状……斎藤・影写
※（六〇一）　元弘三年　七　月　廿　日　建部清武着到状……斎藤・影写
※（六〇二）　元弘三年　十　月廿五日　掃部助某請取状……斎藤・影写
※（六〇三）　建武元年　六　月十六日　雑訴決断所牒……斎藤・影写
※（六〇四）　建武三年十一月廿一日　建部清武着到状……斎藤・影写・池端
※（六〇五）　康永二年　四　月十三日　建部清武置文案……斎藤・影写
六一五　康永二年十二月廿八日　建部清武譲状……斎藤
六一六　康永三年　八　月　十　日　建部清武寄進状……斎藤

六一七　應安五年十二月　五日　祢寝久清代弾正忠信成申状……斎藤
六一八　永和四年　二月　九日　今川満範（軍勢催促）書下……斎藤
※（五九七）　文安三年　九月十六日　秀兼・正存・兼綱連署契状……斎藤・影写
※（五九五）　永享六年十二月十二日　伊作安鶴丸（島津教久）契状案……斎藤・影写
※（五九六）　永享七年　四月　廿日　和田正直契状……斎藤・影写
六一九　正月十八日　崇麟書状……斎藤
※（六〇七）　八月廿二日　尾張義武書状……斎藤・影写
※（五九九）　九月十三日　長房書状……斎藤・影写

〔今川了俊書状等　十八通〕

※（六二〇）　十二月十三日　今川了俊（貞世）書状案
六二〇　（永和三年カ）十二月十五日　今川了俊（貞世）書状案
六二一　（永和三年カ）十二月十四日　今川了俊（貞世）書状案
六二二　十一月廿二日　今川了俊（貞世）書状案
六二三　（承和三年カ）九月十五日　今川了俊（貞世）書状案
六二四　（康暦元年カ）閏四月　三日　今川了俊（貞世）書状案
六二五　康暦元年閏四月　三日　今川了俊（貞世）事書案
六二六　（永和四年カ）三月　五日　今川了俊（貞世）書状案

六二七　（永和二年カ）五月廿五日　今川了俊（貞世）書状案
六二八　（永和四年カ）三月五日　今川了俊（貞世）書状案
六二九　八月廿六日　平千代熊丸書状案
六三〇　四月廿七日　近衛稙家御内書案
六三一　四月廿七日　近衛稙家御内書案
六三二　四月廿七日　進藤長英書状案
六三三　九月二日　進藤長英書状案
六三四　九月四日　島津忠朝書状案
六三五　應永五年三月十六日　興宗寺算田帳
六三六　十一月十八日　近衛信尹書状

〔禰寝文書（治建文献）〕

六三七　治暦五年正月廿九日　藤原頼光所領配分帳案
六三八　保安二年正月十日　大隅国権大掾建部親助解
六三九　保安二年六月十一日　大隅国正八幡宮政所下文
六四〇　保安二年十月十一日　大隅国司庁宣
六四一　天養二年三月十二日　前大隅掾建部頼清処分状
六四二　天養二年四月廿日　前大隅掾建部頼高置文

六四三　久安四年　五月　九日　前大隅掾建部清貞譲状
※（五三七）　久安三年　七月十五日　前大隅掾建部親助申状……影写
六四四　建久三年　九月　日　大隅国正八幡宮神官等解
六四五　文治三年十一月　日　大隅国正八幡宮神官等解

（表紙）

禰寢氏正統文献外集　巻一、二

禰　寢　文　書　一

（原表紙）

禰寢氏正統文獻外集　巻之一

○二八〇　弥勒寺寺家公文所下文

検校法印（祐清）（花押）

寺家公文所下　正宮公文所

可早以清重法師爲禰寢南俣院地頭職事、

右件職、爲相傳之由、依訴申、賜預將軍家御消息云々、

有限御年貢物等、無懈怠可令進済、奉爲社家不可忽緒之

狀、依　長吏仰、下知如件、

建仁三年八月　日　　公文伊勢介藤原（花押）

権寺主法師

少別當正信（花押）

○二八一　大隅國留守所下文

留守所下　祢寢南俣

可早且任　關東御教書［　　］

相傳文書実、停止藤原重能訴論、以本領主清重法師、

令領掌當俣地頭郡司職事、

右、去二月廿九日關東御教書、今月廿四日到来、狀偁、

大隅國祢寝南俣□事、重延死去之後、以清重法師□補事実也、但論人出来時者、召問兩方、可有左右之由、故　左衛門督家御時去建仁三年七月三日給證文候了、而件狀爲謀書之間、菱苅住人重能依出訴訟被遣問狀候、□重能無左右領掌之条、甚無謂候□事欤、兩方之理非糺決以前、□法師可領知之由、所候也、仍執啓如件者、早任　御教書并相傳領掌之實、停止彼謀略、可令清重法師知行之狀、所仰如件、

建永二年五月廿四日　　大判官代藤原（花押）

検　校　沙　弥（花押）

田　所　散　位（花押）

税所□

惣検校藤原（花押）

任用

目大中臣

権大掾紀判官（花押）

権大掾藤原（花押）

目代□（花押）

○二八二　大隅國留守所下文

（端裏書）「□書文」

留守所下

可早任京都御外題旨、以尼心妙領掌、桑東郷内永谷村并所所田畠等事、

副尼心妙賜御外題

右、就承元四年五月　日在廳解、賜尼心妙御外題狀偁、如狀者、尼心妙者、所帯證文在之、而尼西念者、不帯一紙之證文、掠申京都御外題、致其妨云々者、停止件妨、任所帯之證文、可令尼心妙領掌也、若猶有子細者、兩人遂上洛、經一決可依道理之狀如件云々者、任御下題旨、可致沙汰之狀如件、

承元五年四月　日

大判官代藤原（花押）

検　校　沙　弥

検　校　沙　弥（花押）

田所 検 校 建 部（花押）
惣検兼税所□（花押）

（継目裏花押）

任用
目 大 中 臣（花押）
権 大 掾 建 部
権 大 掾 紀（花押）
目代藤原 （花押）

（継目裏花押）

（甲）○二八三 大隅國正八幡宮神官所司等解

正八幡宮神官所司等解 申請 本家政所裁事、

請被殊任言上旨、賜御教書御神領祢寝院南俣先祖相傳本領主建部清忠申關東參向由子細狀、

副進 清忠解狀壹通在古今證文等

右、得清忠解狀偈、謹検案内、彼院南俣清忠先祖相傳領掌地也、仍清忠親父清重入道請継天無他妨領掌之間、爲清忠其嫡子、任相傳所譲与也、而近年爲横人故菱苅重信言上關東、致其妨之時、清重入道子細披陳之日、任先跡之道理、可清重入道領掌之由、關東御下文兩度給畢、然間親父清重入道見存之時、依爲其嫡子清忠所譲与也、誠御神領寄進之条、清忠之先祖数代證文顕然之上、神官存知也、争不蒙御裁断哉、隨巨細旨、所進證文等具也、望請宮政所裁、且依相傳道理、且任親父譲狀、賜宮解言上本家爲參向關東粗勒在狀言上如件、以解云云者、爲彼清忠御神領寄進重代相傳本領主之子孫、争不蒙御裁断哉、望請 本家政所裁、任言上旨、爲賜御教書言上如件、故以解、

建保二年六月十五日 祝 部 柒 嶋（自署）「則真」（以下同ジ）
宮 主 法 師「安増」
宮 主 法 師「俊覺」
宮 主 法 師「宗兼」
宮 主 法 師「琳覺」
宮 主 法 師「慶運」
宮 主 法 師「俊慶」

権座主大法師「円秀」
公文執當大法師「兼澄」
権政所散位息長「榮道」
御馬所検校散位大蔵「親平」
座主大法師「仁西」
修理所検校散位酒井「爲宗」
政所検校散位大蔵「守光」
御供所検校散位息長「吉清」
権執印散位息長「清道」

爲代代　將軍家御家人、賜御下文無妨之間、先日雖讓与子息清忠、去承久二年其身死亡畢、仍承久三年三月廿三日相副次第相傳證文手継讓得清綱之程、清重入道生涯有限、去年冬比死去畢、仍無相違所令知行也、但依爲神領名主殊奉仰　本家御勢之間、賜　宮解罷入　關東見參、令勤仕御家人役事先例也、望請　宮政所裁、賜宮解言上本家政所、爲　關東見參勒子細言上如件云云者、於當院名頭職者□入道先祖相傳之所帯也、以之□□□与清綱顕然也、尤欲被言上　關東之狀、言上如件、

貞應二年十一月　日　祝　散位　柴嶋（自署）（以下同ジ）「則真」
宮主法師「円兼」
宮主法師「仁海」
宮主法師「安増」
宮主法師「俊範」
宮主法師「宗兼」
宮主法師「琳覚」
権座主大法師「慶運」

○二八四　大隅國正八幡宮神官所司等解

正八幡宮神官所司等解　申請　本家政所裁事、
請被殊且依先祖相傳調度文書理、且任親父清重入道讓狀旨、言上　關東當宮御領祢寝院司名頭職建部清綱相傳領掌子細狀、
右、得清綱解狀偈、副進清重入道手継并次第相傳證文等、右謹検案内、件院司名頭職清重入道□傳之上、

権政所散位息長「榮道」
御馬所検校大蔵朝臣「實睿」
座主大法師「俊慶」
御供所検校散位息長宿祢「守清」
惣検校大法師「兼澄」
修理所検校散位酒井宿祢「爲宗」
政所検校散位大蔵朝臣「守光」
権執印散位息長宿祢「道弘」

○二八五　建部清綱譲狀

建部清綱子息譲与所帳事

一祢寝南俣院地司地頭職調度證文等を相副、大掾清親を爲嫡子譲与也、

一賴綱得分田畠山野等事、

用松名　在四至東限岩尾　西限小河　北限北俣田　北綱手田代大道　南大河

水田貳丁貳段内

字北俣五段　同南俣五段　同三坪八段　同山下二段

同薗田一段　同井田一段

一郡本内水田貳丁内

園田四段無田北副伊佐木田六段馬門壹丁掾清親作五段　河良田五段

同郡本内薗參ヶ所内

（尾欠）

○二八六　建部清綱所領注文

薗一所号一町國領非御家人長五郎清高知行分

同一所同同領非御家人　正八幡宮執行大夫助綱知行分

薗一所同領　凡下人字弥五郎検校知行分

同一所同領　凡下人字立太知行分

同一所同領　凡下人伴藤太別當知行分

同一所同領　凡下人五郎判官代知行分

桑東郷内板越村但國領非御家人太郎大夫助綱入道買領地也、

大田壹町　正八幡宮浮免経田

在家鬱山野并開發田在之

桑西郷内皆尾村 但國領 佛成房明慶

水田一丁三段内 一丁 正八幡宮浮免経田 三段 小神田此外開發田在之

在家四ヶ所　狩倉一所

右件田畠山野等、云當知行分、云非御家人知行分、所令注進言上也、若此條僞申上候者、　日本國中諸神御罰ヲ清綱可罷蒙之狀如件、

文永十一年二月廿八日　　建部清綱（花押）

○二八七　沙弥善法書狀

そをかハのせうもんまいらせ候、かのせうもんハ、こたいしんとの〻御へんニゆつりまいらすへきよし、申され候しか、ふりよのほかにしきよ候ぬ、そんしやうのとき申され候しあいた、かのせうもんハまいらせ候、恐〻謹言、

弘安十年三月十日　　沙弥善法（花押）

祢寝孫二郎殿

○二八八　鎮西探題下知狀

祢寝郡司清治 今者死去 子息清保与同三郎清任・九郎清政・余三貞綱・彦次郎清經等相論兩條、

一　大隅國祢寝院南俣郡本田畠屋敷事

右、就訴陳狀、有其沙汰、可注進之旨、正和元年九月六日鎮西評定訖、而各和談之間、被閣之處未被成御下知之上、不可依私和与之旨、清保依申之、可糺決理非之由、去年八月九日所有評議也、仍於引付座、召決之處、兩方申狀雖多子細、所詮如清治所進祖父清綱正元元年後十月五日讓狀者、祢寝院司建部清綱辞讓与嫡子清親當郡司并地頭職事、副渡代代調度證文等、右件院爲彼職、清綱先祖重代相傳領掌地也、爰爲世間不定之間、遮嫡子清親相副調度證文等、讓与當院司并地頭職畢、但清親一期之後者、以嫡子房丸無他妨、可讓与彼職也云云、如正應元年九月廿七日御下文者、將軍家政所下可令早建部清親（継目裏花押）（畠山直顕）領知大隅國祢寝南俣院地頭職事、右任亡父散位清綱正元元年潤十月五日讓狀、爲彼職、

守先例、可致沙汰云云、清親一期之後者、清治童名房丸可領知之条、祖父清綱譲狀明白之處、清親法名行恵正安三年配分末子清任等之条、無謂之旨、清保申之處、如清綱文永四年十二月廿四日所帳者、當院郡本田畠屋敷等、分譲数子訖、於父祖譲狀者、被賞後判欤、不可依正元譲狀之旨、清任雖陳之、文永狀者大間帳也、清親爲嫡子譲得地頭職調度文書等條、被載同狀初段畢、不被改正元譲之由、清保所申有謂之上、清親捧正元譲、申給安堵御下文訖、可任彼狀之條、勿論是一、而如清親弟頼綱給正應四年十月十六日御下文者、任亡父清綱正元〻年潤十月五日、文永四年十二月廿四日、建治二年正月廿日、參通譲狀、可致沙汰云云、就文永狀、同被成安堵之由清任雖偁之、頼綱者、正元・文永・建治三通譲狀得分各別之間、共以申給安堵欤、清親者不帯文永譲狀之上、論所又非頼綱遺跡之間、難依彼安堵之由、清保所申也是二、次如文永所帳者、頼綱得分内水田伍段薗一ヶ所可譲土用房、次屎分田壹町薗四ヶ所、命後者、付本名惣領主可領知也、世筒別苻者、命後者、可爲四郎房領知、次亀王分薗、命後者、可付本名云云、次毗沙房土用益等分同前、一期知行輩事、具于彼狀清親分領可定未来領主者、爭不載同狀哉之由、清任所申聊雖似有子細、就正元譲清親申給安堵畢、輙叵破御下文是三、次清治可守祖父譲之旨、乍訴之、捧行恵正安三年譲狀、望申安堵訖、爲兩様儀之由、清任又雖申之、小河院國領并勲功地筑前國早良郡比伊郷内田屋敷長渕庄畠地等載之間、依難用捨備進之由、清保會釋非無陳謝欤是四、次如清政代乙房丸延慶二年十一月廿三日・貞綱同月廿四日・清経同廿三日請文等者、雖可進各別陳狀、清任及訴陳畢、同篇之上、宜依清任是非候云云、不及異儀欤是五、然則於清親相傳之地者、任清綱正元譲狀・正應御下文可令清治跡領知焉、

(継目裏花押)(畠山直顕)

一　同院内光松名事、

右、任清綱正元譲狀、可被付清治之旨、同訴之處、件名者清綱不知行之間、行恵対于乙万丸、致沙汰、正應

二年三月十二日預關東御下知之後、配分子息等畢、難混清綱跡之由、清任等雖陳之、如彼御下知者、乙万丸忘代々芳恩、爲非御家人、（継目裏花押）（畠山直顕）令敵對之間、宗胤任道理沙汰付本主子孫之旨、清保陳答非無子細、而如建保御下文者、可相傳證文由所見也、謂彼證文者、爲永萬譲狀之由清方雖申之、清重建仁給一円御下文之条分明也、清俊并三子不給各別御下文欤、隨父清俊有罪科之時、所帯等皆以雖被収公、於當名者、依爲清重芳恩、不被召上之由清親所申旁有謂云云、清重・清綱給一圓御下文、令芳恩三子之間、依爲清綱分領之儀、被付清親畢、非別相傳所領之由、清保所申叶理致欤、然則件名爲清綱領内之間、子細同前矣、

以前兩條依仰下知如件、

元亨三年十一月廿九日　　修理亮（北条英時）平朝臣（花押）

○二八九　鎮西探題下知狀

大隅國祢寝郡司清保法師（法名行智）代長円申、本所年貢并正八幡宮御領物以下事、

右、如訴狀者、庶子七郎左衛門尉清元（童名厩房丸）背亡父清綱譲狀明文、自去弘安六年以来、云本所年貢、云大府御領物、抑留之上者、早任注文之旨、所経替年貢等、可糺給云云、如行智所進建治元年十二月廿二日清綱譲狀者、右件田薗等所譲与厩房丸也、而御公事等、可弁郡方旨所見也（取要）、爲糺明、元應二年以来度々催（促カ）催之處無音之間、以加治木郡司政平、尋問實之處、如請文者、雖相觸祢寝七郎左衛門尉、不及請文散狀（云云起請詞略之）者、如清綱建治譲狀者、於清元知行分領家年貢以下者、（継目裏花押）（畠山直顕）可弁郡方之旨所見也、雖然背彼譲文、云彼領家年貢、云當宮佃米等難済之間、経入之、帯請取申子細之上、清元不應召文之由、政平注進之上者、不遁召苻違背之咎欤、然則於件領家年貢以下者、以所経入一倍可糺返矣者、依仰下知如件、

嘉暦元年十二月廿日　　修理亮（北条英時）平朝臣（花押）

（原表紙）

禰寝氏正統文獻外集　巻之二

○二九〇　足利直義御判御教書案

（畠山直顕）（継目裏花押）

校正了

日向國凶徒誅伐事、属畠山修理亮七郎、可致軍忠之狀如件、

建武三年九月廿八日　（足利直義）御判

祢寝郡司孫次郎（清成）殿

○二九一　僧興融申狀土代

（端裏上書）「比伊郷申狀土代」

崇福寺前住済川和尚塔頭正洞庵僧興融謹言上、

欲早大隅國御家人祢寝孫次郎清成、依有済川和尚師檀契、正洞庵造立間、令寄進處、去年一作毛御内小熊六郎賜預所間、去年得分令退轉畢、雖然爲小熊六郎一作毛御恩上者、任寄進狀旨、如元返賜旨宛賜御教書、筑前國比伊郷内田地五町并長渕庄内畠地等事、

副進

一通　清成寄進狀

一通　筑州奉書

一通　守護代打渡狀

右田畠者、爲弘安四年蒙古合戦勲功賞、清成今相傳無子細之間、依不浅済川和尚師檀契、爲當庵造營令寄進件田畠之間、企造營之處、去年一作毛御内小熊六郎預所賜之間、造營未半哉、且云三宝寄進、且云本主清成軍忠、筑

州存知上者、任寄進狀如元可返賜之旨、宛賜御教書、令遂造營之功、爲抽御祈禱精誠、粗言上如件、

観應三年正月　日

○二九二　建部清成申狀案

軍忠之次第并恩賞事、爲令言上候、從父兄弟彦三郎入道宗因差進候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

観應三年八月廿二日　　建部清成上

進上　御奉行所

○二九三　尾張義冬擧狀

大隅國祢寝孫次郎清成軍忠事、先々於御方忠之段支證狀等分明候之上、御敵嶋津又三郎楯籠候於同國鼻頗隈本兩城、去月廿五日差向軍勢等候之處、屬當手差遣親類若黨等、致散々合戦候之間、今月十八日彼御敵等悉令退散候畢、隨而云本領安堵、云恩賞爲所望令進代官候、成向後之勇候様可被経御沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

観應三年八月廿三日　　左馬助（尾張）義冬（花押）

進上　御奉行所

○二九四　僧興融請取狀

（端裏上書）「比伊郷寄進狀請取」

正洞庵御寄進候筑前國比伊内同長渕庄内畠等事、年紀以後者可返進候、次年貢米事、以毎年四石御代官方ニ可致沙汰候、仍請取之狀如件、

正平八年十月廿二日　　興融（花押）

○二九五　大蔵直平書狀

尚々世上之不審等、左衛門二郎殿御下向之時、委細可令申候、嶋津上総入道殿御暇給ハられ候て御向候、すてに兵庫につかれ候て、馬とも船ニたてられ候け

るを見てくたりたるもの候とて、昨日薩摩東郷入道方より申つかハされて候、御心得ために令申候、腰文之段同前候、向後可爲此式候欤、

如仰今度令參候罷入見參候之条、殊以悦存候、向後者雖無何事候、連〻蒙仰可令申候、兼又左衞門次郎殿御上府之条、眞実〳〵喜入候、宰府事者心及候程、可祕計仕候之間、御心安可被思食候、見參之時如令申候、去三日可罷立候之處、御音信遲〻之間奉相待御さ右候、于今逗留仕候處、来八日必〳〵可出國仕候、宰府博多にハ御代官一人をかれて候と思食れ候へく候、御用事ハ細〻不置御心蒙仰候者可爲本望候、事〻期後信候、恐〻謹言、

卯月六日　　直平（大蔵）（花押）

祢寢殿　御返事

〇二九六　大蔵直平書狀

去月廿五日着府仕候、當時宰府博多殊無子細候、京都も無爲候之由、少貳殿御雜掌連〻申下候之間、目出候、定御同心候欤、兼又筑前國比伊郷内田地等事、難儀御沙汰にて候つれとも、重〻申披子細候、安堵御奉書申成候訖、自本不可有吴儀之由、乍存内候、無爲落居難申盡悦存候、定御悦喜候欤、察存候、仍御奉書正文并守護代定尚狀案文等、左衞門次郎殿奉請取候旱、彼地事預給候之上者、不可違御契約候、雖不甲斐〳〵候、御代官一人爲在府被思食候て、御用事ハ不被御心置示給候者、可申沙汰仕候、向後者、自是万事可奉憑候、此等子細委左衞門次郎殿令申候了、恐〻謹言、

五月廿八日　　大蔵直平（花押）

謹上　祢寢殿

祢寢殿　御返事　　直平

○二九七　今川満範書狀

御札委細承候了、兼又さ様ニ玄久（氏久）御領分押領之事、無勿躰候、隨而注進事進候、委細旨者、使者申差候了、事〻期後信候、恐〻謹言、

八月五日　　満範（今川）（花押）

祢寝殿　御返事

○二九八　小石某書狀

（端裏上書）「ねしめ殿　御方へ　申たまへ　小石」

御ゆつりの事、これもこのたひやかきりとそんし候あいた、したゝめおきて差上候、をなしくハこのゆつりの袖ニきこしめされ候ぬとて、御はんを申給ハらせられ候へかしと思ひまいらせ候、なを〳〵明年ハしにとしにて候へハ、あハれにも御なこりをしくこそおほえすをかしく候へ、あなかしく、

十二月八日　　小石

大すみ殿

○二九九　島津庄政所下文

嶋津御庄政所

補任　大隅方祢寝院収納使職事

建部辰王丸

右、以人所令補任彼職也者、早有限御年貢以下御公事并恒例臨時之課役等、任先例、無懈怠可被致沙汰之狀如件、

建武五年九月十二日

目代（花押）

○三〇〇　建部清有寄進狀案

筑前國比伊郷田地五町同國長渕庄畠地等事、

右、崇福寺前住済川和尚与舎兄清成、以師檀契約、爲正

洞庵造營、致寄進候上者、今又於于今爲彼塔頭修造十ケ年之間、所奉寄進也、仍之狀如件、

文和二年十月廿二日　　僧清有

進上　融維那禪師

○三〇一　伴兼氏外二名連署契狀

契約

右、世上錯乱之時分、堅不申談者、自他難有先途候之間、如此所契約仕也、所詮於于向後者、至子〻孫〻而成一味同心之思、就于公私、無隔心之儀、大小事可申承候、又自然之御大事之時者、相互捨身命可致合力候、此上者、或讒人之凶害、或不慮之闘諍、雖出来候、面〻奉寄合無事謂様、可申談候、若此條爲候者、正八幡大菩薩・諏訪上下御罰お可罷蒙候、仍契約之狀如件、

建徳三年二月　日　　兵庫助久兼(花押)

駿河守兼里(花押)

伴　兼氏(花押)

○三〇二　畠山直顕書狀案

御感御教書事、各御參之時可被成候、

(楡井)賴仲退治事、殊被抽御忠節之条、爲公私、被感仰候、就夫ハ賊徒等退帰候、一道相残由事、実正儀告申候、此間御辛苦雖御察候、彼合戦可爲切角候間、早〻御參候者、目出候由、可申旨候、爲其冨山三郎左衞門尉被遣候、委細定可被申候欤、恐〻謹言、

(文和三年カ)二月三日　　直顕

祢寢殿

○三〇三　畠山直顕書狀

所労けんのよし其聞候、先以目出候、然者早〻令馳来給候者、公私大慶可爲此一事候、千万期面謁候、恐〻謹言、

中夏三日　　直顕（花押）

祢寝三位殿　　直顕

○三〇四　相良前頼書状

去月十八日御狀到来、委細候了、則御返事雖可申候、此人當所ニ依用候欤、逗留之間、于今遲引背本意候、抑此方向之不審、同愚存之通、先日之御使悉意趣候之際不能重言候、兼又菊池邊事、今者定其方様にも委被聞召候哉、彼一族若黨数十人參御方候了、仍木野城落居以後者、所々山こしをさゝへられ候、去月十二日陳城被召候て、金吾御子息大將にて、御方の菊池お城衆ニ被定候了、同日今村と申候古城、大友方一手にて被取候了、同十七日窪田古城被取候、同廿一日木山のはにたか城没落候了、其後者御勢行宮と申候所ニ被移候、是ハ御方の阿蘇を行宮ニしすへられ候ためにて候と承候、西方の事御尋候間、令申候、恐々謹言、

六月二日　　近江守前頼（相良）（花押）

謹上　祢寝殿　御返事

○三〇五　相良前頼書状

其後連々可令申由乍存候、路次不輙候之間、無其儀候、背本意候、抑三ヶ國御事共、多分御方御志之由、依被聞食候欤、爲大將今河兵部大輔殿御下候、仍一昨日ニ當所ニ先御下着候キ、就其候て、被進使者候、今時節就于公私可然様御計候者、可目出候、探題（今川了俊）一事以上其國ニハたのミ存候よしを被申て候、西方事者、委細此御使者被申候欤、兼又此境之事、此間者無指事候、彼方之躰、何様ニ候哉、奉度候、尚々一途思食立候者、爲　公私可爲大慶候、恐々謹言、

六月四日　　近江守前頼（相良）（花押）

謹上　祢寝殿（久清）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三四四号文書ト同文ナリ）

○三〇六　畠山直顕書狀

澁谷參州之狀如此候、爲碇山後詰、道鑒等引率氏久能性等、近日可發向云々、巨細見彼狀候欤、所詮於搦留彼後詰勢者、碇山退治可爲近日之条勿論也、御方合戰折角此時候欤、急々可被馳參候也、恐々謹言、

六月十五日　　直顕（花押）

祢寢郡司殿

／

○三〇七　畠山直顕書狀

今度最前進發之条、就公私喜入候、依之諸方軍勢馳集候、返々目出候、就中溝部城事、頓速可成其功子細候之間、俄差遣勢候、凶徒退治事者、何も同篇候、相構〳〵重發向尤喜入候、其境事憑入候也、恐々謹言、

六月十五日　　直顕（花押）

祢寢郡司殿

○三〇八　相良前頼書狀

其後不申承候、背本意候、抑南郷并庄内合戰最中之由、彼境御方之人々注進被申候之間、爲合力大將被出候之程、前頼も共仕候了、此時分一途御計候、其功候者、爲公私可爲大慶候哉、探題隨分たのミ存せられ候、此刻合戰三ヶ國のかなめたるへく候やと存候之間、身之在所之事、難捨時分ニ候へとも、せめて入賀計見候ハやと存候、罷出候了、年来申承候、且私之御合力とも被存候、今時節御帳（張）行返々可目出候、心事期後信候、恐々謹言、

八月十三日　　近江守前頼（花押）

謹上　祢寢殿

○三〇九　安楽清綱書狀

又不思議之神託候て、名字名乗をかへて候、安楽と申、清綱と申候、自然ニ候間、真実〳〵候、御代官

一人当方ニ候て、おほしめし候へく候、
去年進愚狀候、御返事到来以後不申通候条、背本意相存候心中計ニ候、朝夕雖思出申候、在所之躰、又世上之様、旁以斟酌仕候、定御同心候哉、抑探題御在京候、六月中兩度御書下着候、案文爲御不審書進候、
一大友殿召候御教書到来、右之中七月廿五日頃立在所候て、上洛候、
一大隅國大將ハ尾崎殿下給候由、此間被仰下候、
一菊池武朝別而奥州ニ執入申致忠節候、便宜候者、此方にも下向候にと披露候、
一九州大名守護人地頭御家人ハ、悉此三ヶ國可有在陣候由、京都御沙汰候と承候、爲御不審申入候、
一我〻か事、思之外兵部当所三俣高城ニ御座候、最前より御共仕候て于今令堪忍候、其方様ニハ見え候間、先年明暮御共仕候事共、今の心ニ思出申候、定御同心候哉、隨而御本領少〻被返進申候由承候、一身之大慶と存候、先少も被付御力候ハん事肝要ニ候、身之式万事可有御推量候、不叶人中〻ましハり候、年齢と申、疲労と申、かたく退屈至極候へとも、今までの忠を捨かね候、又道心なく候て、なからへてこそ候へ、便宜御座候ハゝ少分之御扶持にもあつかるへく候、若猿皮可然染革御もちあい候ハゝ、給へく候、此堺大切候、猿皮ハ嶋にも御尋候て、便宜候者可然候、非爲身候、うつほのために、公方より御たつね候、そめかハゝ身のためにて候、若又嶋殿それにも心さして去年自幡州被進御書候、同愚身も申入候し、其後御さ右無候事、無心元之由、御物語あるへく候、殊ニ公方様先忠隨一にて御座候へハ、無御忘被仰出候、此方様之式、此僧可有御物語候、恐〻謹言、

八月廿九日　　清綱（安秀）（花押）

祢寝殿
御内

○三一〇　相良正任書狀

（端裏上書）

「　　相良遠江入道

祢寢殿　進覧之候　御返報　　正任」

御札誠以畏入候、則令披露候、仍又被進狀候、目出候、郡浦殿此辺不断御逗留之事候之間、於已後者、細〻可申入候、弓矢邊之時宜、彼御方可有御物語候、恐〻謹言、

（文明年間カ）九月五日　　正任（花押）

祢寢殿　進覧之候　御返報

○三一一　安楽清綱書狀

又御自筆之御書之案文二通、金吾御方より、方〻へ御下候、御書一通案文進上候、

去年就便宜申承候、其後不得快便候て、無音ニ罷過候事背本意候、雖然自他心底ハ聊無等閑之儀候、定御同心候哉、抑世上之不審思外六ヶ國（マヽ）之事、無盡之錯乱にて、探題既御上洛候了、但九州之事、宮方凶徒なとにてハ一人もなく候へハ、自京都可依御成敗候欤、菊池武朝宰府ハ今度御上洛之時と成候て、様〻無他事子細を申入候、千葉殿なとハ無是非候、中〻吴御沙汰落去之途も可出来候哉、兼又自京都　上御使僧、八月九日出京候て、同廿七日下着候、先当國事、直大將御給候三ヶ國ニ、兼日より探題御承（マヽ）領に、御給候間、とにかくに一途可有御沙汰候事勿論候、条〻此上使御物語候、隨而山東之事、伊東下野太郎參御方候て後ハ、一人も不残一統にて、堅連書誓文仕候て、大將を用申候處、此御成敗暫成下候間、一同之儀にて候事不審候間申入候、身之式万事可有御推量候、年内若此方格固之僧達候便宜候、重可申入候、大方式ハ此十阿可被申候、恐〻謹言、

（応永二年）九月十五日　　清綱（安楽）（花押）

祢寢殿　御内

○三一二　祐重書狀

其堺御越事、只今こそ承て候へ、隨而飫肥へ可有御進退之由承候之間、身之間事ハ、病氣更難計候之間、愚息以下致用意、明日志布志ニ罷越候ハんと致用意候處、御逗留候間、何様はや〳〵可進候、若違例すこしも、心安躰罷成候ハゝ可參候、尚〻公私御大綱之時分、私儀に違例以外にて、不參会仕事、日比失本意候、此等之子細、明日子供參申候時可申入候、諸事期後信候、恐〻謹言、

九月廿二日　　祐重（花押）

祢寝殿
御返事

○三一三　安楽清綱書狀

（裏墨引）

愚狀之躰、可有御免候、

去月進愚狀候處、委細御返事到来、同用物拝領無申計、悦喜仕候、抑京都御教書事書三通下着候、爲御不審進之候、以此旨國中面〻御談合候て可被定御進退候哉、此時分過候てハ万事可爲徒事之由上意候、定符中邊にも可有仰候間、可有御内談候、此方様事御代官一人祗候と可被思食候、又嶋殿御方様にも、此由可有御傳候哉、恐〻謹言、

十月十三日　　（安楽）清綱（花押）

祢寝殿
御内

（表紙）

禰寝氏正統文献外集　巻三、四

禰寝文書　二

（原表紙）

禰寝氏正統文獻外集　巻之三

○三一四　一揆神水契狀案

（端裏上書）「一揆契約狀神水案文」

一揆契約条々

右天下向事者、爲　將軍家御方、一味同心可致忠節候、

一嶋津伊久・氏久事降參治定上者、向後彼退治事者、重公方御意ぉ請可廻籌策候、雖然彼兩人乍參御方候、此一揆人々知行分仁競望ぉ成、及合戦候時者、公方御意をも不相待、其在所仁馳寄可致防戦候、

一於此契約衆中、所領相論以下煩敷事、出来候時者、各加談合仰上裁、以多分之儀、任理運、可致口入候、被背其儀候人者、被破此一揆可相当候之間、不可有閣心之儀候、

一或者本領再住、或者就恩地仁入部事、公方御意ぉ請、能々加談合、衆儀調可然以時分各可致其沙汰候、一揆衆中ぉ憑楚忽沙汰候時者、一向不可有合力之儀候、如此申定候上者、公方訴訟事をも以理運之儀、一同仁可

歎申候、若此条々令違変候者、
日本國中大小神祇、殊者、天照大神宮　八幡大菩薩　當
國鎮守霧嶋権現御罰お各可罷蒙候、仍契狀如件、
永和三年十月廿八日
久米代　大膳亮爲頼在判
水俣　藏人大夫武宗、
相良　參川権守右頼、
平川　兵庫允師門、
牛尿鳥越　隼人佐義元、
牛尿青木　沙弥元生、
奥野代　源　助景、
牛尿牛野　備前守元莫、
牧　圖書助重親、
和泉朝岳　刑部丞保種、
佐敷代　備前権守國顕、
曽木　大和守元義、
和泉知色　左衛門尉兼光、
田浦　因幡守國家、
相良　近江守前頼、
牛尿太田　沙弥元清、
馬越　對馬守高黄（廣カ）、
須恵　修理亮重宗、
村角　豊前介公義、
恒松　石見権守定峯、
肝付　出羽守兼家、
肥後　豊前介高基、
中野　出雲守幸重、
平良代　縫殿助重秀、
梅北　右京亮久兼、
岡本　越前守頼季、
湯浦代　弾正忠俊宗、
和田　土佐守久宗、
和泉井口　左近將監保合、
和泉上村　沙弥道一、
口黒代　兵庫允國家、

伊藤　左衛門尉祐一、
税所　但馬守祐平、
津歎栗　左衛門尉武実、
久多良木　左京亮國貞、
澁谷　遠江守直重、
大村代　平　前重、
大溝　左近將監高岡（綱カ）、
牛尻　河内守元息、
高木　修理亮久勝、
永里　大和権守武綱、
宮原　橘　公冬、
野邊代　丹波守助國、
和田　備前正久、
橘口　伴鬼王丸、
東郷　信乃守久道、
敕仁郷　沙弥宗世、
相良多良木　遠江守頼忠、
牛尻山野　左衛門尉元詮、
牛尻羽月　石見守元豊、
高木　長門守久家、
和泉杉　民部丞兼義、
北原　備前権守頼兼、
和泉　縫殿允井保、
篠原光武　左衛門尉忠秀、
野邊　薩摩守盛久
大津保　税所介祐義
敷祢　沙弥座功
左衛門尉親宗
左近將監
左衛門尉

○三一五　祥鶴書状

（端裏上書）「　しまより　祥鶴　」

進上祢寢殿御宿所

新春御祝言千喜万悦面前雖申籠候、尚以珍重〻、幸甚〻不可有盡期候哉、抑今度長日ニ申承候事、悦喜由申計候、何様北國に罷着候ハヽ、早〻可令申候、若又路次ニ逗留仕候ハヽ、在所より案内可有候、一御修行間事、不残心底令申候了、殊以悦喜此事候、定御同心候欤、諸事期後信候、恐惶敬白、

正月十四日　　祥鶴（花押）

進上　祢寝殿　御宿所

○三一六　某書狀

又如此不審肝付方へも申遣候、此人〻定御陣ニ馳よられぬと存候、夜中ニ令申候、巨細ニ不能候、祝言雖申籠候、尚以幸甚〳〵、抑昨日税所方より以使者条〻所存ハ被示候、此子細貴方様ニも申され候よし、彼使者申候事、志布志内御れうけん候や、大略者難儀至極候欤、雖然一左右爲承定候、彼方へ使者を遣候事治定候者、それの御事先以寸心候了、令存候間、此境事ハともかくも候へ、可罷越候、次平山事是又なんき無極候、旁以我等浮沈此事候、當城事ハともかくも候へ、さしあたり候て難儀候在所ニ御在陳候間、就是非御參御共可仕候、軈可罷出候へ共、今一左右相尋候ハて罷出候時ニ楚忽振舞にも可罷成候、弥心底ニハ怠存候なからとゝこほり候、先爲御心得以愚狀を令申候、返〻使御事者無心元存候、事〻期後信候、恐〻謹言、

正月廿三日

祢寝殿

○三一七　宮内大輔守政書狀

（端裏上書）「祢寝殿」　　守政

「　　」

税所方へも此由仰談られ候へく候、路次心もとなく候て不申候、

改年慶賀向尊方千萬悦申候早、猶以幸甚〻、不可有盡期

候、珍重〻〻、

抑細〻可令啓候處、依路次難儀無其儀候、所存外存候、雖無指事候、連〻承申候、恐悦存候、兼又兩嶋津間事、二見以下凶徒与同候處、以猶御方之由、京都申候、國中ニも申沙汰候なる間、老父もをして退治申へき候由申候、いまも御方之由、内〻承候間悦入候、就然更御方の一分なく候間、いたつら事候き、彼仁共就事　重京都より条〻御教書御事書被下候、御一見のために、案文を書とり候、此人〻近日振舞により候て、ひし〳〵と合戦仕候欤、又御方ニて候、可目出事候、其邊ハ定此人〻心つかいしろしめし候やらん、委細便宜之時承候て、重て可申談候、委細可申候へとも、路次難儀候間、若如何様之事も哉と存候て令省略候、委西本伊豆守可申候、恐〻謹言、

正月廿九日　　守政(花押)

祢寢右馬佐殿

○三一八　名和慈冬書狀

又此僧申付たる子細候、委細きこしめされ候て、御けち在へく候、喜入候、少分にて候へく候、御一族中わさと、のこされす申給候、重て〳〵少分の御はくかうあるましく候、必〻このそうに御用の事をハ被申候へく候、探題ニ申とつけ候ハん事ハ、たやすかるへく候、

新春御慶賀雖申籠候、尚以不可有盡期候、珍重〳〵、抑年内俄罷上候之間、乍思案内不申候事、重無念之至候、周防大内より船をしたて候て海賊等同道候て、近日其堺可罷下候、其子細探題よりも被申候哉、就其者、大將治部少輔殿三ヶ國爲合力可有下向候、かやうにハや其方事ひし〳〵と御沙汰候へハ、御對治も不可有程候、さやうにも候者、面〻御辛苦も不可久候、委細候者、此僧物語可申候、身もかやうに指合候ほとニ、國人〳〵御中探題より、此僧を下し申され候、身か下向之間者、諸事國之事此仁とり申へく候、又探題様への密事等、御用以下巨

細此僧注進申へく候、爲御心得令申候、兼又在國之間連〻使者進之候、然〻種〻御芳志之事等、後〳〵ニ承之候き、何も〳〵無勿躰恐入候、是等ひとへニ探題われらニ被向候御心ようにて候ほとニ弥難申盡候、いかさま入見參、此等次第可申承候、又御忠節是又委細以面令申候、悦喜無申計候、定其子細狀ニ被申候哉、諸事此方事等此僧可申候、恐〻謹言、

正月廿七日　　慈冬（花押）

○三一九　今川満範書狀

（端裏上書）「祢寝右馬助殿　御返事　　満範　」

三陽吉兆自何〳〵目出候、兼又南郡人〳〵返事進候、可有御使候、將又肥後御陣へ被上候使者候て賜候へ、國不審等委細申度候、子細同候者、急速ニ御立可然候、自是態國之式注進申度時分候間、如此申候、又鐙賜候事、悦喜候、隨而其辺式痛敷存候、毎事期後信候、恐〻謹言、

壬正月十八日　　（今川）兵部大輔満範（花押）

謹上　祢寝殿　御返事

○三二〇　今川満範書狀

（端裏上書）「祢寝殿　　満範」

三陽吉兆雖申舊候、尚以不可有盡期候也、兼又三ケ國沙汰事、無指儀候、就于其者、其堺不審等事、委細承候了、凡此邊式者、使者可申候〳〵、毎事期後信候、恐〻謹言、

二月四日　　（今川）兵部大輔満範（花押）

謹上　祢寝殿　御返事

○三二一　建部久清請文

去年十月十八日御書、今年二月二日到来、謹以拝見仕候畢、抑任被仰下候之旨、弥可致忠節候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

二月五日　　右馬助久清（裏花押）

進上　御奉行所

○三二二　今川三雄書状

先立進状候了、定參着候乎、抑佐敷陣之事堅踏候處、津奈木・湯浦御敵ニ成候之間、在所難儀候、天草ニ引退候、無念無申計候、雖然水俣藏人御方無他事候、御心安候、和泉同前候、兼又相良無思方虚事共依申候、于今無御音信候ける事、返々無念候、縦百年二百年不入見參候共、御志第一候間、不可有等閑之儀候、其境之事、一向憑存候、御方深重人々御談合候、此時分一途御籌策候者、公私目出喜入候、依此御さ右、重巨細可申候、恐々謹言、

二月九日　　三雄（宮内大輔）（花押）

祢寝右馬助殿

○三二三　今川満範書状

改年御吉事自他以幸甚々、抑如此連々申承候事尤本望候、隨而御所存之趣、年内又當年委探題方仁令申候間、御志之通、殊更悦喜被申候、自探題内書進候、委細被申候間目出悦存候、自初如申候、深憑存候、此方向勢仕、隨注進さ右一途可相計候、委御使ニ申候也、恐々謹言、

二月十日　　兵部大輔満範（今川）（花押）

謹上　祢寝殿

○三二四　兵庫助久兼書状

如仰雖無指事候、自是可令啓候之由、令存候之處、遮而預御音信候之條、返々悦喜之至候、抑世上不審、又御陣隅尤示給候ハやと、内々所存之時分、如此承候、是又日来所存候、連々承候、自是可令申候、御内心御奉公恐悦候、恐々謹言、

二月十三日　　兵庫助久兼（花押）

謹上　祢寝殿　御返事

○三二五　今川満範書状

（端裏上書）「祢寝殿　満範」

一日御音信悦入候、是等事共申候ハんためニ、態使者進候、委細くにのかうの三かわのすけに令申候、其堺事ハ御れうけん候て、しかるへきやうに御はからひ候へく候、ことに〳〵其國之事申付られたる子細候、弥〻面〻御事おたのミ存候也、恐〻謹言、

二月十七日　　満範（花押）

祢寝殿

○三二六　今川満範書状

嶋津參陣事留候由聞候、此上者、御方勢をあつめ、近日可始合戦候、抑先立承候御進退事、同者急速に思食被立候者、殊可目出候、一昨日探題方ニ進使者候注進にも、既御現形之由申候了、兼又法師峰（星峰カ）の御代官も、今者可爲無益候、尚〻急速ニ被思食立候者、悦入候、恐〻謹言、

二月廿二日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三二七　紹喜書状

去年春探題御使ニ參候て候し僧令申候、抑其後遠路間、不令啓候、所存之外次第候、両國地頭御家人又守護方爲使罷下て候、嶋津返事急速可注進候間、先御教書案文を書進候、可有御披見候て可有御心得候、愚身ハ和泉と申所ニ暫可有候、御用事候ハゝあのまて承候て、御陣へも注進可申候、付急事先罷通候条、先ハ令存候、又世上之事、不思儀罷成て候、言語道断事候、いかさま態參候て、毎事可申承候、又それの御馬軈ゆかしく存候へ、興ある駒一疋いつミまて、ひかせて給候ハゝ、喜入候へく候、御陳へ上度候、たのミ入候〳〵、又よ

りたけ給候へく候、返〻いつれも〳〵はんしたのミ入候〳〵、

一嶋津今度南方合戦不被止候者、又本の物にて候へく候、御心得候へく候、此合戦ニ合力せられて候ハんする人〻ハ、嶋津か家人たるへきよし候、京都へ注進可被申候よし申せと候、御心得候へく候、恐〻謹言、

二月廿五日　紹喜（花押）

祢寝殿　御宿所

加治木より

○三二八　今川満範書状

（端裏書）「祢寝殿　満範」

多祢嶋殿にも同申候、御つたへ候て給へく候、尚〳〵

（裏封目）

（面期）めんこの御事まち申候、早〻御越候ハゝ、悦入候〳〵、路次たやすからす候ニよて、細〻申うけ給す候、所存外ニ存候、兼又一揆勢大略馳よりて候、いまたゝのおらす候、日向勢ハ伊東・土持人〻のこらす今日廿八罷立候、今度ハ御方大勢にて候へく候、此堺にて落居出来へく候間、悦喜仕候、三ヶ國落居合戦にて候ニ、御はつれ候てハ、無念ニ存候、ふねにて御一身とたねの嶋殿も御同道候て、急〻長尾城まて御越候者、目出度候〳〵、恐〻謹言、

二月廿八日　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三二九　道賛書状

御札委細承候了、抑雖無指事候、一日令進狀候了、只今預御音信候条爲悦至極候、兼又陣立事、是も定日者未承候、被參事候ハゝ、軈〻可令申候、又只今も御使に令談候、委細可被聞食候、又老者にて候人方へ御事付申候了心得候て御返事可申候由被申候、次ニ馬一引所持仕候折

節麑嶋に置て候、仍承進候、被寄候ハヽ、如何様可懸御目候、尚〻態令參可申入候、諸事以面可申入候、恐〻謹言、

三月三日　　道讃（花押）

祢寝殿
御返事

○三三〇　斎藤明眞書狀

此間久不申承候間、無心元存候處、御音信殊ニ令悦喜候、雖無何事候、便宜之時者、連〻可申承候、御同心候ハヽ、尤本望候、兼又公方御狀入見參候、御返事執進之候自最前御忠節之至目出候、三ヶ國事厳密御沙汰候、探題天草邊まて御越候、三ヶ國勢可被召候、可有御心得候、將又比井郷内五町分事申入候了、不可有子細候、可有御遵行候、関口殿藝州大將ニ被遣候間、一わう被仰遣候て、やかて〳〵御遵行候へく候、御代官誰人候哉、可被仰付之人候ハヽ、兼日可有仰候、御狀を給候て、則可申沙汰候、更ニ不可等閑（有脱カ）之儀候、其段委細此御使ニ申候、御陣之式定可被聞食候間、不能委細候、尚〻此方様御用事者可承候、不可有疎儀候、恐〻謹言、

三月三日　　沙弥明眞（斉藤）（花押）

謹上　祢寝殿

○三三一　税所介祐義請文

謹言上仕候、　抑凶徒御對治之事、いか程あるへからさる由承及候条、先以目出候、隨而國属無爲候ハヽ、企參上不審等可申入由相存候處ニ、當所今の式一日も依難捨候、無其儀候、憚入存候、雖然當所さん〳〵の躰に罷成候、わたくしとして是非を申かたき式にて候、就其候ても、公方儀こそ弥憑申にならてハ、別たる儀なく候、又祢寝間の事、我らもて同前候、いしやう、から城をふまへたる計にて候、敷祢の間事、是ハ在所を去候上者、是非に不及候、能様ニ御沙汰候ハてハ、すてに可失名字候、就加様事に自是人を可進候處、祢寝人を進候由申候間、

先捧愚狀候、いかさま近日重て可注進仕候、又此堺不審等、連〻三俣大將御方注進仕候間、定御披露候ハんと存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

（永和三年カ）三月六日　　税所介祐義（花押）

進上　御奉行所

○三三二　今川満範書狀

（裏封目）

去月廿七日御注進昨日五日到来、其方様不審委細承候了、抑此堺合戰事、近日可始候、先陳川境ニ可有勢仕候、此子細御使ニ申候了、相構〳〵急速御現形候者、可目出候、法師峯御手人〻、疾〻被召候者、殊ニ肝要候、恐〻謹言、

三月六日　　（今川）満範（花押）

祢寢殿

追啓

染皮一枚給候之条恐悦候、大切候間、殊ニ令悦喜候、重恐〻謹言、

○三三三　彦子書狀

尚〻急速ニ御計可然候哉、如何様以使被懸御目、諸事可申承候、紙狀之通、可有御免候、

態進使者候、隨而夜部七日忠清来候て申候き、今度之勢使廿日之用意之由、申候へ共、眞実者四五日之間にて候、来十二日魔嶋ニ被打寄候者、十五日以前一道あるへく候、乍恐日比のことく、御ゆたんいかゝと存候由、能〻申候へく候、返〻正八幡も御照覧候へ、少も御疑あるましく候、今度のつかい可然候とそ乍恐申入候、救（マヽ）广勢同日可參着候、毎事期面拜之時候、恐惶謹言、

三月八日　　彦子（花押）

祢寢殿御内

○三三四　今川満範書状

（裏封目）

西方進使者下着候き、御教書并御内書被進候、此堺合戦近日可始候、同者今時分御現形候者、目出候、諸方軍勢公方よりも、御さいそく候、御教書案文進候、恐々謹言、

三月廿四日　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三三五　和田正直書状

（裏封目）

又あハち可捧愚状候之處、自用候てよそへ罷候時分候之間、無其儀候、不断可申入候間、状之躰可有御免候、

雖無差事候、細々可申通候之處、依遠所候無音罷過候、恐入候、就其者年内預契状候、則御返事可申候之處、御使者野々三谷より御帰候、其上及月迫候之間、無其儀候、年明候者、早々可令啓候なから、魔嶋ニ參候、三月まて逗留仕候之程、于今遲々候之条、非本意存候、仍契状認進之候、尤以使節雖可申案内候、殊外荒説共時分候之間、先進飛脚候、追而以使此等之子細可申披候、猶々何ヶ度雖不申入候、等閑之儀を不存候、御同心候者所仰候、諸方荒説候間、定て被聞召候哉、不審之時者、蒙仰自是も可申入候、恐々謹言、

卯月廿日　正直（花押）

祢寝殿

和田状

正直

（裏書）
「卯月廿二日到来」

○三三六　今川三雄書狀

（裏封目）

先立度々狀進候之處、御返事不到来候、無心本候、抑水俣敵城去廿日責落候、同廿二日當所和泉罷越候、今時分其堺事、御方人々御談合候、一道御籌策候者殊更悦入候、萬事憑入候上者、無是非候、依御さ右重可申談候、其方様不審等連々可承候、恐々謹言、

（至徳二年カ）卯月廿八日　（今川）三雄（花押）

祢寝右馬佐（久清）殿

○三三七　今川満範書狀

三ヶ國人々、多分於御方御志候之由、度々依被承候、罷下可申談之由、被仰候間、今日二日球广郡人吉ニ下着候了、就其一向憑存候、一途急速御張行候者、可目出候、依御返事合戦次第、重可申談候、兼又面々御中被進候狀案文進候、隨御左右正文をハ可進候、委細使者可申候、恐々謹言、

（永和二年）六月二日　（今川）満範（花押）

祢寝右馬（久清）助殿

（本文書ハ「旧記雜録前編二」三四三号文書ト同文ナリ）

○三三八　名和慈冬書狀

（裏封目）

尚々此間御振舞驚耳目候了、弓矢御高名此至極候了、今日廿七日午時當所罷着候了、如何様近日志布志詰陣取可致候、定日重可被仰候、尚々今度之体振舞心ち能覚候、自大將連々如此子細被申候、探題方へも度々申遣候了、近所人々方へも連々可進狀候、其方向事者一向憑入候、又薩摩方の事、被懸御意、急々御籌策候者、可爲恐悦候、自是も近日可申遣候、

一山東人々内海大略罷着候、池尻兄弟等も身同道候了、委細之旨此僧可有御申候、急速入見參此間之子細申承

度候、かやう次第此僧可有御申候、諸事国郷三河殿より承候、子細軈てさつま殿可申談候、大將子息近明日之間、當所可被着候、恐々謹言、

五月廿七日　　慈冬（名和）（花押）

○三三九　沙弥堯覚書狀

此間者、依路次難儀、不申通候条、背本意候、兼又去二日、大將今河（満頼）兵部少輔殿、求广仁御着候、仍彼御使大合良勘解由左衛門尉殿、去五日此堺ニ被越候、御教書并大將御狀被進候、依此御左右御陣へ可有御注進候、尚々御返事兼給候者可然候、恐々謹言、

六月七日　　沙弥堯覚（花押）

謹上　祢寝（久清）殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三四六号文書ト同文ナリ）

○三四〇　建部久清請文

去正月廿五日御教書、同四月十七日到来、謹拜見仕候畢、抑任被仰下候之旨、一族等相共可抽致忠節候、以此之趣、可有御披露候、恐惶謹言、

六月七日　　右馬助久清（裏花押）

進上　御奉行所

○三四一　建部久清請文案

去月廿五日御教書、今月十二日到来、謹以拜見仕候了、抑任被仰下之旨、「兵部大輔殿」属大將御手可抽忠勤候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

六月十二日　　右馬助久清

進上　御奉行所

「去二日御書」

○三四二　名和慈冬書狀

（裏封目）

其後申入不承候条、無心本存候、抑今度御引道御心閑

ニ被成候条、浦山敷令存候、兼又今月林鐘の初より、志布志殿三ヶ國の大將子息此方の大將として、山東軍勢・伊東・土持・相良越州(ママ)いとこ田中与和田土佐・高木將監・肝付出羽其外三俣軍勢当所野邊一族・飫肥・櫛間、今者御方ニ参無二の致忠馳舞候之間、志布志城も幾程候ハしと存候、

一いかにと其邊にもきこゑ候ハん、治部少輔(今川義範)殿、大將として高來天草ゑ四國海賊吉弘勢代つれ罷向之間、其方にハ御敵一人もなく候間、海賊御手洗薬師(豊後)ニ、大將お相添られ候て、薩(カ)うなた(カ)ゑ可渡候、若其邊も物忿にや候ハんすらんと存候て、御手洗薬師方へ狀お進候、身か僧とおせ候て、いかやうの僧ニも御つかハし候へく候、恐々謹言、

六月十四日　　慈冬(名和)(花押)

○三四三　今川満範書狀

(裏封目)

御札委細奉候了、誠其堺合戦之事、雖無心元候、可爲大手落居候之間、相構〳〵可有御堪忍候也、兼亦御陣不審等、委細救仁郷參河介物語候間、承候了、大手事不可有違候間、暫可有御堪忍候、諸事此堺事參河介可被申候、毎事期後信候、恐々謹言、

六月廿日　　満範(今川)(花押)

祢寝殿　御返事

○三四四　今川満範書狀

(裏封目)

自是申度存候處ニ、御音信悦入候、御忠節事連々注進候了、肥後事も今年ハ定一落居可有候之間、御勢可下候、此堺式御使見知之上は、不能巨細候、恐々謹言、

六月廿六日　　満範(今川)(花押)

祢寝殿　御返事

○三四五　名和慈冬書狀

尚〻面〻御一族の御中ゑも別ニ申度候へ、同御中候間不申候、此御使者可被申候、唐繪小壺少々拜領候者可然候、

當所ゑ廿三日ニ罷越、やかて同廿六日勢仕候て、宮古（都）城の邊やき拂、又早田共かりとり、少〻なきすて候也、やかて其日陣ニのり候へきよし存候處ニ、以外雨ふり候し間、三股ひき帰候、今月廿八日やかて、つめ陣とり候へきよし存候處、あまりに雨ふり候間、来月廿二日陣をとり候へく候、梅北とつれあい候て、あなたこなた此辺を荒候へく候、少〻けおとし候へき城をハけ落候へく候、左様ニ勢仕候ときこしめし候者、御出候へく候、態とも自是可申候處ニ、此御使者よき時分之間、此方の不審共令申候、

一志布志向之勢仕候ハす候へハ、無念なと候へ共、いまの時分御方の勢すくなく候へハ、やかてつめ陣をとり候て、水手をもとり候てこそ、可有其験候へ、山東人〻談合候て、大隅ゑもか様に申候て、此堺ゑうち舞〳〵、此堺の早田蹴拂候者勢もつき、一揆人〻も可馳參よしきこゑ候、山東の不參の人〻も近日可着よし申候て、飛脚をたひて候、勢かすかさなり候者やかて〳〵見つくろい候て、志布志ゑさしよせ候へく候、いかにもその比ハ細〻申承候、御力をもそゑられ候者可然候、今度の御振舞心地能存候へハ、本知行當知行いつれも探題の御判をとり進候之也、

一自探題も申下されて候へ共、自是も申候、先四國海賊御手洗薬師ニ高来・天草の勢をさしそゑられ候て、可下よし承候間、かさね〳〵いそき可被下由申候て、近日案内者を可立候、いくほとなく可到来候、左様にも候者御敵方治退可無幾程候、此海賊船下候ハんする以前ニ、薩广の御宮方の方〻御方のしせうをしいたされ候やうに、御申御沙汰候者、爲天下可然存候、

一今月廿七日の夜、迫田六郎左衞門御方の御志候ニよりて、岩河城ゑ被入候也、此邊にもあまた内〻申候人〻

おゝく候、けんきやう候者、やかて〳〵可申候、尚〻
来月二日つめ陣とり候へく候、その邊ニおきても御勢
仕候者、可然候ぬと存候、尚〻薩广方の御籌策の事、
一向貴方をたのミ申候、肝付出羽殿被越候之間、御談
合候へく候、恐〻謹言、

六月廿九日　　慈冬（名和）（花押）

祢寝右馬助（久清）殿

（原表紙）

禰寝氏正統文獻外集　巻之四

○三四六　今川了俊（貞世）書狀

先日兵部大輔（今川満範）下向之時申候處、御請文六月二日到来候了、
殊ニ目出候、就其重委細兵部大輔方ニ申遣候、定可申候
哉、其間事一向憑申候、殊更大隅・薩摩國事、愚身可拜
領上者、別而御志候者、弥可悦入候、將又此方躰同兵部
大輔方ニ申遣候、可被聞食候哉、玖广事一落居候者、定
面〻爲合力可罷出候哉、毎事可有御談合候、恐〻謹言、

七月三日（永和二年）　　了俊（今川）（花押）

祢寝右馬助（久清）殿

（本文書ハ「旧記雜録前編一」三四九号文書ト同文ナリ）

○三四七　久清書狀

（裏封目）

返〻此者ニいそき候間、子細不申入候、
一日丁寧被示給候、別可令申御返事之由存候處、取乱事
等候欤、無其儀被過候条、心外覚候、尤不断可申通候な

から、依海路ニ沙汰被成候条不知所謝候、如何様しゝう方越申候て、細ゝ可申承候欤、然事候、恐ゝ謹言、

七月三日　　久清（花押）

進上　祢寝殿

○三四八　今川満範書状

（裏封目）

御音信喜入候、兼亦其堺之事、属無爲之様ニ、御計先肝要存候、將又御陳挙状之事奉候間進候、雖無何事候、的便之時者承可申候、此堺不審菊池没落之子細等、御使申含候了、毎事期後信候、恐ゝ謹言、

七月十日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿　御返事

○三四九　今川満範書状

先度委細進状候處、無參着候由承候、無念候、何様中途ニ留候欤、推量候、隨而一揆人ゝ近日可馳寄之由治定候間、先櫛間爲合力、一昨日十日當所勢差遣候、此時分其堺御合戦被始候者、大慶候、相構ゝ疾ゝ被打出候者、可目出候、加治木兩人肝付・多祢嶋方へ遣状候、可被討候、此堺合戦次第巨細御使申候了、恐ゝ謹言、

七月十二日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三五〇　兼忠書状

（裏封目）

猶ゝ末吉へ御酒をもたす候而、たゝにて、まかりこゑ候へ、

從是欲令申候之處ニ、好便候之間、捧愚札、内浦・櫛間へ用所候而被越候、可然便宜候之間、壱筆認候而遣候、其様へハ以吉日壱筆認可進候、末吉へ近日ニ御越にてあるへく候者、以面可申談候、慶事恐ゝ謹言、

七月十六日　　兼忠（花押）

祢寝殿

○三五一　今川満範書状

（端裏上書）「祢寝殿　　満範」

尚〻今月中必〻可罷出庄内候、同候者、其中ニ被廻御籌策候者、可爲吳御忠節候、

度〻令申候之處、委細御返事喜入候、兼又葦北事大手通路候之間、彼御庄内ニ田浦二見と申所ハ八代堺候、先爲退治去十日差遣勢候之處、田浦凶徒ハ降参候了、二見敵城責落凶徒二十余人討捕候了、隨而當所事も凶徒退治不可有幾程候、其方向御談合何様候哉、承度候、肝要時節候、同候者、急速一途御籌策可目出候、其方向事等、巨細示承候者、喜入候、是も早〻可罷出庄内候、其時ハ最前入見參可申承候、又探題狀進候、返事可給候、又西方事者、當方より進御使者、昨日下着候、諸方の御方悉勝利候間、目出さ無申斗候、恐〻謹言、

七月十六日　　（今川）満範（花押）

祢寝右馬助（久晴）殿

○三五二　今川満範書状

（端裏上書）「祢寝殿　御返事　　満範」

尚〻治部少輔八月中可有下國候、其以前ニ御進退可有御計候、深憑存候間、堅慥ニ申候也、

以持留御所存之透、委承候了、近日可有御現形之由承候事、大慶無極存候、さ様候者、定敵方可被拵候、併可爲御大忠候、相構〻急速ニ可有御計候、此段公方御使帰參候之間、委注進候了、同者、愚身無虚言様ニ早〻御現形候者、自訴等事、無等閑可申沙汰候、兼又爲後候之間、加治木肝付方にも進狀候、それより可有御傳候へく候、一揆なんとの儀ハ、公方向ニ不可有正躰候、御一身先可有御現形候、恐〻謹言、

七月十九日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

追啓

染革一枚羽一尻給候、恐悦候、御志之至殊ニ悦入候、尚〻令悦喜候、重恐〻謹言、

○三五三　今川満範書状

（端裏上書）「祢寝殿　御返事　　満範」

又すき候時、僧ニ面〻被懸御意御志候ける無勿躰候、尚〻船勢のつき候ハんする在所をも、南こおりの方〻と御談合候て、可然やうに御注進候へく候、此御注進ハあまくさ邊ニゆき合候へく候、

今度さたの城以下、心地よく御振舞、探題ゑ申上候により候て、委細狀進候よし、被申候、抑大將七月二日自大隅被越て候、聽同四日末よしの古城二日ニとりかため候て、其邊のきう人御方ニ尋て候人〻こめおかれ候ニ申、岩河城とひきあいて、志布志宮古城の通路、かたくさしふたかれ候、此十四五日の比、志布志より宮古城ゑ入候鹽兵粮かた〳〵の具足共城の用意の物共及度〻候、おいをとしとり、此程中郷ニ古城の候お、とりこしらゑ、きう人にて候土持勢を籠おかれ候、自六月廿六日至七月十一日、五度まて宮古城の麓ゑよせかけ、城のきわに候家共せう〳〵やき拂、作毛の候程城ゑおいこめ候て、苅、いかゝし候へきと歎敷候つるニ、今者心安罷成候了、定御同心候哉、吉事之間、急〻申候也、

一三俣道場之時衆、筑後瀬高より今月五日ニくたられて候、此説のことくハ、此方合力の一勢被下候ハんためニ、兵船八十艘計既押浮候ける由物語候、此時衆のりてくたられ候へき船をもてんせられ候ける程候、陸路を被下候由物語候、目出候、今者彼船勢も近付候覧と存候、定て其堺ニ此勢着岸候ぬと存候、爲御意得申候、

一当方勢仕之事者、岩河・財部両方之間ニ一両日之程ニ可有勢仕候、此時分其堺事も、一途御計候者、敵弥足を亂候ぬと存候、就大隅事敵方の勢も打寄候ぬと存候、これも御方ニ力をあはせ、かやうに可有勢仕候、其方之事も可然様ニ一途御計候者、可目出候、又御籌策候へき事も御方便候へく候、肝付出羽使の事をたよりになし申候、以御合力先足出をもし候由承候へ者、公私悦入候、又委細者野邊方より可申候、可有御了簡候、不審等連ゝ申へく候、又可承候、恐ゝ謹言、

（永徳元年）七月廿一日　（今川）満範（花押）

祢寝（久清）殿

○三五四　野辺盛久書狀

又追ゝ三俣よりつけ来候、昨日探題の御中間下着候、此方御合力のためニ、中鹿野殿大將にて一勢すてニうちたゝれ候けるよし申候、大慶無極候、爲御不審令申候、

去十一日御返事、一昨日十九當陣ニ到来、不審等委細承候了、

抑當陣隅州西方之不審、自　大將御方被仰候間、不能重言候、返ゝ隅州之事目出候、御同心候哉、兼又今時分一途御計畧可然存候、如御意救仁郷殿・内浦殿之事、今之時分被取馳候てハ、さてにてあるへく候間、使をこして申居て候へ、駿河殿も公方御合力之事被申居て候、若御合力の段不可叶候者、當津にハ身一人候ハす共、御事闕ましく候間、平暇を申候て、罷帰候て、内浦殿の合力を可仕候、其時合戦之次第可申談候、將又其堺一陣をも可被召にて候者、救仁院堺目の山縁ニきりよせやうのことをもつかまつり、在家をも放火し候て、志布志勢を搦候様ニ計度候、よろしく可請御意候、不審之時者、早ゝ可申入由承候間、吉事共重候間、急ゝ令申候、其堺之不審等委細可承候、今之時分南方之御籌策可然候、又當方御勢仕之事者、先岩河向ニ御懸候て、此仁ニ被副力候へと、身之意見にハ申候、若無其義候者、財部向にてあるへく

候欤、重て可令申候、恐々謹言、

七月廿一日　　盛久（野辺）（花押）

祢寝殿（久満）

○三五五　斎藤明眞書状

六月一日御状、七月十六日到来、委細承候了、抑公方御注進状并御中間事、委細披露仕候、御返事執進候、其堺事大將を被差遣候間、御申事者彼注進可被執進候、御申候事はいつれも不可有子細候之由、御意にて候、其段御返事に被仰候、御使ニ巨細申候之間、定可被聞食候哉、於向後公方御用事不可有等閑候、於肥後懸御目候事、難忘存候、相構連々申承候者本望候、此邊凶徒御對治不可有幾候、同候者、被致御忠節候者、目出候、恐々謹言、

七月廿二日　　沙弥明眞（花押）

謹上　祢寝殿

○三五六　名和慈冬書状

（端裏上書）「このふミねしめとのへまいる　自三股　慈冬」

祢寝右馬助殿

（裏封目）

其後者不審等不承候間、無心元候處ニ、野邊方への就御音信、使之様承候事喜入存候、

一先日末吉陣取之事者、則申候了、其後七日ニ當陣池平を取候て、土持城衆にて早踏靜了、目出候、

一都城近所作毛等、先立早田等少々枯候處ニ、猶も相残候つる程ニ、去十七日八日ニかり陣お取候て、作毛悉苅拂候了、隨而十八日ニ引退候之時、敵野臥等付送候間、野ニ引出候て、馬にて散々に懸付候て、野臥等十四人討捕候了、此内侍程の者五人、名字分明候生取三人、かゝる心地よき事なく候、敵方のさほう散々のくたひれの由申候、爲御不審申候、

一昨日税所介注進到来候ことくハ、去十八日卯時ニ、本田か持て候おんとりの城忍落候て、小嶋入道か父子野田父子上付以下打庭ニ六人、其外腹切候者ハ、名字不分明候、三十余人討捕候由申候、大慶無極候、税所介一人先途お被失候ハん事拂候了、十一月一日合戦候て、いねゝ程苅とり或ハなきすて候也、後勢ニきようの人を百騎計のこされ候て、さふらゑのふしある程ひめき原をひき出、馬勢にてあそこゑ(阿蘇越)、おいつけこしらゑ、おいつけ截敵候程ニ、三十餘人うちとり候、生とり三人めしとり候、おなししき十八日暁大隅の國おんとりの城、しのひおつけ、内ゝ相良・税所の手物にて貌(ママ)わせ忍落され候、これもむねとの敵或ハ腹きりうちとられ候、御方者一人敵方とくミ候てさしちかゑ候也、此名字共ハ敵方も御方も此僧達存知の事にて候間、使にて可被申候、

一自肥後陣此僧玄貞上人、爲海賊船勢之案内者、のほせ申て候へハ、海賊船西海の船ハしおひきも不隱候よし、被申候て、豊後國ゑ越のりつけて候、船を二三十そうまわし候也、其間ニ本宮方のめん〳〵の申事趣を、御中より尋きこしめし候へきよし、被仰下候程ニ、煩敷存候へ共、此僧をそれゑ進候、肥後之不審をも委細可被申候、

一先度も本宮方のかたゑ、あのきにあい候やうに文躰をも肝付出羽被合候て、被仰合したゝめ可被下候よし、申て候し、いまも判紙お十枚進候、出羽殿御談合候て、此僧達を可遣候、

一其國の守護人かつさのかミも内通へ(表裏)うりのミおゝく候程ニ、御沙汰あるへきに候、此事ハおんミつ候へく候、左様にも候を南郡の方ゝ悦喜眉を可被開候欤、弥ゝいまの時分御方と御同心候て、被合力候者、御忠の一にて候へく候、又便宜の地、御のそミ候者、此玄貞僧を肥後ゑのほせ申候へく候間、面ゝ南郡の方の申事、御中さまならひニ御庶子達の申事おも、此僧達兩人お進候間、不残所存可有御注進候、いかやうなる薩摩にハ、

何處ニ船をつけへきとも可有仰候、先度も無御注進候程ニ、探題不審ニ被申候、委細注進可被申候、

一當處の御勢仕上田部ゑさしよせ候へく候、内〻うけ給候へハ、御方ゑ參候よし申候、なにさまニさしよせ事の子細を、とい申され候へく候、もしそきよりも勢仕候へきにても候とうけ給候了、なにさま志布志向の事ハ、下勢を待候て可被致沙汰候欤、

一豊後國にも御敵方一人もなく候間、豊後日ころ勢仕候へきよし申候て、阿蘇とおりとおり候也、中國の事も不思議ニ大内の大夫合戦ニかち候て、三郎ハ石見のふくやと申候物おたのミて候也、此貞兄委細存知候、恐〻謹言、

七月廿五日　　慈冬（名和）（花押）

祢寝右馬助（久清）殿

○三五七　今川了俊（貞世）書状

嶋津進退事猶以不審候、參陣まては能〳〵御了簡候へく候、

去月廿一日御狀委細承候了、抑三ヶ國大將下向候之間、其堺事被致御忠節候者悦入候、兼又御訴訟事、可有其沙汰候時分可有御待候、次西本八郎左衛門尉事承候了、可有計沙汰候、仍可相待之由申候了、猶〻堪忍候者尤可然候、委細彼仁可申候、恐〻謹言、

七月廿七日　　了俊（今川）（花押）

祢寝右馬助殿　御返事

○三五八　今川満範書狀

（裏封目）〃

其方向事、可有御現形之由承候之間、待申候之處、于今延引如何様次第候哉、當所合戦来十日以前可始之由、一揆之衆一同治定候了、其内ニ無御現形候てハ千萬申談候事共、不可有正躰候欤、一揆之衆馳寄候て以後者、御忠も可薄候、兼日慥就于便宜探題内書進候、定參着候哉、

猶〻一揆之衆馳寄候ハさらん以前ニ、一途可有御現形候、兼又探題御使安富志布志ニ下着候、就其も急〻御現形可爲肝要候、恐〻謹言、

七月卅日　　（今川）満範（花押）

祢寝右馬助殿

○三五九　今川了俊（貞世）書状

尚〻此人の事、城をも持なから參候ハんと申候間、目出候、それニ付ても今ちと玄久かやうを御らん候へと仰候へく候、

御申へき候一ヶ条事、尤可目出候、たゝし玄久（氏久）か造意諸事ニ付候て、廻方便候て、事を左右ニよする仁にて候間、今ほと宮方内心候けに候間、いかやうの人もかたらひ候て、我等か狀なとをもとり候て、私かたきにて候なとゝ、京都ニも申事もや候ハんすらんといふかしく候ほとニ、たゝ諸事をあなたのふるまいニ任候て、事の様を見たく候、此ほとも御方とハ申候へとも、税所介城をもしのひとり候ハんするしたくにて候けると聞候間、心底ハ御敵にて候ほとニ無油断候、我〻ニも又それニも、ま事ニ同心の心さしあるへく候ハゝ、よく〳〵事を御定候て、重てうけ給候て、この人の事も安堵を成、又望申事をもハからひ候へく候、子細候ましく候、いかさまニも、玄久か事ハおほつかなく候間、相構〳〵御身をしたゝかニもたれ候て、事のやうを御らん候へく候、とてもハしめより、公方をあをき御申候御忠にて候へハ、始中終我〻同心申へく候也、能〻御堪忍候へく候、恐〻謹言、

七月卅日　　（今川）了俊（花押）

祢しめ殿　御返事

○三六〇　今川満範書狀

尚〻憑存候、一途御計候者悦入候、

連〻可申通由乍存候、依不輙路次候、其後無音所存外候、抑度〻御返事ニ無相違承候程、隨分憑存候、隨而近日庄内仁可罷越候、此時節一途御計候者、探題被憑存候、し

るしたるへく候や、於身又可爲大綱候、相構急速御籌策候者、可目出候、兼又此間博多候つる凶徒筑後ニ退散之由其聞候、目出候、次當國八代堺葦北ニ凶徒城一兩所候間、去月勢お指遣候處、一城ハ降參、今一所ハ追落候、城衆等不殘討捕候了、參御不審申候、此堺之事、今者一方心安寵成候間、庄内出陣可為大切候、此刻御合力候者、爲公私可為肝要候、返ゝ憑存候、無相違候者悦入候、恐ゝ謹言、

壬七月八日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三六一　今川満範書狀

（端裏上書）「祢寝殿　御返事　　満範」

万事憑存候間、いけ令申候、

一日御返事委承候了、隨而度ゝ如令申候、自探題方深被憑申て候、今時分御現形候者、可成大功候、相構急速ニ可被思食立候者、可目出候、就其者御教書事到来之時者、軈可進候、尚ゝ其中ニ一途候様ニ、可有御計候、恐ゝ謹言、

八月三日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三六二　今川満範書狀

久不申奉候處ニ、此使悦存候間、令申候、其堺事御いたハしく存候也、兼又多祢嶋大郎殿遁世之由、風聞候、事実候者、無勿躰候、委此人ニ申候了、恐ゝ謹言、

八月三日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三六三　彦子書狀

如仰適此堺御越ニ不能拜謁之条、于今失素懐存候、兼又北殿御帰國御慶奉察候、如何様今兩月之間、以參拜此間之式申披候了、尚ゝ懇切之御尊問候、悦無極候、以此旨可

有御披露候、恐惶謹言、

八月十一日　　彦子（花押）

進上　祢寝殿御返報

○三六四　播磨守家秀請文

畏申上候、

抑連〻可申入之由、乍相存候、依不輙路次候、罷過候之條、其恐不少令存候、其堺事乍憚憑存候、被懸御意候者、畏入候、就中京都御教書并探題御教書數通國人〻中被下候之間、其子細定可被聞召候、就于夫可然御沙汰候者、畏入存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

八月十四日　　播摩守家秀上（花押）

進上　人〻御中

○三六五　平千代熊丸書狀案

（端裏上書）「進上　人〻御中　　平千代熊丸上」

其後可令啓案内候之處、依路次難儀候て罷過候条、其恐不少候、其堺事被懸御意候て、預御合力候者、恐悦相存候、連〻可申入之由乍存候、依遼遠無其儀候、恐憚覚候、尚〻其堺事一向御坐お憑申入候之外無他事候、心事期面拜之時候、恐惶謹言、

八月十六日　　平千代熊丸

進上　人〻御中

○三六六　名和慈冬書狀

此程三ケ國にてかやうにもてなされ申て候事、先立ハいまた候ハす候ニ、ことに〳〵無申計候、今朝とを〳〵と御出候て、御懸心の御用意、小河禅門まての御薬難申盡相存候、一向別の御志之至を探題大將方ニ連〻可申候、隨而是までの時の御よをいことに〳〵難有覚候、此御志之至者探題の御ためと令存候之間、其趣を委細ニ可申候、猶〻いまた乘もつけす候物まて御馬給て候御事無申計候、此御奉行タ（マヽ）の留まてニ仰候へとも、

御馬共いたハしく候て、自是帰令申候、尚〻此間いか〻
との御意候、重寶とも給候事、難申盡恐入候、恐〻謹言、

八月十七日　　慈冬（名和）（花押）

祢寝右馬助殿　御宿所

／

祢寝右馬助殿　御宿所　　慈冬

○三六七　今川満範書狀

先度進狀候之處、御返事無到来候、便宜之間不付候哉、
就其此堺勢仕、既去十日一陣取候了、今日求广之郡勢牛
屎・和泉參着候之間、近明日中敵城逃路之間、可取陣候、
此時分急速一途候者、可目出候、相構〻急速可有御計候、
恐〻謹言、

八月十八日　　満範（今川）（花押）

祢寝殿

○三六八　今川満範書狀

尚〳〵それにて御ほねおり候て、此人〻しすゑられ
申候ハん事、是ニ御越よりもなをありかたく存へく
候、明後日大手ニ使者お進候、このたんくハしく注
進申へく候、

肝付人〻御力おたのミ申候て、一陣の事思立候間、かや
うの事共申候ハんためニ、使者進候、此堺事共此仁に申
候間、不能巨細候、大手より内書の案文二通進候、恐〻
謹言、

八月十九日　　満範（今川）（花押）

祢寝殿

○三六九　能登守右忠請文

畏申上候、
抑連〻可申入之由、乍相存候、依不輙路次候、罷過候條
其恐不少令存候、其堺事乍憚憑存候、被御意候者、畏入
候、就中京都御教書并探題御教書数通國人ニ申被下候之

間、其子細定可被聞食候、就于夫可然御沙汰候者、畏入存候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

八月廿一日　　能登守右忠（花押）

進上　人々御中

○三七〇　税所介祐義書狀

尚々聊計會事候間、不能巨細候何様自是態可申入候、

兩通御狀委細承候了、抑世上間事、度々申舊候間、不能重言候、此僧計會仕子細候程ニ、使懸御目候て、不審をも、又御意之通をも、承候へく候、

一領分間事喜承候了、可存其旨候、

一加治木方より其後無指音信候、自是こそ領分事者、菟角承候なんと申へく候欤、就于是非參陣候へく候、申談度候之由、返事候へく候、尚々不審之時者承自是可申入候、毎事期後信候、恐々謹言、

八月廿二日　　祐義（税所介）（花押）

祢寝殿　御返事

○三七一　沙弥昌賢書狀

先立預御狀候之間、委細御返事申候了、抑嶋津方兩人近日之間、可着陣事治定候、さ様候者、相構〳〵可有御出陣候、返〳〵依無等閑候、不残心底令申候、自三河殿御使大將懸御目候了、定可有御物語候、毎事期後信之時候、恐々謹言、

八月廿四日　　沙弥昌賢（花押）

謹上　祢寝殿

○三七二　建部久清書狀

御書之趣謹拜見仕候畢、抑牛屎・真幸之事無所残御退治目出度候、就其者重御勢仕之事、巨細被仰下候之條、畏入候、仍早々可令參候、尚々如此御意恐入候、恐々謹言、

八月卅日　　右馬助久清狀（花押）

謹上　人々御中

○三七三　今川満範書状

（端裏上書）「祢寝右馬助殿　　満範」

又肝付方ニ遣狀候、御談合候て一途承候ハゝ悦入候、一日進狀候之處、委細御返事慥承候了、兼又此方勢仕事依御さ右、志布志邊事大綱と存候て、姫木一陣にて待申候之處、軍勢等いつとなき由申候間、對都城、近陣を二三ヶ所今日十四日取候了、雖然其方様事、可然一途承候者、合戦之次第可申談候、毎度如申候、此時分大綱にて候へハ、公私憑存候、一途御計候者、可目出候、委細不審兼房可申候哉、恐ゝ謹言、

九月十四日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿

○三七四　斎藤明眞書狀

其子細此御僧可被申候哉、

一御一所にて被致忠節候人ゝ知行分事、子細同前候之間、可申沙汰候、可御心安候、尚ゝ不可有相違候之間、面ゝにも此段御傳候者可然存候、

一比井郷内五丁分事ハ、先立落居候之處、少事候上、遠國候之間、御打すて候事不可然候、是ハ殊ニ不可有相違候哉、重ゝ此趣能ゝ可申入候、餘急御僧御帰候之間、不能委細候、諸事期後信候、恐ゝ謹言、

九月廿一日　　（斉藤）沙弥明眞（花押）

謹上　祢寝右馬助殿

○三七五　今川満範書狀

（端裏上書）「祢寝右馬助殿　　満範」

又肥後之合戦之事、久多良木之狀、和泉ニ注進爲御不審進候、

態ゝ御音信目出悦存候、隨而（今川了俊）探題より内書其外狀共到来候之間、驕進上候、路次難儀候とて于今延引候、幸に御使に付進候、兼又西方御合戦去月廿九日、御方被

打勝候て、敵方無所残被射捕候了、此時分御注進到来、殊御志之通と目出候、如此候子細条〻可申談候、肝付駿河守親類を進候由申候、其方〔向間〕之事能〻可承候、

一肝付河内守方に、自探題之内書同狀を副候、それより御遣候て、御請文をとり給へく候、

一山本殿之御申候間之事、是又不可有子細候、適救仁郷參河介當參にて候つる、今度在所之事承候て可有其沙汰候、万事出羽守方より可申候由申含候了、

一大隅之國之事、如此探題之分國に定候、此上者國中人〻に能〻申談候へと被申候、

御内書隅州坂下に先立遣〔之〕〔但申〕候、別而御近付之人〻者、此段可有御故実候、殊御方深重之御事にて候ほとに、か様申候、恐〻謹言、

十月八日　　満範（今川）（花押）

祢寝殿（久清）

御返事

（本文書ハ「旧記雑録前編二」三五八号文書ト同文ナリ）

○三七六　野辺盛久書狀

又自京都朝山嶋津殿へ御使ニ下向候と風聞候、珍敷不審之間、一筆令申候、舟路共不実説候申候、中國海道共申候、

東殿御他□□承候、誠以驚入存候、遙以後候て奉候つる程ニ御訪遅〻仕候事、返〻所存之外存候、依此仁ぉ進候、意趣定可申述候哉、兼又肥後之事共定て被聞召候哉、言語道断之式候て重〻奉候、當國山東大將霜臺下向之事も近日候て披露申候、三ケ國之大幸此時候哉、不審之時者、申入又示給度候、御同心候者、尤本望候、恐〻謹言、

十月八日　　盛久（野辺）（花押）

祢寝殿

○三七七　今川了俊（貞世）書狀

本宮方人〻事、尚御籌策候へく候、

其方合力事治定候間、委大將申へく候、御待候へく候、目出候〳〵、舟勢事ハ身か手物を可進候間、それにて御

指南候へく候、又御申候事二通進候、目出候也、恐々謹言、

十月十日　　（今川）了俊（花押）

祢寝殿

○三七八　今川満範書狀

（裏封目）

熊御音信喜存候、彼方參陣事治定之由、申候之間、暫差置合戦候、若替篇候者、其時可相計候、然者自是左右を可申候也、兼又多祢嶋事、御同心由事候間、同令申候、此段可有御傳候、此堺不審委御使仁申候之間、不能巨細候、恐々謹言、

十一月九日　　（今川）満範（花押）

祢寝殿　御返事

○三七九　相良爲続書狀

遠方之条御名字之文字相違候欤、爲御存知令申候、去夏預御音信候、祝着候、其後可致御礼候之處、依路次不輙候、罷過候、心外候、聊非疎略候、御同前本望候、兼又自大内義興御方へ被進狀候、此飛脚其及可罷通事迷惑之由申候間、新納方及憑存之由申候、定可有傳述候、遙々事、御懇之御返事尤可然候、豊前・筑前ハはや悉入部候、肥前・筑後ハ被取向其儀最中之由其聞候、次當國者先以和与之様見得候、悉皆春以来者朦氣仕候て當家之様不存知候、自然思立義候者憑存候、連々申承候通、大内方も被存候哉、是及書狀等被着候、被對愚老無御等閑通御返事可然候、先々此狀御披露者無用候欤、少事も不審之時者可申承候、恐々謹言、

十月廿七日　　（相良）爲續（花押）

祢寝殿

○三八〇　今川了俊貞世書狀

殊更合戦候て宗物數輩被打取候事、目出候〳〵、肝付城事、以御合力踏靜候云云、眞実御忠御志候、心ちよく弥たのもしく存候、其方向事ハ御方遠くニ在所にて候間、これより合力申候ハてはかなふましく候間、必〻一勢可進候、来月中ハかり御待候へく候、これの時儀大將方ニ委細申遣候了、定可申候欤、八幡天神も御罰候へ、それの御事以下、とりわき御忠の人〻の事、別して合力申へく候、毎事大將発向時可申候、爲御不審以誓文申候也、恐〻謹言、

十一月十九日　　（今川）了俊（花押）

祢寝殿

○三八一　斎藤明眞書狀

去九月五日御教書今月廿日下着候、正文一通進是、所詮被任御教書之旨、早〻可有御現形候哉、然者先御請可被申候、若猶上下御不參候者、將軍家先忠可成無候哉、急速一途御了簡候者、就公私目出候、恐〻謹言、

十一月廿四日　　（斉藤）明眞（花押）

祢寝殿

○三八二　忠右書狀

先度岩本殿御越候し時、身式委細令申候了、定可被聞食候哉、

態進人候、此間久不申承候之条、非本意候、抑自阿多管領方ニ被脚力立候、其下向御方様御教書被成下候、進候、先日之御教書之左右も未承候程ニ重令申候、今四五日之中、自谷山脚力を被立候、可有御請文候者、給候て同心可令申候、爲其態進愚狀候、毎事期後信候、恐〻謹言、

十二月十日　　忠右（花押）

○三八三　今川満範書狀断簡

（首欠）［　　］事、

一途可有御計候、若又其方ニ御合戦はしまり候て御大事

之時者、たとひ當城たいち以前にも一途可致合力のさたを候、此意趣委參川介方より可申候哉、か様ニいかゝと御ほんそう候、弥ゝ弥ふかうたのミ存候、恐ゝ謹言、

十二月十一日　（今川）満範（花押）

祢しめ殿　御返事

（表紙）

禰寝氏文献雑聚　巻一、二、三

禰寝文書　三

（原表紙）

禰寝氏文獻雑聚　巻之一

○三八四　禰寝南俣水田名寄帳

祢寝南俣

徳治三年水田名寄事

□利条

□河一反半　竹崎一反半　以上三反迫六郎

□坪二反　内供房作ハツノ木三反　以上五反　藤三郎

無頭一反小　久曽王

口坪一反小　鬼太郎

□正一反小　円性房

嶋廻四反　牟田三反　ヌクミ大　以上　七反大舟二郎

七見木三反　溝副一反半　以上四反半宗四郎入道

河夜尻一反　三丈田半　三丈田半

フイ本一反大　平田三反六十ト中　以上六反三百ト中弥太郎大夫入道

溝副一反半　小永田三反　以上四反半　弥四郎

平田三反六十ト中（歩）　黒田浦一反半

同新四反小　河内三段　以上一丁四反中弥藤太細工

小櫛毛一反半　園田三反　在器田二反

（紙継目）

黒田浦二反半　以上九反　弥太郎

大櫛毛三反　五郎太郎殿

寺前五反　水上谷三百ト　以上五反三百ト二郎太郎

三丈田半　弥九郎

早氷頭

一反　菊芙作一反半開二反半　以上五反　四郎太郎

寺田三反　新小　以上三反小　四郎三郎

□一反　二反　二反　以上五反　姫太郎

同坪二反　一反　以上三反　亀万

一反　新小　以上一反小　犬二郎

井尻半　小　中迫藤小　以上一反大　大夫三郎

迫尻半　後家

六十ト開三反　光松一反　以上四反　馬五郎

半　小　平四郎

二反　河内弥五郎

（裏花押）

開
二反　田代殿三郎太郎

開
二反半　三郎四郎

□小　十郎

開
一反半　新平二入道

（紙継目）

桑平
大　厨五郎　金童

小　ハシノ木二反　石畳一反半　以上三反三百ト　八平二

半　六郎

小　弥二郎

小　安五郎

大太牧
一反半　草二

番作作三反　平七

薗田大　木工允

牟田
三反　園作二反　以上五反　九郎二郎後家

三反　幡摩房

三反　勝念房

（裏花押）

小山下二反半　槐角二反半

石田五反　以上一丁　弥三郎分

稲葉三反　大田三反　以上六反　海老名殿

横枕三反　牟田一反　以上四反　西俣殿

薗田三反　山本五反半　二郎殿

小宮田一反半　黒田浦一反半

牟田一反　以上四反　弘賢房

（紙継目）

柳中三反　野間殿

御霊宮田一丁　刑部三郎

荒人田一丁　八郎入道

鹿父五反　中野半一反　同坪大　一反半以上八反　豊冨入道

松山新
三反　同坪七反　以上一丁　刑部六道入道

□石河原
五反　同坪　以上　平九郎入道

ロサニ一郎作
三反　五郎太郎入道殿

鮎河三反　孫三郎殿

ヌクミ
半　大夫太郎

一別府分

栗脇

一丁　同坪一反　宮田三反　以上一丁四反　大夫二郎

大窪

六反内作二反　熊二郎

シノ谷二反　同新六十ト　以上二反六百ト（マヽ）　乙房

山神宇津大

（紙継目）

大竹野一反　三郎太郎

（裏花押）

山田四反　土橋殿

大宮田三反　光松二反　以上五反　三郎貫首

朔平田一反　又四郎

三月田一反

五月田一反　平せト一反

肝付田二反　以上四反　藤三郎

元三節供田一反　板迫二反半

肝付田二反　以上五反半　大藤三細工

石田二反　門田半　光松宮田三反

光松石田三反　以上八反半　五郎六郎

（紙継目）

織女田一反　乙五郎

狩長田一反　登五郎

肝付田三反　北殿

同坪半　北源三郎

同坪二反　六郎二郎

白木波江二反　田頭二反　以上四反　四郎検校

（裏花押）

一山本分

九反　河原田四反　柳田三反

平田二反　荒蒔八反　嶋廻四反　以上三丁　北殿

樋渡　樋下　以上一丁　讃岐房

平田三反　曲前二反　以上五反　弥八

薗田一反半　寺田一反　大夫入道

田頭五反
一反　　源太郎入道
一光松分
平田四反　　諸四郎
同坪二反　曲田三反　以上五反　監物太郎
小山下二反　黒穴二反　以上四反　三郎太郎

（紙継目）……（裏花押）……

ヱノ木一反　白木波江三反
池迫六十卜　以上四反六十卜　三郎検校
松迫二反　小岩本五反　以上七反　弥二郎大夫入道
柒田一反半　河内又二郎
右支配如件、
徳治三年十一月　日

○三八五　目代法橋盛範請取状

（端裏書）「目代法橋盛範請取状　桑東郷武安名事」

大隅國桑東郷武安名五分三之方、正和四五文保元以上三ケ年正税官物（除佛神役人給大垣築廳造等現役）等令皆納早、仍請取之状如件、
文保貳年八月十三日　（甲斐阿闍梨盛範）法橋（花押）

目代法橋盛範

○三八六　鎮西探題御教書

祢寝郡司清保与祢寝三郎清任・同九郎清政・与三貞綱・彦次郎清経跡等相論、大隅國祢寝院南俣郡本田畠屋敷光松名等事、被裁許訖、加治木郡司相共守下知状、可被沙汰付清治之跡、仍執達如件、
元亨四年二月廿日　（北条英時）修理亮（花押）
税所介殿

○三八七　鎮西探題御教書

祢寝郡司清保与祢寝三郎清任・同九郎清政・与三貞綱・彦次郎清経跡等相論、大隅國祢寝院南俣郡本田畠屋敷光松名等事、被裁許訖、税所介相共守下知状、可被沙汰付

清治跡、仍執達如件、

元亨四年二月廿日　　修理亮（北條英時）（花押）

加治木郡司殿

○三八八　大宰府主神司本司等申狀

（端裏書）「大宰府主神司本司等申」

大宰府主神司本司等謹言上

爲大隅国祢寢郡司清治、自正和元年以来、抑留同國薩摩日向用紙龜甲大隅國主典職、所済雜事已下得分物等条、罪科不軽上者、且糺賜年〻済物等、且欲被糺返所預置當職文書事、（裏花押）

副進

一通　郡司代高清請取文書等事　正和元年八月十五日

右、清治大隅・薩摩・日向三ヶ國所済物等、可沙汰上之旨、致種〻懇望乍請取文書、去正和元年以後迄今年嘉暦三年、一向抑留之条、其咎難遁、所詮急速被経御沙汰、被糺返年〻抑留物并文書等、爲被處其身　神物抑留重科、粗言上如件、

嘉暦三年九月　日

○三八九　関東御教書案

（端裏書）「関東御教書」

校正了

去廿五日　内裏行幸他所由、自六波羅所馳申也、依此事不可參上、兼致用意、可隨重左右旨、可被相觸九州地頭御家人等之狀、依仰執達如件、

元徳三年八月卅日　　右馬権頭（北條茂時）御判

相模守（北條守時）御判

武藏修理亮殿

○三九〇　建部久清譲狀

母親沙弥尼沙祐所

奉譲与　母御前所

大隅國祢寝南俣内田薗等事、

一用松名内河原田壹町十同新開丁内

六段卅八郎五郎作　二段丁今村三郎四郎　給田

河成一段丁　新開丁八郎五郎作

四至　限東田代大道　限南大河　限西五坪苗平　限北三坪南苗平

吾戸下薗

四至　限東八郎四郎居薗垣根下　限西田代大道　限南大河　限北用松孫四郎屋敷南堀

一光松名内

神田三段　四至四方苗平　右田四段　四至四方苗平　此内河成一段中

トモノ新開五段　四至四方苗平　迫五郎入道作

一別苻分大窪

六段　シノ谷二段　同坪小　ユアナノロ小

四至　限東湯穴ノ口ノ東ノ波多メ　限南タフノ木ノ尾タチ　限西田頭ノ岩波多　限北山本境

右於田薗在家山野等者、母親某仁所奉譲与也、於万雑公事臨時課役者、一向自惣領可弁者也、但御一期之後者、可被返付惣領候、仍為後日之譲状如件、

應安七年十二月　日

○三九一　將軍足利義満家御教書案

（端裏書）「久治五八　ホ尺七正」

（満詮）若君九州進發事、不可有子細、先遠江・駿河・備後・安藝地頭御家人等、不日可發向旨、既被仰訖、可存其旨之狀如件、

永和二年八月四日　將軍家御判

今川伊（了俊）与入道殿

○三九二　將軍足利義満家御教書案

嶋津上（伊久）総介・同越後（氏久）守治罰事、既凶徒与同之上者、不日差遣軍勢、可退治之狀如件、

永和貳年八月四日　將軍家御判

今川伊（了俊）与入道殿

○三九三　將軍足利義満家御教書案

大隅・薩摩兩國守護職事、所補任候也、早守先例、可致沙汰之狀如件、

永和二年八月十二日　　御判將軍家

今川伊与入道（了俊）殿

○三九四　今川了俊貞世事書案

条々永和二十廿四日

一今度兩國人々御方現形事、若及遲々者、向後恩賞以下事、不可取申候由、堅ふれ申さるへき事、

一今度野部合戦、被合戦又於同所馳加人々事、委細名字可有注進預所事可申行事、

一日向國山東人々事合力事、雖度々被仰尚以遲々云云、所詮尚令延引候者、向後恩賞事并領所事、可改申候由、重てふれ申さるへき事、

一若合力無沙汰候人々ハ、氏久同意之由、京都ニ可注進事、以上、

在御判

（今川満範）兵部大輔殿

○三九五　今川了俊貞世吹擧狀

左衛門尉所望事、可擧申京都之狀、如件、

康暦二年十月十日　　（今川了俊）沙弥（花押）

安城衛門太郎殿

○三九六　將軍足利義満家御教書案

（端裏書）「京都御教書案」

當國悪黨人等渡高麗致狼籍由事、厳密可加制止、若猶不承引者、爲有殊沙汰可注申名之狀、依仰執達如件、

永徳元年八月六日　　（斯波義将）左衛門佐御判

（今川了俊）大隅國守護

○三九七　將軍足利義満家御教書案

（端裏書）「御教書案文　永徳元年十月十一日」

嶋津越後(久清)入道參御方候、當國定令靜謐欤、不日肥後國八代可致忠節之狀、依仰執達如件、

永徳元年十月十一日　　左衛門佐(斯波義将)判

薩摩國地頭御家人中

日向大隅國同前也、

○三九八　將軍(足利義満)家御教書案

（端裏書）「御教書案文」

嶋津上(伊久)総介并陸奥入道等事、以寛宥之篇、被執申之間、所被仰也、仍事書一通如此、可被致其沙汰之狀、依仰執達如件、

永徳二年十月十七日　　左衛門佐(斯波義将)判

今河伊与(了俊)入道殿

○三九九　將軍(足利義満)家事書案

（端裏上書）「大隅薩摩両國御事書案文」

鎮西八代凶徒等退治事、

嶋津上総介并同陸奥入(道脱カ)等、不應催促、及異儀之間、雖被向治罰、就寛宥之篇被執申之間、所被仰也、所詮於當方勢大隅薩摩者、悉過返之、可被差向也、至嶋津者、爲一方令発向、可被致忠節之由、同被仰了、且彼輩野心之段、宜依此左右矣、

○四〇〇　將軍(足利義満)家御教書案

嶋津上(伊久)総介同又三郎(元久)等事、可被加對治也、仍事書一通遣之、早可被致沙汰狀依仰執達如件、

應永元年八月十六日　　左衛門佐(斯波義将)在判

今河伊与(了俊)入道殿

○四〇一　將軍(足利義満)家御教書案

（端裏書）「御教書事書案　三通」

嶋津上総介(伊久)同又三郎事、可被加對治也、仍事書一通遣之、

早可被致沙汰之狀、依仰執達如件、

應永元八十六　　左衛門佐御判

今河伊(了俊)与入道殿

（本文書ハ「旧記雑録前編二」五二七号文書ト同文ナリ）

○四〇二　將軍足利義滿家御教書案

嶋津上総介(伊久)同又三郎(元久)對治事、所被仰今河伊与入(了俊)道也、早

属彼手、可抽忠節之狀、依仰執達如件、

應永元八十六　　左衛門佐(斯波義將)御判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」五二八号文書ト同文ナリ）

○四〇三　將軍足利義滿家事書案

京都御事書条々應永元八十六

一嶋津上総介(伊久)・同又三郎(元久)等對治事、不日可被致沙汰矣、

一大隅・薩摩兩國事、召出地頭御家人等、可致忠節之由、

可被相觸也、若猶令向背之輩者、云名字、云知行分、

可被注申矣、

一彼輩等、今度馳參以後忠否事、就注進可有用捨矣、

以上　　（義滿）御判

（本文書ハ「旧記雑録前編二」五二九号文書ト同文ナリ）

○四〇四　將軍足利義滿家御教書案

嶋津上総介(伊久)同又三郎(元久)對治事、所被仰今河伊与入(了俊)道也、早

属彼手、可抽忠節之狀、依仰執達如件、

應永元年八月十六日　　左衛門佐(斯波義將)在判

大隅薩摩國輩中

○四〇五　京都不審条々事書

京都不審条々

「義持也」

一若君去年十二月十七日御元服、五位中將、當日將軍之

宣旨御かふり候矣、

「將軍義滿公」「應永元年」

一御所十二月廿七日太政大臣に御上候、正月七日可有御

拜賀云々、御代ハ悉若君ニ御讓と云々、

一探題九州地頭御家人諸侍安堵恩賞事、不可有京都注進

候、可爲探題沙汰御事書云々、
一御感計ハ、就于注進、可有御沙汰云々、
一兩嶋一諸本領當知行大隅・薩摩兩國守護職闕所以下、
悉九州靜謐御恩賞探題御給了、（今川了俊）
一嶋津縱雖被參洛、兩國にハ有入部、可有知行上意御判
候と云々、
一國地頭御家人、兼日より御所奉公之名字之中ニ、百余
人小番之衆とて被書抜、若君御所番帳ニ被書候、九州
之人〻ニハ、探題御右筆にて三十余人か、豊後ニハ、
戸次・日田・佐伯・田原ニ三人、吉弘一人、日向ニハ、
伊東大和・宮崎薩摩・守永入道・土持財部・和田・高
木、薩广ニハ、渋谷・牛屎・和泉・谷山・阿多・ゑ、大（頭雄カ）
隅ニハ、税所・加治木・平山・祢寝と見えて候、是ハ
遠國之習人にひかれ、又在所ニよりて、難立御用候間、
忠ニより公方よりも、執しおほしめし、永代御所奉公
名字うしなハすして、國〻にふまゑ候て、たといふし
きの乱世にも、不可有相違上意にて候由、御事書ニ見
えて候、大かいなり書進候、若又此外も望人候ハヽ、
忠節ニより候て、探題御注進候ハヽ、可被入御やくそ
くにて候と、御書ニ見えて候、

「應永二年」

○四〇六　初任引出物支配注進状

（註）
註進

初任引出物支配事

合

佐多村　家子馬一疋内准十七疋　田代村　副馬一疋□
直世上下　目代馬一疋内准七疋　上馬壹疋内准三十三疋
先使馬代内准三疋　准一疋別三十三文
山本五疋　光松五疋　返田村□
得富二十五疋加五分一定
右支配狀如件、

應永五年七月　日　　地頭兼郡司沙弥□

○四〇七　清茂譲狀

子息亀房丸にゆつりあたうる田地等の事、

右、大隅國大祢しめの院よこ山のむらの内、ミやうとう田一町内□（しもカ）のきれ五段弁用坪八段の内しものきれ四段ゑひのこのまろ二段の内しものきれ一段、又かちのわきの薗にしひかしにわりてにしによりて半分の事、祖父道廣の譲狀をあひそへ、永代をかきてゆつりあたうるところなり、仍爲後日譲狀如件、

應永十八年三月十九日　　清茂（花押）

（原表紙）

禰寢氏文獻雜聚　　巻之二

○四〇八　新平右衞門尉某書狀

（端裏書）「新平右衞門尉御文　名越殿御方御下人也」

逐申候、

ひやうふのきみの申たまハられ候し御けう所に、やかてあいつれて、ねしめのみなみまたのちとうまいるへきよし、御けち候しかとも、みやかたとすこの御代官の、六はら殿にてのもんちうのために、こその四月より、京か

まくらにまいらせ給て、此正月まてけ(計)いくわい(会)せられ候了、しかれハめしふの御けふそつき給はむすらん、しかりというとも、らうれうなといてき候いて、しつかにまいらせ給へきよし、けち候へく候、又このはん太郎殿ハなに事につけ候ても、ふひんにあたりまいらせ給へく候、あなかしこ、

正月廿五日　　（右衛門尉）（花押）

○四〇九　清俊書狀

愚狀之躰御免可有候、又きやめて御わつらハしき申ことにて候へとも、このへんミなゑほしをめされ候ほと可申候、ゑほし一かしら御たね(つ脱カ)候て給ハリ候ハヽ畏入候へく候、

はるのハし(ゑ脱カ)の御悦ハめてたく申こめ候ぬ、抑此へんのふしんちゝやう(治定カ)なく候へとも、をうての御せいくたり候へきよしきこゑ候、津々のふね正月十一日てんせられ候と承候、兼又それよりの御ことつての物、しかるへき時分ニまいらせ上候、御悦喜候、御返事にくハしくあるへく候間、愚狀ニハつくしかたく候、將又あさ山殿ハ三かこくたいちのほとハ、きうしうにいられ候へきと承候、又あさ山殿御返事これより御擧申候ハヽ、御心やすくおほしめし候へく候、諸事又可申入候、恐惶謹言、

二月六日　　清俊（花押）

石井殿
御申給へ

○四一〇　法印某書狀

大隅國正八幡宮領祢寝南俣院司地頭職事、清綱先ニ経沙汰、蒙御成敗候了、其間子細、具于所進證文候欤、而依敵人重能之訴、被沒收彼職候云云、且神領事候、尤任道理、可有御沙汰候、於委細者、清綱令參上候、恐々謹言、

三月九日　　法印（花押）

謹上　越後守（北條朝時）殿

○四一一　名和慈冬書狀

（端裏書）「御手洗　御兩□　慈冬」
藥師

尚〻此長老の事、一向たのミ入候、尚〻御兩所おたのミ入候、

このちやう老身か法眷にて御坐候、其辺の事たのミ入候、其辺をいひつして候ハヽ、こなたゑ御こし候者、公私可然候、尚〻御長老探題も御知音にて候、一向たのミ入候、猶〻此長老のおせ申事【（意可カ）】御定かけられて候へく候、一向たのミ入存候、尚〻憑入候、恐〻謹言、

（康暦二年カ）六月十四日　（名和）慈冬（花押）

墨庵主禪師方丈御寺

○四一二　忠清書狀

又罷着候時節武方越られ候、其方向不審承候、喜悦候、雖重言不断可申入候、又示給候者所仰候、又其実多候ほとに令悦喜候、紙狀之躰御免あるへく候、

下向仕候者、尤自是以使者可申承存候之處、遮而預御音信候、恐悦至極候、兼又鹿児嶋へ可有御越之由示給候、可爲何比候哉、さ様之時參合都物語共申度こそ候へ、將又諸方打まハしたる荒説共聞候、如何ニ候欤、乍去少も不驚存候、被聞召不審之時者、細〻承候、自是も可令申候、猶〻更〻舩之無了簡候て、不断不申通候、舩便宜之時者、何度も預御音問たく候、其方向之時儀、細〻示預候者、令悦喜候事候、恐〻謹言、

七月二日　忠清（花押）

祢寝殿

○四一三　今川満範書狀

祢寝申子細候、御披露候者可然候、此堺不審等者使者可申之間、不能巨細候也、毎事期後信候、恐〻謹言、

七月十日　（今川）満範（花押）

斉藤入道殿

○四一四　胤久・貴幸連署書状

（裏封目）

御札細々令承悦了、抑和田方へ御音信候返状とも早々持
せ候て遣候、則御さ所へ可進之候、仍此堺之時宜、石井
方被進之候、再三可被申候、不審時者早々可申候、又可
蒙仰候事候、恐々謹言、

七月十三日　　貴幸（花押）
　　胤久（花押）

祢寝殿
御返事

○四一五　是親書状

又無指不審候へ共、風度御渡海之由承候之間、令啓
入候、
御屋形一昨日十日夜、牛根ニ御渡海候、定而昨日今日にハ
恒吉へ御着可有候由、承候之間、不分明候へ共申候、隨
而一日西俣へ御着存知不仕候て、案内不申候之處、御懇
之御使者預候、千万々所仰候、如何様子とも進之候て互
可申入候、兼又山東宮崎方之事者、身方ニ見形被申候通
承候、是又不分明候へとも申候、尚々たま〳〵在所少々
參候て、御物語千万申度被存候、我々今之時節候之間、
憚存斟酌仕候き、心事恐々謹言、

七月十二日　　是親（花押）

祢寝へまいる
進之候

○四一六　兼房書状

なを〳〵公方料足、我らか所ニて、ふさたのやうに
やおほしめし候ハんと覚候ほとニ、急申事、無面目
候へ共令申候、旁御心得候て給候ハゝ、畏入候〳〵、
料足のふんハ貴殿御存知の事候間、不能重言候、若
さらなとあつかり候ハゝ、おもく候事もあるへく候、
さ様ニ候ハゝ、はうしを一人御申給候、あつかり候
ハゝ、ことに〳〵可目出候〳〵、
態進状候、就夫者、何哉屋形御越之時、貴殿御借用之子

細候、何時も預候するをこそ、可奉待候之處ニ、公方料足御借候分、ことニ御急候、よてふかさ方よりの狀、爲御一見進候、次私れうそくハ當參給候、料足を借候て、かし申たる事候ほとニ進候預示候て、りせに取、先ぬしの方ニハ遣候へく候、今月過候者、ことに〳〵大綱たるへく候、御心得候て預候ハゝ畏入候、我〻近日ニくしま(櫛間)へ罷越候、預候ハゝ、公方料足末吉へ進上仕候へく候、くしまへ令越候、又一日御越候時、さらなと給候へかしと被仰候し、定而貴殿ハ嶋のねにてめされ候へく候、其ことくニ候ハゝ、上ハいやにて候、中下のさら一貫ほとの分ハ可預候、旁御心得憑存候事、恐〻謹言、

七月十六日　　兼房(花押)

牧瀬殿

○四一七　今川満範書狀

(端裏上書)「肝付殿　満範」

(裏封目)「/」

一昨日自其方慥便宜之由承候間、探題よりの内書同事之不審委細申候了、前(相良)賴既眞幸まて罷着了、其方様之事、同者一揆之軍勢悉不打寄候以前に、一途御方便候者、公私可目出候、条〻此仁に申含候、定可申候哉、恐〻謹言、

七月廿八日　　満範(花押)

肝付殿

○四一八　能登守右忠書狀

雖未細〻令申候、先立令進狀候之處、委細預御返事候之条、悦喜存候、雖無何事候、連〻承候者、自是可令申候、御同心候者、本望候、抑大高時分候へハ、於其堺預少御合力候者、可然候、毎事期後信候、恐〻謹言、

八月廿一日　　能登守右忠(花押)

謹上　梅北殿

○四一九　足利義満御内書案

(今川了俊)伊与入道事、雖召上於日州者、國人以下加成敗、可致其

沙汰候也、

八月三日　　御自筆　御判

今河越(氏兼)後守殿

○四二〇　足利義満御内書案

御判

今河越(氏兼)後守事、留置日州之上者、属彼手、向後弥可致忠節也、

八月三日

日向國人中

○四二一　大隅守護所代藤原某書狀

大隅國祢寝南俣院地頭職事、曽木太郎重能去年雖賜式部大夫殿問狀之御下文、祢寝弥次郎清綱帯代々將軍家御下文、訴申候之間、故右大將殿御時、任問注以後御下文并去年四月故大夫殿御下文之旨、弥次郎清綱賜式部大夫殿御下文候了、但有此外之子細者、可尋糺之由、被載于狀候也、若有可申之子細者、企參上、可言上之旨、可被殊仰候也、先弥次郎清綱任御下文之旨、可被令安堵候也、恐々謹言、

八月廿七日　　右馬允(花押)

愛甲八郎殿

○四二二　西阿書狀

（首欠）

「御心明得さ様…」

ふと此人ひとり、敷代へ被思立候間、『(マヽ)五明得さ様』方便も不一候、各船者申入蒙仰候、多日雖罷過候、御芳志之通難忘候、下向時之手ニ可仰御意候、恐々謹言、

九月八日　　西阿(花押)

祢寝殿

御内

○四二三　今川満範書狀

（端裏上書）「祢寝殿」　　満範」

只今梅北方より祢寝の事申遣候處ニ同心候、それよりも承候間、方〻以めてたく存候〳〵、やかて〳〵合力ニ成候様ニ勢仕へく候、伊東六郎今日當所ニ着候へく候、此一族共のこらす自身出陳候、目出候、兼又其方合力事、面〻申談候て其さたいたすへく候、尚〻祢しめの事目出度悦喜仕候〳〵、恐〻謹言、

八月廿日　　満範（今川）（花押）

野邊殿　御返事

○四二四　某施行狀

大隅國正宮領祢寝院南俣地頭職事、政所御下文并権大夫殿御副文等如此、任狀可致沙汰之狀如件、

九月十五日

備中十郎所

○四二五　今川満範書狀

（端裏上書）「公方ニまいる　長瀨式部殿　満範」

ねしめすてに現形のためニ罷出候時分、嶋津かうさん仕候間、此方向合戦とゝめ候間、しんしやく候、さりなから今も當所ニ細〻音信仕候、御方御志他事なく候、此趣御披露あるへく候、恐惶謹言、

十二月廿五日　　満範（今川）（花押）

長瀨式部殿

○四二六　今川了俊（貞世）事書案

（端裏書）「久庵主方へ被下御事書案文　到来十二月廿七日」

風聞候条〻、

一氏久（島津）參陳事、其實あるへからす、事を延申さんかため也云〻、

一今度氏久をはなれて、御方仕國の人〻の事、近日氏久とかく籌策云〻、これハ尚野心相持故欤云〻、

一氏久事、自京都めし出さるゝを、一揆人々の方ニハ、をの〳〵かくし申て面を作候了、人〳〵不審をなす□（云）云、

一日向國不拜領者、參陣すへからさるよし、氏久申候云々、

以上　　御判

○四二七　禰寝氏代々日記案

（端裏書）「ねしめの代々日記」

清重あら人二郎大夫　清綱いや二郎大夫　清親むくさう　清有
清治まこ二郎　清保二郎三郎せう　清成まこ二郎
久清まこ二郎　清平まこ二郎　元清孫次郎
一山本五郎高清　清賀まこ五郎　氏清五郎　清業まこ五郎　清忠二郎大ゆうけんくわう
清治二郎
一宮原二郎清綱　賴綱五郎　清角又五郎　賴角（マヽ）いや五郎　清行又五郎　吉清いや五郎
清貫又五郎

一七目木光所四天日記

種重くるめ五郎　重方大五郎　重房しん太郎　重友さう五郎　重廣ほうミやうたうくわう五郎　成重ゑもん五郎
成廣まこ太郎　清弘太郎二郎　清木しん三郎　清綱ゑもん四郎　重次たいかくすけ　かすゑもん五郎
清範ゑもん四郎
ひたのすけ

○四二八　今川満範書狀断簡

一日預御札候、即御返事を申候き、定參着候哉、抑愚存之趣度々如令申候、今時分貴方様我々浮沈之堺候、雖然所存之分先度申入候了、定御了現候哉、雖重言候、此刻奥州方此間之志をも、此時被成無候ハんする事、可爲無念候也、能々御了現候、蒙仰度候、兼又探題御使ニ久庵主去廿四日莫祢まて下着候、今明日之間ニ総州方へ可被越之由承候、大方如風聞者、彼御僧ハ先兩方合戦を、爲

可被留候之由承及候、將又先札如令申候、長尾陣を退候事、爲承候、先廿七日百引城へ罷越候、如此志意山本民部丞申付候て可申入候哉、次ニ（星）ほしか峯の事、其後御談合如何様候、承度候、巨細御返事を示給候者悦存候、但彼御僧下着候間、越州方にても貴方様（尾欠）

○四二九　菊池一族注文

參御方菊池一族注文

一人　たくま
一人　同豊前入道近比まて僧、
一人　木野五郎兄弟悉
一人　長野
一人　藤井
一人　正加
一人（国分）　大野八名より十人、
泉庄くわんき同御志
若黨分
一　隈部
一　高宮
此兩部類百三十人
八代宮御所へ參一族
一人　深河
一人　城
一人　赤星
一人　平嶋
此四人も多分御方の菊池ニ可加にて候間、是ハ宮方より注出たる分にて候、

○四三〇　今川了俊（貞世）書狀断簡

（裏封目）

依無指事久不申通候、背本意候、抑櫛間陳事、以各番面々御帰國、先目出候、就其て世上之間事、何様御了見候哉、愚身か事事之始ハ、貴方様申談子細候て、出陳事斟

酌仕候き、其以後御出之時分、病気以外之躰ニ、無力親類以下はかりを進候き、仍且如御存心候、彼方よりハ今度いかにも、愚身をは敵ニ申成候へ共、所存候て、種〻荒説共、自國他國まてそのひゝきをなし候き、仍如御存心候、隨分致忠節候、於國も又上府時分にも如何と存候し時も、当知行仕候所ともを、被付給主候き、いかに申候ハんや、今度自身依病気、出陳仕候ハぬをもて、無〔上(欠)事裁〕儀を申なされ候て、彼方被達本意候日ハ、先愚身損亡之条、皆以御了見前候哉、隨而在陣仕候て、辛勞仕、自然合戦も候ハゝ、さしあたりにて候、其身弓矢候之間、打死仕候ても、更〻無益之義もと相存、如此申候へハとて忽彼方を背候て、さしいたす事、有ましく候へとも、暫引入候て、世間躰をも申入談彼方、大綱一大事も候ハん時ハ、合力をもいたし度候、可爲何様候哉、此事之様、依御意自身出陣事とも、斟酌仕候き、今日後日ニ失先途候へき間、如此相計度候へハ、御同心として御在陣事なく候ハ御斟酌も候て、世上之躰をも御覧あるへくやらむ、就于善就于悪、二三人只御同心肝要相存候間、公私大小事申談候て、御意を請す候てハ、難計候之間、不残心底如此申入候、御意之通をも、無御隔心此御返事ニ承候者、尤本望候、仍三俣大將方より連〻狀入候し、付申へく候へとも、面〻御同陳事にて候し、（尾欠）

（原表紙）

禰寝氏文獻雜聚　巻之三

○四三一　沙弥蓮生・僧弁継連署起請文

謹申請

祭文事

右意趣者、爲祢寢院司清綱子息等、被令處分間事を、申兩人殿原何況(イヤシ)申親疎、不可物語、若此条僞申候ハヽ、日本鎭守八幡三所大菩薩　惣六十余洲大小神祇冥道　殊當院鎭守鹿手御霊若宮等神罰冥罰、可蒙罷各乃身内毛穴毎候之狀如件、

正元元年後十月五日　　僧　弁　継(花押)

沙弥蓮生(花押)

○四三二　鎭西探題下知狀

鋤崎次郎時廣法師法名蓮覚申、亡父都法眼祐秀遺領豊前國大野井庄田所職名田畠在家等事、

右、如永仁六年十二月二日評定事書者、於彼田畠等者、就徳政被付祐秀跡之由所見、仍蓮覚可被配分之旨、訴申之間、可尋注進得分親并田數分限之由、被仰守護代道意之處、如今年八月八日請文者、都三郎入道生千子息又三郎種秀請文蓮覚所進注文、肥前房良秀今者死去子息九郎経弘申狀、上野弥次郎輔家注文進上云々、如執進蓮覚注文者、田地貳拾五町五段、畠九町參段在家拾宇云々、如種秀請文者、蓮覚令同心鋤崎尼讃阿蓮覚姪構出謀書之間、當時訴陳寂中也、彼沙汰未断之上者、可被閣云々、如経弘申狀者、於彼田地等者、亡父良秀存日預載許、兄弟等令配分之上者、至良秀者、可被付経弘云々、而爲未分之上者、可被配分之由、蓮覚所申不背理致欤、然則於彼田地拾貳町七段廿代坪付在別紙畠四町六段卅代同前在家五宇同前者、嫡子蓮覚可令領知矣、次生千分田六町參段同前畠貳町參段丁代同前、在家三宇次経弘分田四町參段同前、畠壹町五段同前在家貳宇、次讃分田貳町同畠四段同各守此旨、可知行、但於件讃阿者、雖相漏道意執進得分親注文、如蓮覚所進系圖并和与狀者、爲得分親之条勿論之間、所被配分也、於余田荒野等者、嫡子蓮覚可令領知也者、依仰下知如件、

延慶二年九月十二日

前上総介平朝臣（北條政顕）（花押）

○四三三　実清・静玄連署奉書案

（端裏書）「守護私領頭苐桑代リ」

（端裏上書）「桑代減分貳杖柒尺五寸候也」

大隅國祢寝郡司清治申、御私領得冨頭内小河院薗貳箇所成河由事、就訴狀被尋下之處、如今年六月廿一日請文者、壹所貳段薗者、一向令成河桑不現在、壹所肆段半薗者、當時半分者、成河云々、姫木大夫入道舜西請文同前云々起請詞各略之者、向後任注進狀、可令免許、河成肆段九十歩分桑代之由所候也、仍執達如件、

正和元八月廿二日　　靜玄在判

實清在判

安東四郎左衛門尉（景輔）殿

○四三四　正八幡宮造營表葺用途支配注文

（端裏書）「正八幡宮旧造營表葺用途支配」

支配

正八幡宮御造営表葺具足等代錢事

合貳拾柒貫肆百貳拾文在人夫日別二人

山本　四貫七百文

光松　四貫七百文

直世□（上下カ）四貫五百文

得冨　十三貫五百二十文加五分一定

右、支配之狀、如件、

正和五年三月廿五日　　郡司建部（花押）

○四三五　紀宗継請文

薩摩國雜掌宗清掠申、大嘗會米事、去正月廿九日御教書案并催促狀今月一日到來、謹拜見仕候畢、抑被尋仰下候大嘗會米事、就先日御教書不勤國役之旨、備所見狀去年

八月日以代官澄賢令言上子細之處、奉掠上重被申下正月廿九日御教書之條、奸謀次第候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

元亨三年五月十八日　　紀宗継請文（裏花押）

○四三六　沙弥そんち譲状案

ゆつりあたう大すミのねうハうをにくそせんのところに、ふせんの國さいかうほんミやうのうちやまたハら名ちとうしきの事、

右ミやう田ハ、さいかう寺とのゝ、御ゆつりをもて、そんちゝきやうさおいなし、よてゆつりたてまつる所也、

但このとくふんの内をもて、しやうこう寺の寺米ニ、まいねん拾石（てんほう）にてさたをいたさるへき也、又代官しきニをいてハ、こけ一このほとハ、あつけられて、とくまいハ、めさるへく候、次ニこの田ちのうち、ようさくつほ五反ハ、こけ一、このほと内ゆつり給候也、そんちあるへく候、よて狀如件、

嘉暦二年十月八日　　沙弥そんち

○四三七　平中村家忠着到狀

肝付八郎兼重與黨凶徒等誅伐事、爲抽軍忠、薩摩國御家人指宿郡中村四郎家忠令馳參候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年四月五日　　平家忠

進上　御奉行所

（証判）承了（島津貞久）（花押）

○四三八　高水普果書下案

（端裏書）「古作并大丸大書下并請文案」

祢寝大掾清武申、桑東郷武安名内木作田薗等、押領由事、訴狀如此、早可明申之由、可被相觸扶持人孫次郎季宗跡輩候、仍執達如件、

「暦應三」　五月十日　　「目代高水帯刀兵衛入道」

羽坂孫五郎大夫殿跡　　普果在判

○四三九　沙弥円妙請文案

祢寝大掾清武申、桑東郷武安名内木作田薗等、孫次郎季宗（今者死亡）跡輩押領由事、

御書下拜見仕候了、抑件季宗（今者死亡）跡輩、自亡父時季之時至于円妙全不令扶持候、隨而依令居住木作、先〻直被経御沙汰候之間、清武訴狀令返進之候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

暦應三年五月十三日　　沙弥円妙（請文在裏）

○四四〇　建部清成譲狀案

ゆつりあたうるしよしうらの事（所従）

めゝ御せんのところニ

一ことり

一あこめか一るい

一市三郎か一るい

一をとめう

一いや三郎めをと一るい

右ゐいたいをかきてゆつりあたうるところ也、仍爲後之狀如件、

貞和六年二月九日　　清成判

○四四一　蔵人藤原仲光奉口宣案

上卿藤中納言（柳原忠光）

應安二年十二月十九日　宣旨

武部助定

宜任右馬允

藏人左少辨藤原仲光奉（解勘由小路）

○四四二　祢寝南俣水田取帳断簡

注進　祢寝南俣

應安五年郡本内北御分水田取帳事、

合

柳田　三反　四斗代　損三百分（歩）　弥三郎入道

河内　三反　三斗代　荒

竹崎　四反　荒

同所　二反大　荒

右田　三反　三斗代　損一反小　六郎太郎

塩入　八反内　損三反　一斗五升代　二反荒　大二郎入道

同所　五反　一斗五升代　損二反　迫五郎

（後欠）

○四四三　清秀書状

度々事闕候ニよて、加様のようし申候事、只候はすと申候へとも悦入候、殊ニ此用途悦入候、給候了、仍請文をまいらせ候、返〳〵此用途給候事悦入候〳〵、委細者使者ニ申へく候へとも、尚々見参之時、可申談候〳〵、恐々謹言、

閏五月三日　清秀（花押）

五郎太郎殿

○四四四　頼泰書状案

先立御参候之條、目出悦存候、就其嶋津今度如此罷成候、無念至候、隨而面々御事多年將軍家御忠事、今ハ一向憑入候、於其國堅御踏候、早々可承御さ右候、依御さ右可罷越候、尚々憑入候、恐々謹言、

九月廿八日　頼泰在御判

祢寝右馬助殿

○四四五　某書状追而書

逐申候、

此左衛門次郎殿いまゝての御長居歎入候、御沙汰之習今日か明日ニなり候て、延引無力次第候、仍御下用途もなきよし仰候之間、鵜眼七連令進沙汰候早、爲御存知令申候、重恐〻謹言、

○四四六　諏訪祭礼頭役支配狀

諏訪御祭礼頭役之事

一番　茂清　寺前　二宮　大祢寝　西方　中野

二番　長門守　下村　岩松　蜂須賀　同甲斐守　佐多

三番　左近藏人　左京助　大和守　西俣　尾張守　別府

四番　孫次郎　上脇　武石　西本　大姶良　山本

五番　駿河守　弾正　江田　赤瀬川　新さ衛門

六番　野間　斜木　小川　四郎さ衛門　河口

七番　入鹿山　枝　朝井　石井　幡广守

八番　野頸　救仁郷　八郎三郎　飛騨守　掃部

九番　竹崎　鳥濱　湯田　三郎衛門　馬場

十番　益房丸　厚地　牧原　神田　志〻目　赤崎　美作　忠熊　大山　祢寝　野里

○四四七　犬追物手組

犬追物手組

祢寝右馬助　宮原又五郎
＋±　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

山本太郎五郎　山本三郎五郎
＋□　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

祢寝孫太郎　寺前三郎五郎
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

西本筑前守　西本八郎三郎
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

祢寝孫四郎　中野四郎次郎
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

山本孫五郎　祢寝力房丸
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋
＋＋　＋＋

検見祢寝駿河守

○四四八　犬追物矢答事書

犬追物矢答之事

縄際之矢答之事

一弓手之矢

一日影之矢

妻手之矢答之事

一縄妻手

一妻手きれ

一きらす矢

縄際に馬かねに立たる時の矢答之事、

一縄妻手

一妻手きれ

一きらす矢

○四四九　僧榮春奉書案

於曽於川者、可爲書生并弁済使御沙汰、依御氣色雖令下知、源中所代官未國(本カ)ニ経廻して、無上洛之由云々、尤以不便事也、早爲件代官沙汰、可運上御米也、付公私所當物ハ書生并弁済使等、任内検田數員數、令成送文、彼使可令遂上洛之狀、如件、

十一月廿一日　　僧榮春在判

○四五〇　某起請文前書

萬一從自他國、或廻文或以賄賂、雖致計策、毛頭不混其儀、忽得旨趣可申上事、

右之趣於令違犯者

○四五一　島津庄大隅方寄郡田數注文

嶋津庄大隅方寄郡田數七百十五町八段三丈内

一道鑒(島津貞久)當知行分　　九十五町九段

下大隅郡

大祢寝院　四十町五段四丈
鹿屋院　八十五町九段
串良院　九十町三段二丈
西俣村　廿四町六段二丈
曽小川村　十二町六段四丈
以上六箇所田數三百四十九町九段三丈

一　寺社御寄附分但道鑒拜領九ヶ所之内
横河院　三十九町五段二丈安楽寺天満宮御寄附建武三年二月　日
百引村　十三町　四丈博多聖福寺御寄附同年同月　日
小原別苻　二十三町三段三丈当國大智寺々院興行料所貞和二年三月　日
以上三箇所田数七十八町九丈

一　同寄郡内他人拜領分
肝付郡　百卅町二段三丈　一色入道殿拜領貞和二年五月　日
菱苅院　百卅八町一丈　當郡名主等拜領之建武三年五月云云
筒羽野村　四十八町五段一丈嶋津大隅式部小三郎義久拜領建武二年二月　日
以上三箇所田數三百十六町七段三丈
惣都合田数七百十五町八段三丈

右嶋津庄日向・大隅薩摩三箇國本家一乗院寄郡地頭加徴米者、段別五舛也矣、

○四五二　建部重虎契狀案

一忠棟公（伊集院）江永々深重ニ可申承之儀、世上如何様ニ轉変候共、至于重虎子孫ニ不相替可爲御同心之事、
一自然對御領内御心遣なと之儀出来之時茂、無異儀可致御同心同之事、又於重虎領分、從何方も非道非法之儀、被召懸候ハんする時者、御助成可奉頼之事、
雖誰人
一何方にても候へ申承候人〳〵之中にも奉對　大守様疎儀被思召立候ハんする□ハ御同心申間敷事、
右之趣於令違犯者、

○四五三　禰寝氏代々日記案

ちやくし
清重あら人　二郎大ゆう
清綱　いや二郎大ゆう　ちやくしいや
清親　二郎大ゆう　ちやくし
清治　まこ二郎　ちやくし

二郎三郎せう　まこ二郎　まこ二郎　まこ二郎
ちやくし　ちやくし　ちやくし　ちやくし
清保　清成　清有　久清　清平
元清孫次郎　始ハ一山本　高清五郎　清賀まこ五郎　氏清五郎　清業まこ五郎

二郎大ゆう　二郎　五郎　又五郎　又五郎
清忠　清治　清綱　頼綱ミやけの始　清通（ママ）　頼角いや五郎　清行
けんくわう

一七目木光所四天日記　吉清いや五郎　清貫又五郎

くるめ五郎　大五郎　しん太郎　さう五郎　ゑもん五郎ほうミやう
種重　重方　重房　重友　重廣たうくわう
五郎三郎　まこ太郎　太郎二郎　しん三郎　ゑもん四郎　ゑもん五郎
成重　成廣　清弘　清木　清綱　重次
たいかくすけ　かそゑせう
ゑもん四郎
清範ひこのすけ

いもうと田代てうしうのさい　又いもうとねしめ
ひかし殿さいそのいもうと　きもつきの
やくまろさい

なかつかさせう
太郎三郎　ゑもん五郎
清右　清印かそゑせう

○四五四　某書狀断簡

一相良方へ可申一段、此刻御本意向如何候哉、御□働を
待居申分に候、
一加世田へ可申一段、肝付殿を御憑の事、
一いかに庄内破候共、此方より守護勢かゝ見候てハ、川邊の御本意難成
此刻御越出し候ハてハのよし、此方の事ハしかと御現
候へく候、これならハ、御心中を承候ハゝ、肝付方をからくり申へく候、
形の様を承候て、可相働候、同ハ同日に申合候よし、
自然從屋形河邊をつかハされ候する時の御心中の分、
一祁答院への意趣、おほからぬ國衆の事、東郷殿・入来
院殿、伊東方・北原方へ同心候へかし、少も▨（あカ）しく候
ハゝ、參会可申合候、

（表紙）

水戸黄門詳覧文集　乾

禰寝文書　四

（原表紙）

水戸黄門詳覧文集　乾

○四五五　建部重種着到狀

着到

爲誅伐日向國凶徒伊藤（実）ゝ内左衞門尉祐廣、肝付八郎兼重以下輩、御發向之間、爲致軍忠、大隅國祢寝孫四郎重種令馳參國富（日向）庄太田城候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年十一月廿一日　　建部重種

進上　御奉行所

（証判）（畠山直顯）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一八八二号文書ト同文ナリ）

○四五六　畠山直顯軍勢催促書下

爲兼重對治、所有發向三俣院也、早馳參可被致忠節、仍執達如件、

建武三年十二月十四日　　（畠山直顯）源（花押）

祢寝（清道）八郎殿

（本文書ハ「旧記雑録前編一」一八八七号文書ト同文ナリ）

○四五七　畠山直顕軍勢催促書下

爲兼重對治、所有發向三俣院也、早馳參可被致忠節、仍執達如件、

建武三年十二月十四日　　（畠山直顕）源（花押）

祢寝孫四（重種）郎殿

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」一八八八号文書ト同文ナリ）

○四五八　建部清道軍忠狀

爲誅伐日向國凶徒伊東藤内左衞門尉祐廣、肝付八郎兼重以下輩、大隅國祢寝八郎清道、去年十一月廿一日、馳參日向國ゝ富庄大田城之處、同廿二日、爲對治兼重、結城孫七行郷・友永七郎澄雄被馳向間、相共同十二月六日、押寄兼重与黨下財部院新宮城、致合戰、同九日、大將三俣院到御發向之間、以十八日、押寄兼重城廓、致散ゝ合戰、將又今年正月十日、楯籠兼重与黨之攻落山城畢（山字上石字アルベシ）、而自去年十二月迄今年四月之、日夜致軍忠候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

建武四年四月廿三日　　建部清道上

進上　御奉行所

（畠山直顕）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」一九二二号文書ト同文ナリ）

○四五九　建部清道軍忠狀

爲誅伐日向國凶徒肝付八郎兼重以下輩、去建武三年十二月五日、大將御發向三俣院之間、大隅國祢寝八郎清道馳參、同十八日、押卷兼重城廓、至于同建武四十月、日夜合戰自身被疵早、將又去年七月十一日、爲誅伐兼重以下凶徒等、日向國南郷御發向之時、楯籠兼重与黨平山式部少輔、可攻大和田城由蒙仰之間、押寄城取向城、致連日合戰、今年暦應二四月十三日夜、攻落彼城畢、然今月十三日、押卷兼重城塀御合戰之時、清道又致合戰、同廿七日攻落兼重城塀訖、度ゝ合戰致軍忠候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

暦應二年八月廿七日　　建部清道上

進上　御奉行所

（畠山直顕）
承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二〇六〇号文書ト同文ナリ）

○四六〇　禰寝重種軍忠状

大隅國祢寝孫四郎重種軍忠事、

右、薩摩國凶徒等爲對治、御發向于同國伊集院一宇治城并市来城等之時致忠節訖、爰属于嶋津三郎左衛門尉師忠手、可致合戰之由、依被成御奉書、同月十二日、楯籠肝付八郎兼重・中村彈正忠秀純等之、押寄于麑嶋郡東福寺城、日夜致合戰之刻、同十二月六日夜合戰、致散々太刀打、御敵數輩切臥、重種被疵（左脛射疵）訖、次去月廿六日、攻落東福寺山城、同廿八日、尾頸小城同沒落訖、將又今月一日、楯籠矢上左衛門五郎高純之、押寄于同郡催馬楽城、致合戰之處、同十六日、御對治訖、然早自去年八月迄于今月日、於所々數ヶ度合戰、致軍忠之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

暦應四年後四月　日

（島津貞久）
承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二一一五号文書ト同文ナリ）

○四六一　禰寝清増軍忠状

大隅國祢寝又五郎清増軍忠事、

右、薩摩國凶徒等爲對治、御發向之間、最前馳參、賜御前陣去年八月、伊集院一宇治城并市来城等御對治之時、致軍忠訖、爰属于嶋津三郎左衛門尉師忠手、可致合戰之由、依被成御奉書、同月十二日、楯籠肝付八郎兼重・中村彈正忠秀純等之、押寄于麑嶋郡東福寺城、日夜致合戰、去四月廿六日、攻落東福寺山城矣、同廿八日、尾頸小城同沒落訖將又今月一日、楯籠矢上左衛門五郎高純之、押寄于同郡催馬楽城、致合戰之處、同十六日、御對治畢、（『矢上カ城ハ下伊敷村と坂元村の堺也とアレハ、此間四月十六日御対治アリテ後、直ニ師忠下伊敷村の地頭と為リテ守リ玉へる乎』）然早自去年八月迄于今月日、於所々數ヶ度合戰、致軍忠之上者、預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年後四月　日

（島津貞久）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」二一一四号文書ト同文ナリ）

○四六二　禰寢重種軍忠狀

大隅國祢寢孫四郎重種軍忠事、

右、爲對治薩摩國凶徒等、去月五日、御發向于谷山郡之間、最前馳參、同七日、致散々合戰訖、將又同十三日、御發向于伊集院之時、對于助三郎忠國以下之凶徒等、楯籠平城、致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應五年九月　日

（島津貞久）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」二一五八号文書ト同文ナリ）

○四六三　禰寢重種軍忠狀

大隅國祢寢孫四郎重種軍忠事、

右、爲對治薩州凶徒等、御發向之間、最前馳參、以去月十五日、助三郎（伊集院）忠國楯籠對于伊集院平城、致軍忠畢、將又被寄于阿多郡（飯島城）、加世田別府等之時、於所々致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年九月　日

（島津貞久）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」二一二八号文書ト同文ナリ）

○四六四　禰寢清增軍忠狀

大隅國祢寢又五郎清增軍忠事、

右、爲對治薩州凶徒等、御發向之間、最前馳參、以去月十五日、助三郎（伊集院）忠國楯籠對于伊集院平城、致軍忠畢、將又、被寄于阿多郡、加世田別府等之時、於所々御合戰之間、致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應四年九月　日

（島津貞久）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜錄前編一」二一二七号文書ト同文ナリ）

○四六五　禰寝清増軍忠状

大隅國祢寝又五郎清増軍忠事、

右、爲對治薩摩國凶徒等、去月五日御發向于谷山郡之間、最前馳參、同七日、合戰之時、致散々合戰訖、將又同十三日、御發向于伊集院之時、對于助三郎忠国以下之凶徒等、楯籠平城、致忠節訖、然早預御一見狀、爲備後證、粗言上如件、

曆應五年九月　日

（島津貞久）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雜録前編一」二一五九号文書ト同文ナリ）

○四六六　建部清増軍忠狀

大隅國祢寝五郎入道々恵子息又五郎清増謹恐々言上、自最初爲御方、自去建武三年迄于今、奉屬御手、隅州日州薩州所々合戰、致軍忠訖、就中、去三月廿七日楡井四郎賴仲与黨人大姶良新兵衞入道々心、同横山彦三郎、賴仲扶持人岡富三郎次郎入道以下之凶徒等楯籠、押寄當院大姶良城致合戰、同四月四日攻落之訖、將又、同十日賴仲舍弟又四郎賴重、楯籠押寄同國肝付郡加世田城、致合戰之刻、凶徒等同國鹿屋院高熊（隈）楯籠之間、去七月十一日押寄彼城、同十二日令退治訖、次同廿五日夜、賴仲若黨風早十郎・牧瀨源太以下數十人大姶良城忍入之間、押寄彼城致合戰之處、今月三日賴仲与黨人嶋津田三位房・饗庭九郎以下數百人凶徒、姶良庄井上寄来、取向城之間、即時馳向、令散々大刀打合戰、三位房以下凶徒數十人討取之訖、又同日大姶良城合戰、親類六郎次郎被疵訖、隨而同日崩城攻落之訖、又同夜賴重楯籠加世田城同前、次同四日賴仲与黨人薩州石堂彦次郎入道子息・肥後三郎兵衞尉以下之凶徒等楯籠、押寄大姶良城、鷹栖城致合戰、凶徒等數輩討取之訖、又同十二日賴仲楯籠日向國志布志城御發向之間、押寄彼城、同十三日令退治訖、然早預御一見狀爲備後證、粗恐々言上如件、

観應二年八月　日　　建部清増

（畠山直顕カ）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二三六七号文書ト同文ナリ）

○四六七　禰寝清増軍忠狀

大隅國祢寝又五郎清増恐々謹言上、

欲早被経急速御沙汰、預御一見狀、凶徒楡井四郎頼仲、同舎弟又四郎頼重、薩州凶徒等楯籠當院大姶良城、同國下大隅郡木谷城、鹿屋院壹谷城攻落致軍忠事、

右、去観應三年十二月三日夜、頼仲以下之凶徒等、忍取大姶良城之間、同四日、押巻彼城、連日致合戦之刻、頼仲引率薩州凶徒等、去年文和貳七月十日木谷構城塀、去月廿二日、同國鹿屋院壹谷楯籠之間、同廿四日攻入彼城、致散々合戦、頼仲与党人平岡四郎・風早十郎・薩州凶徒蓑和新次郎以下數輩討取之（攻）く落訖、將又、同日攻入木谷大姶良城、令對治所々城等之条、軍御奉行人野本藤二（行秀）見知之上者、爲預御一見狀、粗言上如件、

文和三年三月　日

（畠山直顕）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編一」二五一八号文書ト同文ナリ）

○四六八　畠山直顕書下

大隅國姶良庄内得丸六郎五郎跡事、爲合戦新所々預置也、早令領掌之、弥可被致軍忠之狀如件、

文和五年四月廿八日　（畠山直顕）修理亮（花押）

祢寝（清増）又五郎殿

○四六九　建部清増軍忠狀

大隅國祢寝又五郎建部清増軍忠事、

右、去延文元年十月廿五日、薩州凶徒大將三条侍從泰季并嶋津三郎左衞尉（マヽ）氏久以下、率數多軍勢、寄来加治木城、取向陣於所々之間、即時馳向致合戦之刻、同二延文正月廿七日、楡井四郎頼仲、打入日州救二郷胡麻崎、構城塀楯籠之間、不廻時尅馳向、致散々合戦、若黨大夫房被疵右足、同晦日、攻破彼城、頼仲・頼重以下、親類若黨等數十人討取之訖、仍自最前迄于今、所々合戦抽忠節之条、

御見知之間、不及巨細、然早預御證判、爲備後代、粗恐々言上如件、

延文貳年五月　日

（畠山直顕）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一五号文書ト同文ナリ）

○四七〇　禰寝重種軍忠状

大隅國祢寝孫四郎重種軍忠事、

右、去延文元年十月廿五日、薩州凶徒大將侍從泰季并嶋津三郎左衞門尉氏久、率數多軍勢、寄来當國加治木城、取向陳於所々之間、馳向致合戦之刻、同延文二正月廿七日凶徒榆井四郎賴仲、打入日州救二郷胡麻崎、構城塀之間、馳向致散々合戦、攻落彼城、賴仲・同舎弟又四郎賴重以下親類若黨等數十人討取之訖、仍所々合戦抽忠節之上者、預御一見之狀、爲備後代、粗恐々言上如件、

延文二年五月　日

（畠山直顕）承了（花押）

（本文書ハ「旧記雑録前編二」一六号文書ト同文ナリ）

○四七一　建部清平置文

大隅國祢寝院南俣す見の九郎清俊法名祐泉一跡事、子息八郎清政ニ他のさまたけなくゆつりわたされ候上者、もし文書おたいする仁出來といふとも、此證文ニまかせて、知行不可有相違者也、仍證文如件、

應永十九年三月廿日　　山城守清平（花押）

す見の八郎殿

○四七二　浄西書狀

譲与五郎太郎清忠所

右、彼清忠ハあひしたしきうゑ、養子たるあいた、浄西か本領祢寝院内用松名を、元亨御下文并配分狀を相副て清忠ニ譲渡事実也、又度々　綸旨　令旨・同三条殿御教書等、同恩賞としてけつしよの注文こと〳〵く一通ものこさす譲与ところ也、但孫四郎男ハ浄西か子たりといへ

とも所存ニ違間、先年ふけうせしめおはぬ、此上者、聊子孫親類とかうして、浄西か遺跡ニゐらん煩をなすへからす、仍爲後日、譲狀如件、

正平八年癸巳三月二日　　浄西(花押)

○四七三　大隅國目代源某書下

大隅國祢寝九郎入道日念子息八郎清通申、押寄當國佐氣岩村田地致苅田狼籍由事、訴狀副具書如此、去年牧五郎、田部上總房等　渡彼所於清通之由、載其狀欤、交名人等相共不日令出對、可被明申候、仍執達如件、

建武二年八月十八日　　目代源(花押)

伊佐敷又四郎殿

○四七四　建部清増譲狀

大隅國祢寝又五郎清増辞譲与　犬房丸水田薗荒野等事、ミつまつの薗のミそよりうゑ、いひれまろミねらの事、四至道恵のゆつりしやうにあり、

右しよりやうハ清増ちうたいさうてんのしよりやうなり、よて犬房丸に永代をかきてゆつりあたうるところなり、かきりある御くうしにおいてハ、たうゑのゆつりしやうにミへたり、そのまゝにつとむへきなり、よてゆつりしやう如件、

延文三年六月十日　　建部清増(花押)

○四七五　沙弥祐泉角信俊譲狀

譲与

大隅國祢寝南俣内九郎入道日念知行、伊佐敷内さけわのむら同さたの村内はゝ山のかりくら、南俣郡本内　正八幡宮御領三まいてんの内みなくち貳段半并西本その二ヶ所事、

右件の田畠かりくらハ、ほんせう文等をあいそへ候て、限永代、嫡子八郎まさきよニゆつりあたうるところなり、四至さかいニおきてハ、ほんせう文らニめいはくなり、

仍爲後日譲狀如件、

應永九年十二月九日

（沙弥祐泉）（角信俊）
しやミゆうせん（花押）

○四七六　沙弥祐泉角信俊譲狀

おうすミのくにの内、ねしめのゐんみなミ俣九郎入道日念ちきやうのいさしきの内、さけわのむら、同さたの村内はこ山、南俣の内、正八幡御領三まいてんの内貳段并畠二段西本のその二ヶ所事、

右件田畠かりくらハ、ほんせう文おあいそへて、限永代ちやくし八郎まさきよニゆつ（り脱カ）あたうるところなり、しゝさかいニおきてハ、ほんせう文にめいはくなり、仍爲後日譲狀如件、

應永九年十二月九日

しやミゆうせん（花押）

○四七七　一味建部尊重書狀案

其以後不能參會候、何事候哉、床敷存候、仍真存一昨日かこ嶋へ被參候、聽而此方へ可到来由、以一書被申遣候、能客にてこそ候へ、さそ何ニか存候て候覧、察申候、又今日紙をうつへく候、若衆一兩人御同道候て、可被懸御意候、さ様候ハゝ入見參可申承候、可被申候事候、重而又〻かしく、

（建部尊重）
一味

角
又八殿まいる

○四七八　一味建部尊重書狀案

そのゝちのあゆ御ゆかしく存候、御れうけんあるへく候、又なに事にて御あそひ候や、うけ給たく候、それの御物の本長〳〵置申候、やかて返しまいらせ候へく候、くハしく入見參まいらせ候て申承へく候、めてたく又〻かしく、

（建部尊重）
一味

〆

角又八殿

○四七九　一味建部尊重書状案

昨日者御連歌殊勝存候、仍明日見かしき大夫めし寄合へく候、今日あミを引せられ候てうほ入候、御合力可憑（マヽ）入候、すゝき一こん（献）まてたるへく候、さのミに候へ共、千うり給候ハゝ、すこし可給候、たのミ入申候、返〻あミ引せあるへく候、以面可申承候、又〻かしく、

山本より
一味

角又八殿

○四八〇　一味建部尊重書状案

返〻真存下着可然存候、御同心に候か、あり〳〵と
ゑしやく申度こそ候へ、期面上之時候也、

今朝あゆ川・聖道両津より、昨日被渡候とて、被申候ハ、真存今程両津に逗留候、一昨日出船候つれとも、天気わろく候とて船被留候、順風次第、大泊に着船たるへく候由に候、もし此方ニ被寄立日候す覧、よき客にてこそ候へ、神右衛門尉同道申へく候、いかさま立寄候ハゝ、以面可申承候、又〻かしく、

（建部尊重）
一味

〆

角殿

○四八一　建部重虎起請文

態一筆進覧候、別而念比ニ申合候間、相替有ま敷候、自然讒者讒言之儀雖有之、さ様之通仰候者則聞分可申候、従此方も奉臥八幡大菩（薩欠カ）相替事有間敷候、謹言、

慶長二霜月廿八日　　重虎（花押）

須美甚吉殿
進之候

○四八二　有榮沽却状

奉沽渡小河院内樋田内四反事

四至見本證文

右件田地者、有栄相傳（跡地）く也、然間直米拾肆石仁相副次第證文御勤ヲ、限永年、祢寝九郎殿（佐田宗親）永奉沽渡旱、仍沽券之狀如件、

正安四年正月廿六日　　有榮（花押）

○四八三　沙弥行恵譲狀

ゆつりわたすにしもとのせい三郎かその壹ケ所事、

右件薗者、七郎左衞門尉のてよりあたへらるゝものなり、しかれハかのさりしやうニまかせて、九郎きよまさりやうちすへきなり、委くハさり狀にミへたり、よて爲後日譲狀如件、

乾元二年六月廿一日　　沙弥行恵（花押）

子七郎三郎御房安次所

玄了入道てより（花押）

○四八四　清元避狀

さりのきたてまつるさうてんりやう、はたけた五たんの内、たうさこんひやうゑ二郎のつくり貳たんをハ、しさい候ニよて、ねしめ殿ニさりのきたてまつり候ところなり、ほんせうもんハるいちあるニよて、これをあいそゑす候、よてきやうこうのために、さりしやうくたんのことし、

嘉元貳年四月四日　　清元（花押）

○四八五　沙弥しやうい・建部親明連署沽却狀案

うりわたしたてまつるさうてんのりやうさたのむらもとゆきのミやうのうち、さけわのうちのすいてんさんやらの事、

しゝ

ひかしかきるいわ、

ミなミかきるとゝろきのたによりなへのたにくたり、

にしかきるうミ、
きたかきるうきつさかいのひられいしのたよりおほ（平礼石）
たにくたり、
みきのてんちさんやらハ、しやういかせんそさうてんの
りやうたり、しかるあひたゑうようあるによて、せに（所脱カ）
十七くわんもんニねしめの九らうとのに、ゑいたいを（か脱カ）
きてうりわたしたてまつるところなり、たゝしくうしに
をきてハ、御しミにんのときさうしのれうに、よねます（ママ）
ハまぬとく五舛、ほんミやうにわきまへられ候へし、こ
のほかのくうしハほんミやうにとゝめをきをはぬ、よて
うりけんの状如件、
嘉元三年三月十八日　　ちやくし建部親明在判
しやミしやうい在判

○四八六　沙弥さいれん沽却状案

うりわたしたてまつる、さたのむらの内、かつさわミや
うのさんや、はこやまのかりくら一か所事、
しゝ
ひかしかきるかちのたりやま、
ミなミかきるおたちミやう・かのせたお・しゝこめや
まのかくら、にしかきるおなしきしゝこめやまのにし
のはため・くきのわたせ・おしろまろかやまのしりの
むまわたせ・つゝしのわたせ・にたのはらのふるやし
きのきたのミち、
きたをかきるにたのはゝらのミちのほり、
みきのかりくらハ、さいれんかせんそさうてんのしより
やうなり、しかるを、せんにちやうし四郎次郎きよなを
にゆつるといへとも、ゑうようあるによて、しちのせに
十三くわん五百文ニ、ねしめの九郎殿ニ、ゑいたいをか
きてうりわたしたてまつる所なり、又りんしくわやくハ
ほんミやうにとゝめおハぬ、もしこのむねをそむきて、
ゑらんをいたさんともからハ、さいれんかしそんニある
へからす候、よてこ日のためにうりけんのしやう如件、
嘉元三年六月八日　　しやミさいれん在判

せう人しやミくわんせい在判

○四八七　沙弥さいれん請取状

はこ山のしろのせに十三くわん五百もんうけとり候了、もし四郎二郎きよなをゐらんをいたし候ハゝ、おほかちねをもこのしやうをもて、御ちきやうあるへく候、よてこ日のためニうけとりの状如件、

嘉元三年六月十日　　しやミさいれん（花押）

○四八八　建部清元譲状

ゆつりわたしたてまつるさうてんりやう、にしもとのそのゝ内みんふあまかそのゝ事、

四至　ひかしハかきるきし　みなミハかきるゑのきの
したのみち　にしハかきるくない入道かまゑのみち
きたハかきるかきね

みきくたんのそのハ、きよもとせんそさうてんのりやうなり、しかるを、九郎殿ニゑいたいをかきて、ゆつりたてまつるところなり、はやくちきやうせらるへきしやう、くたんのことし、

嘉元四年二月廿四日　　清元（花押）

○四八九　浄西書状

ゆつりわたす

しそくまこ四郎しけたねニおほすミのくにねしめのミなミまたもちまつミやうのうちせとのしたのその、をなしき田の事、

しゝひんかしこくたのにしのを　にしかきね
きたたいたう　みなミ田のミなミのくたくたりなり（でん脱カ）

右くたんのちハ、しやうせいちうたいさうしよりやう也、よてしそくしけたねニゑいたいゆつりわたすところ也、たゝししけたねなんしなくハ、もちまつちきやうの人、貳十貫文のようとうをなして、ちきやうすへき也、はう〳〵しよくうしにをきてハ、もちまつミやうのわきまゑのうち、五分一さたをいたすへし、よてこ日のためにゆつり状如件、

元弘三年正月十一日　　淨西（花押）

○四九〇　日念清政譲状

おうすミのくにねしめのゐんきたみなミのまたうちところ〳〵の事、
ゆつりわたす、しそく八らうきよミちちきやうすたるへきところ〳〵の事、
みきくたんのところ〳〵ハ、きよまさ日ねんさうてんのところたるについて、八らうに、ゑいたいをかきて、ゆつりわたすものなり、
一そたういその、同にしのその、同かうのハたけ、
一へくりのむらすいてんひわたした、同しんかいてんおてみたきやうゑのゆつりしやうこれあり、
しんにうてんのうちさんまてん（い脱カ）三たんはん、おかわのゐんのうちくまさきニほけきやうてん四たんにこれをさうはく、はんおハ、ほけきやうのくれうまいニあておハん、これハたいミやうしようしんの御ハうのかうのうちにこめたるなり、
一はたけた二たん、太郎さゑもんのてよりこれをうけとる、
一さけわのむらのうりけんをハちかあきら此間きれてなく候ちくのく（こ脱カ）ニくろきのうち、いまむらた五たん、同けうやうしのうち、すいてん五たん、ゆつるへきかね申されしほとに、ちうひやうきうニなりて、みせうふんたり、はゝのゆいこんをたかゑすとらするものなり、たゝしおものあふらてぬらゐそら（の脱カ）、よこかわのねうハうのてよりして、きよまさかいとりおハん、八らうかはゝのしよそんと申、日ねん同同書するよてかのおゝものてんち同所　ハしそく八らうニゆつりわたすところたり、又よこかわのねうハうのむすめひめわかこせんニ、せん日ゆつりたふしやうをあいそゑたるなり、このしやうそむきいらんおいたさんものにおいてハ、しんしてきたいのとかをうたへ申へきなり、せん日いや九らう同によしとん（モ）にゆつるところ〳〵しさいてん〳〵あ

るあいた、くりかへすところなり、そのしさいおハ一しにかきをくへきなり、よてしゝそん〳〵まてちきすへ（やう脱カ）きゆつりしやう、くたんのことし、

（元弘）けんこう三ねん十一月四日　　自ねん（日カ）（花押）

たけへのきよまさ　いまハ

○四九一　沙弥某書下

大隅國祢寝九郎入道日念申、同院伊作（マヽ）敷内佐下和村用作一丁五段、并有御徳政致苅田狼籍之上、百姓等令追放由事、訴状具書如此、事實者、不穏便、早可被明申也、仍執達如件、

元弘三年十二月廿二日　　沙弥（花押）

伊作敷又四郎殿

○四九二　建部清光譲状

おうすミのくにの内ねしめのいんみなミまたくらう入道日念ちきやうの地、いさしきの内さけわのむら、同さたのむらの内ハこ山、南またの内正八幡御りやうさんまいてん三段半、してりの内畠田二段西本その二かしよ、よりこをりおうねしめの内してりとのそのいつかしよ、同まかとの一のミなくちみそゝへ三段、ちくせんの國おうりえ田ちやう二段その一か所、ちくこの國にくろきにすかむた五段清みちか母おやのゆつり、同ゆいこんのことく、日念のきよミちにゆつりあたゆるてつきのしやう、同本しようもんあいくして、ますほうしまるにのこるところなくゆつりあたうる、たゝしもしますほうし丸いかなる事もあらん時ハ、ハゝをやちきやうすへし、仍ゆつりしやう如件、

建武元年十月廿五日　　建部清光（花押）

○四九三　修理所検校源某請文案

就于祢寝九郎入道日念（今者死去）子息清通訴申候、相觸伊佐敷又四郎親篤候之處、請文如此候、以此旨可有御披露候哉、恐惶謹言、

建武二年十月七日　　修理所検校源　請文

○四九四　沙弥道恵譲状

大隅國祢寝五郎入道ゝ恵辞

譲与　又五郎清増祢寝南俣内上直世村袖山荒野壹所并

田地一段大小　二あり

至志（四至カ）　限東高山水出穴　限西岩

限南路　限北尾立ノ上

右彼荒野田地者、紀氏女重代相傳之所領也、仍紀氏女未分之間、爲道恵計所配分也、但河窪腹子先日譲与所ニ、此荒野等不可譲与、至公事者、田地壹分可沙汰也、仍譲状如件、

康永三年六月廿九日　　沙弥道恵（建部清高）（花押）

○四九五　沙弥道恵譲状

祢寝五郎入道ゝ恵子息又五郎得分事、

譲与

一彦松童　土持童　やす房童

この外、先日付奴原等ハ不及註也、いさゝいらんをな（か脱カ）

さぬものハ、たうゐか子孫ニハあらさる也、よて譲状

如件、

貞和六年十一月十七日　　道恵（建部清高）（花押）

○四九六　沙弥道恵譲状

大隅國祢寝院内二河のあかゝり山よりハ南すミやの立山までハ又五郎可知行、

一下大隅野里内朝井同可知行、

右譲状如件、

文和肆年八月廿五日　　沙弥道恵（建部清高）（花押）

○四九七　建部清増譲状

大隅國祢寝又五郎清増辞

譲与犬房丸村ゝ事、下大隅郡内朝井村・祢寝院内二河村内あかゝり山よりハ南、立山までなり、但此内朝井村ねんくのうち五石、二河村内むら松薗、同水田荒野後家一期之程、後家心ニまかすへく候、

右村ゝ譲与所犬房丸也、永代をかきるへきなり、よて譲

状如件、

延文三年六月十日　　建部清増（花押）

○四九八　角九郎入道譲状

ゆつり状事、

右件りやうふん

一にしもとのその

一さきわのむら

一はこやまかりくら

一やまもとの三んまいてん三たん

一はたけた二たん

右りやうふん本もんしよへあいそゑて、永たい八郎ニゆつりわたすところしちなり、もし八郎男子なく候はゝ、まこ四郎このりやうおあいつくへきなり、よてゆつり文状如件、

（角九郎入道清俊）すミの九郎入道

應永九年ミつのへうま十月廿八日　　（花押）

○四九九　禰寝清平沽却状

（依カ）有用ニ賣渡屋敷一ケ所□（之事カ）

合代銭五貫文定

大隅國祢寝院南俣西本内本　屋敷

四至　限東山ノ西ノハタメ　限西角殿屋敷
限南浦大道ノ上ノ岸　限北尾ノ南ノハタメ

右件屋敷者、清平重代地也、而代銭五貫文限永代角左衛門次郎殿仁所賣渡也、但於御霊宮五月五日祭者、任先例可被勤仕也、仍爲後日之状、如件、

應永十七年六月三日　　清平（花押）

○五〇〇　角清茂沽却状

ゑうよう候によてうわたし申候、

大隅國祢寝南俣西本角薗内、宮脇ほんま薗臺ケ所か事、右件乃薗ハ、おやにて候すミの左衛門次郎、ちやけのそうりやう祢寝殿より、代のようとう伍貫文ニ、永代をかきてかい給ハりて候を、ちくこかおちすミのけんれうに、ほんせう文らをあいそへ候て、ちきもつ伍貫文ニうりわ

たし申候ところしち也、もし此そのに、いさゝかのいらんわつらい候ハゝ、ちくこかさたしあきらめ申へく候、もしあきらめゑす候ハゝ、ほんせにかへし申候へく候、仍爲後日うりけんの狀如件、

應永卅二年三月廿九日　（花押）

すみのちくこきよもち

○五〇一　角孫四郎清種沽却狀

ゑうよう候によて、うりわたし申候、大すミのくにねしめのミなみまたもちまつミやうのうち、たうやまの一ケ所か事、

右件のそのハ、代のようとう八貫文ニ定候て、ゑいたいをかきて、しやきやうすミとのへうりわたし申候ところしちなり、もしかのたうやまのそのゝに（らカ）、しさい申人候ハんときハ、すミのまこ四郎かさたしあきらめ申候へく候、もし又あきらめゑす候ハゝ、ほんせにをきそくにかへし申候へく候、仍爲後日狀如件、

應永卅二年三月廿九日

ねしめのすミのまこ四郎きよたね（略押）

○五〇二　角清宣譲狀

譲與孫犬竊女

一西本屋敷之事

一河原田三段之事

一佐多村伊佐敷名之内鷺輪之村事

右件之所領清宣之重代相傳地也、所謂明應元年壬午十一月廿四日屋形肝付仁発向之合戦、一子孫八郎清智討死、依爲彼嫡女、孫犬竊女本證文相副、譲与　實也、縱就彼所領、雖有妨、不可有相違候、仍譲狀如件、

明應五丙辰季十二月五日　建部清宣（花押）

孫犬竊女譲狀

○五〇三　一味建部尊重書狀案

▽四　又申候、秋の夜のなかきねられぬまゝ、まひつゝみ（マ）

ともいにしへ身に侍りし秋の夜の長きを老の枕にそしつ、一笑〻〻、いかさま参候て礼可申候、

誠不寄存候處、鮎送賜候、今年者これともにニたひ見申候、弥敷物に候、御芳志難謝候、則賞翫申候、仍去夏ハ参候する由申候て、不参候事、于今口惜存候、然ハ八雲御集披見望候間、彼定心軈而可参候、其時細〻礼可申候、返々御心さし祝着候、かしく、

角殿　まいる　　（祢寝尊重）一味

〔〈附箋〉『「右文書五拾三通祢寝越右衛門」』〕

○五〇四　大隅守護名越時章裁許下知状

大隅國御家人佐多九郎宗親與舎兄四郎親綱相論條条、

一大泊浦分、可勤仕御公事由事

一令押妨後家分領内宮田新開田由事

一打止往古道踏通新道於宗親領内由事

一國司初任、地頭給畠、親綱一向令押領由事

一武安名、依爲重役地、可被省宛亡父遺跡御公事於惣領由事

一二女遺領事

一宗親代官爲貞、令奪地藏女母子参人由事

右七箇条、任去九月廿一日兩方和與狀、遁不可有相違之狀、下知如件、

正嘉貳年十月十八日　　（名越時章）前尾張守平（花押）

○五〇五　沙弥某施行状

大隅國御家人佐多九郎宗親与舎兄四郎親綱相論条〻

一大泊浦分、可勤仕御方由事

一令押妨後家分領内宮田新開田由事

一打止往古道踏通新道於宗親領内由事

一國司初任、地頭給畠、親綱一向押領由事

一武安名、依爲重役地、可被省宛亡父遺跡御方於惣領由事

一二女遺領事

一宗親代官爲貞令奪地藏女母子参人由事

右七ヶ條、任去九月廿一日兩方和与狀、遁不可有相違云〻者、早任被仰下旨、可被存其旨之狀如件、

正嘉二年十月廿五日　　沙弥（花押）

敦賀刑部左衞門尉殿

○五〇六　六波羅御教書

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸代憲光申所領事、去六月廿四日関東御教書如此、宗親後家在京之間、尋問相傳仁之處、地藏并石王之知行云〻、早可催上彼兩輩之狀、如件、

文永六年九月廿日　　散位（北條時輔）（花押）

陸奥守（北條時茂）（花押）

守護代

○五〇七　関東御教書

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸申宗親遺領事、阿古丸者帶弘長三年宗親譲狀云〻、舍弟倉次郎丸女子地藏等者、令帶彼弘長三年宗親譲狀否相尋子細、有譲狀者、可令取進案文之狀、依仰執達如件、

文永八年十月十六日　　相模守（北條時宗）（花押）

左京権大夫（北條政村）（花押）

相模式部大夫（北條時輔）殿

○五〇八　大隅守護代藤原盛定擧狀

大隅國御家人佐多九郎宗親子息阿古丸申亡父遺領事、御教書并訴狀具書等去八月廿七日到來、謹以拝見仕了、即時御教書相副訴狀具書等、令觸候地藏女・倉次郎丸代國能候之處、今月廿一日御請文進上之、以此旨可有洩御披露候、盛定恐惶謹言、

文永九年十月廿一日　　大隅國守護代左兵衞尉藤原盛定（裏花押）上

○五〇九　大隅守護代沙弥浄念擧狀案

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸申、亡父遺領事、

二月十二日御教書具書等、同三月廿六日到來、謹以拜領仕候旱、抑宗親遺領事、任被仰候旨、企參洛可令弁之由、相觸國能之候之處、去文永九年八月一日下預候、任御教書之旨、去三月上旬之比、出國上洛仕候之由、建部字地蔵國能妻御請文如此候、仍進上之、以此旨可有洩御披露候、淨念恐惶謹言、

文永十年四月八日　　守護代沙弥淨念上

○五一〇　関東御教書

到来弘安二年八月二日

大隅國御家人沙汰九郎宗親子息阿古丸（定親）申亡父宗親跡事、可爲未分之由、被仰下之處、号宗親二女子可預配分之由、進申狀之後、彼女子無音之處、自元無二女子之間、阿古丸申之、仍尋究宗親二女子有無之実否、可令注申之狀、依仰執達如件、

弘安二年三月廿六日　　相模守（北條時宗）（花押）

大宰少弐（少弐経資）殿

○五一一　関東下知狀

可令早定親童名阿古丸領知大隅國

佐汰村伍分參扣屋敷定同國桑東郷武安名伍分參事

右、亡父佐汰九郎宗親未處分之間、所被配分也、早任先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

弘安四年六月二日　　相模守平朝臣（北條時宗）（花押）

○五一二　大隅守護千葉宗胤覆勘狀

異國警固番役事、自去六月一日迄于八月晦日九十日内佐除汰石王分定五十四日、被勤任候了、恐々謹言、

弘安六年十月廿二日　　宗胤（千葉）（花押）

佐汰弥九郎殿

○五一三　大隅守護千葉宗胤覆勘狀

警固番役事、自九月廿五日至于十一月四日被勤仕候旱、恐々謹言、

十一月四日　　宗胤（千葉）（花押）

佐多弥九郎(定親)殿

○五一四　大隅守護千葉宗胤裁許下知状

大隅國御家人祢寝南俣佐汰村本地頭弥四郎親治与同國御家人佐汰西方本地頭弥九郎定親相論、異國警固番役事、右、兩方雖申子細、所詮定親於各別御家人、帯安堵御下文之上者、警固番役事、可致各別勤仕之狀所仰下知如件、

弘安六年十一月十八日　　宗胤(千葉)(花押)

○五一五　大隅守護代道意書下

佐汰弥四郎殿与弥九郎殿被相論候警固番役事、如御下知狀者、兩方雖申子細、所詮定親於各別御家人帯安堵御下文之上者、警固番役事、可被致各別勤仕之狀、所仰下知如件云々、然者、可被(マヽ)其旨候也、恐々謹言、

弘安六年十一月廿二日　　道意(花押)

丹比小次郎殿

○五一六　大隅守護千葉宗胤覆勘狀

今津(筑前)後濱警固要月皆參事、被勤仕候了、恐々謹言、

弘安七年五月十二日　　宗胤(千葉)(花押)

佐汰弥九郎殿

○五一七　大隅守護千葉宗胤書下

越前々司盛宗追討騒動之間、折節依訴訟當參之刻、被馳向之条、神妙候、於今者世間無爲、非警固之當番衆者、可令下國給候、恐々謹言、

弘安八年十二月十八日　　宗胤(花押)

佐汰弥九郎殿

○五一八　唯仏書狀

蒙仰候去年分弘安八警固番役、御勤仕之条御書下事、今朝之程申之、可令進之由、相存候之處、今夜私宅令焼出候間、物急候、後便可令取進、奴々不可有疎略之儀候、恐々謹言、

弘安九年二月廿一日　　唯仏（花押）

佐汰弥九郎殿　御返事

○五一九　大隅守護千葉宗胤覆勘状

異國警固今津（筑前）番役事、九十ヶ日内五十四日者、以代官治部房了親、被勤仕候了、残日數者、九郎二郎殿分之由、承候旱、恐〻謹言、

弘安九年八月晦日　　宗胤（千葉）（花押）

佐多弥九郎殿

○五二〇　大隅守護千葉宗胤覆勘状

異國警固皆参事、任関東御教書之旨、自去四月中被勤仕候了、恐〻謹言、

正應元年八月一日　　宗胤（千葉）（花押）

佐汰弥九郎殿

○五二一　大隅守護千葉宗胤覆勘状

異國警固今津番役事、自去六月一日迄八月晦日、以代官治部房了親令勤仕給候了、恐〻謹言、

正應四年九月三日　　宗胤（千葉）（花押）

佐多弥九郎（定親）殿

○五二二　佐多定親代治部房了親着到状

大隅國御家人佐多弥九郎定親代治部房了親當参之間、今度騒動之時、令馳参候、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

正應六年五月七日　　了親上

承了（北條兼時）（花押）

○五二三　関東下知状

佐多弥九郎定親代了親与同弥四郎治相（親脱カ）論大隅國佐多村内田柒段園一所事、

右、如大宰少貳経資法師（法名浄恵）大友兵庫頭頼泰法師（法名道忍）執進訴陳状并兩方所進證文等者、枝葉雖多、所詮、於件田

屋敷者、定親等伯母建部氏之跡也、無男子於未處分令死去早、而定親亡父宗親治亡父親綱令和与之間、任彼狀不可有相違之由、守護人（尾張前司入道）正嘉二年令下知之後、已經卅年之間、如式目者、今更不及沙汰、然則、守和与狀并先下知、各可領知焉、

一親治号奉行人狀構出謀書由事、

右、相互雖有申旨、所詮、無正文之間、非沙汰之限矣、以前条々、依鎌倉殿仰、下知如件、

永仁三年五月一日

陸奥守平朝臣（北條宣時）（花押）

相模守平朝臣（北條貞時）（花押）

言、

八月六日　　爲清（花押）

田所殿

○五二四　爲清書狀

佐多弥九郎殿事、おほせかふりて候しあいた、今津に便宜時申て候へハ、さやうにたかい候ハん事あさましく候、今年の番役をハ御めん候へきよししそくの御かたに申へきよし被仰下候、このよしを御つたへ候へく候、恐々謹

○五二五　大隅守護北条時直覆勘狀

大隅國役所今津（筑前）後濱警固番事、當國御家人佐多阿古二郎被勤仕候早、仍狀如件、

永仁五年八月四日　　時直（北條）（花押）

○五二六　大隅守護北条時直覆勘狀

大隅國役所今津（筑前）後濱警固番役事、以當國御家人伊佐敷阿古次郎代二郎三郎被勤仕候了、仍狀如件、

永仁二年八月二日　　平（北條時直）（花押）

○五二七　光忠・家綱連署書下

大隅國桑東郷武安名内籠作東迫事、佐多弥四郎親治与平山肥前并生仏代朝盛、以和与相互可知行之由申候、先日

被申成関東御教書之間、聊非無子細、可被支申否、不日可被弁申候、仍執達如件、

正安元年十月十四日　　家綱（花押）

光忠（花押）

佐多孫九郎殿代

○五二八　大隅守護北条時直覆勘状

大隅國役所今津後濱警固番役事、以當國御家人佐多孫九郎信親代兵衛四郎忠弘、被勤仕旱、仍状如件、

正安元年十一月八日　　（北條時直）平（花押）

○五二九　鎮西探題裁許下知状

佐多孫九郎信親代季長与同弥四郎親治相論大隅國桑東郷武安名内古作并東迫田畠事、

右、就正應四季十一月廿五日関東御教書、有其沙汰之處、去十月廿五日、両方出和与状之上者、相互守彼状、可令知行矣者、依仰下知如件、

正安元年十二月四日　　（北條実政）前上総介平朝臣（花押）

○五三〇　大隅守護北条時直覆勘状

大隅國役所（筑前）今津後濱警固番役事、當國御家人佐多孫九郎信親代兵衛四郎忠弘、勤仕旨、仍状如件、

正安二後七月廿六日　　（北條時直）平（花押）

○五三一　大隅守護北条時直覆勘状

大隅國役所（筑前）今津後濱警固番役、當國御家人佐多孫九郎信親代兵衛四郎忠弘、被勤仕状、如件、

正安三七月廿五日　　（北條）時直（花押）

○五三二　爲國覆勘状

大隅國異賊警固番役、去自四月被勤仕候了、仍執達如件、

嘉元三後十二月廿九日　　爲國（花押）

佐多孫九郎殿

○五三三　建部信親避狀

建部信親謹言、

大隅國桑東郷内武安名五分三田畠屋敷山野等事、

副　代々證文等、

右件田畠山野等者、依祖父宗親未處分死去、預関東御配分知行之地也、而方々御公事勤仕難澁之間、所辞進當名於嫡家祢寝郡司清保也、且彼名内田畠等先年入置質券畢、弁本銭可被知行、於四至坪付者、見本證文、仍辞狀如件、

正和四年十月十日　　建部信親（花押）

○五三四　建部信親沽却狀

大隅國祢寝南俣佐多村内四段田四段大者、信親先祖相傳所領也、而定代銭拾貳貫文相副　関東御下知限永代奉沽渡祢寝殿早、於御公事者、御領物銭伍拾文、雑事米壹舛并御佃米柒舛可被勤仕候、若彼田仁号信親子息親類出来、後日違乱之時者、以此狀被申行罪科、任證文可有相傳知行候、仍爲後日沽券狀如件、

正和五年後十月五日　　建部信親（花押）

○五三五　鎮西下知狀

大隅國祢寝院郡司清保法師法名行智代長圓申、同國佐多村西方五分三桑東郷内武安名五分三并同村内田地四段余事、右、彼所々者、當院南俣庶子佐多孫九郎信親今者出家法名道智帯御下文以下證文等、雖令領知之、本所年貢関東御公事等難治之間、不殘段歩限永代、或避給之、或沽却之間、買取之、令勤仕大小御公事等、知行無相違之處、信親背避狀并沽券押妨之旨、行智就訴申之、去年十一月一日・十二月十四日・兩度雖遣召文、無音之間、今年正月廿七日、以加治木郡司政平、尋問難澁實否之刻、如執進同年五月六日道智請文者、彼所々道智重代相傳所領也、雖然依病躰半中風、難勤仕重役御公事之間、就爲一門嫡家惣領相副調度證文等、且令沽却之、且爲勤仕御公事、令避渡祢寝郡司入道行智訖、押領事無跡形不實云云者、云沽却之段、云避与之篇、道智承伏訖、無押領儀之旨、進請文之

上、不及異儀、隨而如行智所進正和四年十月十日道智二時信親
狀者、大隅國桑東郷内武安名五分三田畠屋敷山野等事、
右件田畠山野等、依祖父宗親未處分、預関東御配分知行
之地也、方々御公事勤仕難堪之間、所避進當名於嫡家祢
寝郡司清保也云云所詮、如同五年後十月五日同人狀者、大
隅祢寝南俣佐汰村内四段田大四段者信親先祖相傳所領也、
而定代銭拾貳貫文、相副関東御下知、限永代奉沽渡祢寝
殿訖云云同前、如同年十一月十二日同狀者、大隅國祢寝南
俣佐汰村方五分三事、右所者信親重代相傳地也、而方々
御公事難治之間、祢寝郡司清保依爲領一門家、相副関東
御下文并代々手継狀以下證文等、永避与彼所於清保云云、
就中爲私領之條、前々其沙汰訖、無疑殆、然則於彼名々
田畠屋敷等者、任正和四年同五年道知避狀并沽券等行智
知行不可有相違者、依仰下知如件、

嘉暦三年八月廿九日　　修理亮平朝臣（花押）

○五三六　將軍宗尊親王家政所下文案

將軍家政所下　建部宗親
可令早領知大隅國祢寝院佐汰村内田肆町桑東郷武安名
田伍町柒段大狩倉拾箇所西方事、
右、亡父親高未處分之間、所被配分也、早守先例、可被
沙汰之狀、所仰如件、以下、
建長五年十二月廿八日　　安主清原
令左衛門少尉藤原　　知家事清原
別當陸奥守平朝臣（北條重時）在御判
相模守平朝臣（北條時頼）在御判

○五三七　前大隅掾建部親助申狀

前掾建部宿祢親助謹言、
言上祢寝院司清貞訴申爲薩摩國所部顕娃郡住人忠家等
号母領以去六月卅日令押入事、
右、件祢寝院南俣者、親助父故頼親之所領也、而頼親存

生之時、所譲與親助也、仍頼去(親脱カ)天永三年四月十八日死去之後、任處分親助惣領之刻、頼親負累官物并旁負物、蒙其責之日、弁依無術計、副相本公験於新券、沽渡於伯父頼清畢、以何證文、忠家可令領知哉、雖頼親之娘、不預處分、何況号其子、忠家等之妨非道也、仍任道理、陳狀如件、以解、

久安三年七月十五日　　前掾建部宿祢(花押)

○五三八　佐汰宗親所領注文案

注進　佐汰九郎宗親跡大隅國佐汰村桑東郷武安名等内田地并浦山野等事、

合肆町壹段内

上田一町九反　中田一町五反大

下田五反大

狩倉玖箇所内

一嶋本名トマリ　オトシノクラ此内ニ在

一イカノ浦

一小浦

已上浦

一ニタ山

一ハシ本名キノ原

一牛カキノ本名原

一イサシキ本名宗親屋敷イトハルコノ内ニ在

已上山野

右、佐汰村西方分大略注進如件、

注進　桑東郷武安名田地并屋敷等事、

合

古河田伍段　大道田肆反

平田參反　いてのした田捌反見作壹反残川成

松木田貳反　給田伍反

坂本田參反　かきそい田貳反

ナシノキ田貳反　樋渡田貳反

石本伍反　さるはミ田小

村方小社御祭田參反　薗田貳反饗料立用

已上參町玖段小内
除田五反
定田參町肆反小
同屋敷柒箇所 在大小
右、大略注進如件、
文永十一年九月　日

○五三九　六波羅施行狀案

可令早　定親（童名阿古丸）領知大隅國佐汰村伍分參（加屋敷定）同國桑東郷武安名伍分參事、
右、任今年六月二日関東御下文之旨、可令致沙汰之狀如件、
弘安四年七月三日
左近將監（北條時国）平朝臣 在判
陸奥守（北條時村）平朝臣 在判

○五四〇　執印代大法師某下文

正八幡宮御領祢寝佐汰村名主弥九郎定親与同舎弟石王代阿闍梨親西相論、定親所領内野巖田四段事、
右、如定親申狀者、枝葉雖多、所詮親父九郎宗親未處分之間、彼遺跡田畠山野等事、定親并石王代官令言上関東之日、相分于五分之二三、而三分者、定親之得分者、石王得分之由、賜御教書、令下向後、石王代親西与定親寄合、任御教書之旨、三分者定親領知之、二分者石王代親（西）（領脱カ）知之處、今爲親西定親（マヽ）西定親所領内水田字野巖田擬令押領之條無謂云々、如親西陳狀者、佐汰九郎宗親未處分之跡、五分三者定親、五分二者石王、可令領知之由、関東御下知厳重之間、彼（田）由畠山野等相分時、建部氏女寂勝寺殿跡水田中嶋田二段田四段（四段脱カ）大加于宗親領、而相分之時、中嶋田二段者定親分、四段田四段大者石王分、令領知之處、弥四郎親治稱女子分、中嶋田并四段田押（マヽ）之間、定親分者中嶋田二段許也、石王方者、四段田四段大也、仍石王分二段大爲不足間、任関東御下知狀、五分三五分二可爲平均之由厳重也、然者、二段大不足分仁野巖田四段内二段可被相分由令申處也云々、所詮者、如狀者、爲弥四郎親治稱

女子分、石王所領内四段田四段大押取之間、其代可領作定親所領野巖田四段内二段云々、此條其不審也、爲親治令押領石王領田者、如定親申狀者、可致沙汰之處、無其儀而号親治押領田之代、擬令押妨定親所領内之條、理豈可然哉、隨而如定親訴狀者、親治取奉行人代官狀、令押領之由載之、此條頗非無不審、所詮親治押領事者、重有訴訟者、可令尋沙汰也、至定親田者、任配分之旨、如元定親可令領作之狀如件、

弘安六年五月　日

執印代大法師(花押)

○五四一　建部親治和与狀案

和与

桑東郷武安名内古作田地并東迫田畠等事、

右件田畠等者、任本主心妙識狀、親治致訴訟之處、各主等代朝盛雖番訴陳、以和与之議、古作内田地貳段并東迫内水田貳段畠地参分壹、朝盛出避狀之早、然間彼避狀内、古作田地壹段并東迫參分壹畠地者、親治又信親之方仁避与之早、仍無向後違乱、各可令領知也、若於致違乱之輩者、相互可被行罪科候、仍爲後日和与狀如件、

正安元年十月廿五日　　建部親治 在判

○五四二　建部定親所領注文案

大隅國御家人佐多村内 西方 東方 本地頭弥九郎建部定親謹言、

注進祢寝南俣内佐多村并桑東郷武安名田地事、

合

一佐多村内貳町捌段内　正八幡宮半不輪御領

正八幡宮貢進田半 加後家分定

件田地者、依爲半不輪地、國司御拜任之時、自國衙被進宮之間、名主一向下地共不令進退者也、同御佃米一石四斗二舛 加後家分定

一丁三段 加舎弟石王丸分定 定親知行

但如　関東御配分狀者、五分三者定親、五分二者石王丸可知行之、爰彼石王丸者、爲物狂不覚人之間、不相叶

関東御用、避自領居住于他國之間、訴訟最中也、

一丁五段　　祖父親高後家知跡

件田地、雖請継六女子、相具非御家人嶋津庄官下大隅南方弁済使左近入道寂念于今知行之、任　関東御下知并和与状、致其沙汰御沙汰最中也、

一桑東郷武安名六丁内半不輪國領

正八幡宮貢進田三段

件田地者、國司御拝任始、自國衙被切進于　正八幡宮間、下地共不相綺、名主一向社家進止也、

同浮免経田

一丁（令弁済于國衙以段二定所當物経講供祈令勘合許也、）

二丁八段（加舎弟石王丸分定）　本名定親知行

一丁四段　　東郷郡司義通知行

三段　　姫木大夫入道ゝ西知行

非御家人分

三段　　正宮所司権執印法橋永円

三段　　同所司廳検校円秀

三段　　屋加丸駿川房

六段（不作）主神司恒久後家

右件所領者、代ゝ賜　関東御下文、所令知行也、而於佐多村者、先祖之時、　正八幡宮社寄進之間、御佃米令進宮者也、雖然依爲半不輪御領、云國衙云大宰府所當物令進済之者、字次親高二女子無子孫、爲未處分令死去之間、宗親領分内者、宗親令知行、親綱領分内者、親綱可知行之旨、依令和与、任于状給尾張守殿御下知、自正嘉二年令領知之處、爲親治弘安五年始押領之、次武安名者一円國領也、依之任去二月廿日関東御教書并千葉太郎（宗胤）殿御施行旨、注進言上如件、

弘安八年十月日　　建部定親

○五四三　建部定親重申状

（外題）「如申状者、尤有其謂、早任傍例、可被配分當名諸公事六分一於之状、如件、

目代権寺主（花押）」

桑東郷武安名主建部定親重言上、

欲早被停止東郷郡司義通僞陳、任國例、蒙國廳御支配、

義通知行分當名六分一佛神事以下諸公事等事、

件條、如義通陳狀者、嫡子親高（定親ノ祖父）女子仁相分時、女子分一丁、片寄于諸公事等國作田大所弁來也云々、此條以外虚誕也、當名者、國作無之、厨家田四段、被宛置内三段、本名一段、義通領分也、國衙文書明白也、仍弁來事于今無相違之處、不宛當名國作弁済之由、載于陳狀之条奸謀也、抑當名色々済物公事内、御廳御膳所雜士（仕）者、本名与義通領分、各年勤仕之、残済物公事使ニ弁物等六分一、自親父篤通之時、至義通弁勤來之處、被引募厨家書生雜免之間、彼此自本名依入田地、其代可有沙汰之由、雖令申之、無承引、又残佛神事并本役等雖令催促、難澁之間、無未進本名仁依被付、御使任國例傍例、可被御廳支配之由、可令言上也、爰義通知行者、字阿宇毛内六段・河副八段、以上一丁四段也、當名者、又田數六丁也、國衙文書明鏡也、然而本名小分有余田之間、義通領分六分一、自篤通之時、所令弁勤也、次義通所進當名田地坪付注文不存知、以何文書令注出哉、被召正文、欲令披見哉、次例名以下色々新田等事、自國衙被宛置之条、爲領主雖爲難堪、爲國例之間、不申及之、此條者不及私問答、次郡司得分抑留之由事、藏司茜者宰府使方弁分也、御藏召物又使分也、但此物等者、依爲雜免、當時者不済之、又國検・行騰役事使分也、所詮爲國例上者、被停止義通僞陳、爲蒙國衙御支配、重言上如件、

弘安九年閏十二月　日

○五四四　ゆしん・建部定親連署譲狀

ゆつりわたす、あこしらうにとらするところ、

さたのにしかたのむらのすいてん、その、かゝいさんや

にいたるまてのこさす、をなしきくわのとうかうたけや

すのしたいの御くたしふミ・てつきのせうもんあいそゑ

て、あこ二郎にゆつりわたすところしつなり、よてこに

ちのためニせうもんの事し、

永（仁）ゑんにんにねん六月一日　たけへのさたちか（建部定親）（花押）

ゆしん（花押）

○五四五　建部親治書状

六反太田事、二分にうちわけ給ハり候なから、かの田をかくへつ御さた候て、御下知候上者、二分水田四反太の田を、任貳條御下知旨、わけ給候たく候、六反太田（ニ脱カ）をいては、いろい申へからす候〳〵、恐ゝ謹言、

二月十三日

阿古二郎殿　親治（親綱ノ子）（花押）

永仁四年二月十三日

○五四六　建部定親所領注文案

大隅國御家人佐多村内西方東方本地頭弥九郎建部定親謹言

注進祢寝南俣内佐多村并桑東郷武安名田地事、

一桑東郷武安名六丁内半不輸國領

正八幡宮貢進田三段

件田地者、國司拜任始、自國衙被切進于正八幡宮間、下地共不相倚、名主一向社家進止也、

同浮免経田一丁令弁済于國衙以段二疋所當物経講供析令勘合計也

二丁八段加舎弟石王丸分定本名主定親知行

一丁四段　東郷郡司義通知行

三段　姫木大夫入道ゝ西知行

非御家人分

三段　正宮所司権執印法橋永円

三段　屋加丸駿河房

六段木作（禾）　主神司恒久御家

右件所領者、代ゝ賜　関東御下文所令知行也、而於佐多村者、先祖之時、正八幡宮私寄進之間、御佃米令進宮者也、雖然依爲半不輸御領、云國衙、云大宰府、所當物令進済之者字（乎）、次親高二女子無子孫、爲未處分令死去之間、宗親領分内者、宗親令知行、親綱領分内者、親綱可知行之旨、依令和与、任于狀給尾張守殿御下知、自正嘉二年令領知之處、爲親治弘安五年始押領之、次武安名者一円

國領也、依之任去二月廿日　関東御教書并千葉太郎(宗胤)殿御施行旨、注進言上如件、

弘安八年十月　日　　建部定親

○五四七　建部信親沽却狀

大隅國桑東郷武安名内宮田三段三角田一段小犬丸已上五段、先年之比、木房次郎雖令沽却、云方々御公事、云御祭、無沙汰之間、爲本名之煩上者、返本物用途、可被知行本名候、仍狀如件、

元亨三年三月十八日　　建部信親(花押)

○五四八　建部信親譲狀

建部信親謹　譲与養子力(親吉)壽殿所

大隅國祢寝南俣内佐多村西方五分三事

右件田畠山野河海等者、信親重代相傳所領也、而當俣惣領仁一門嫡家祢寝郡司清保子息力壽殿、於年来養子依有奉公、相副関東御下文以下調度證文、限永代所譲与如件、

正和五年十一月十二日　　建部信親(花押)

○五四九　有河福寿丸代宗純和与狀

和与

大隅國佐多村西方五分二三内牛垣原事

右於原者、三分領主三郎次郎清武与二分領主有河五郎入道孫子福寿丸、以和与儀、所別二三也、仍二方四至(限東佐多堺并牛垣下高尾崎限南通尾限西馬戸世口中尾并岩波多目限北佐多堺)殘於東南原者、爲三分内可有御知行候、然者於向後者、守和与狀不可有失論候、如件、

元徳四年八月十五日　　福寿丸代宗純(花押)

○五五〇　建部親房沽却狀

大隅國伊作(佐)しきの内、くきのさこのすいてん(一段)いたんの事、ようゑう候によて、はまのひこ二郎とのに、ゑいたいをかきて、代ようとう貳貫文にうりたてまつるところ實也、右件すいてんハちかふさかちう代のしよりやうたるうゑ

ハ、たとい子孫實子とも申、やうしけいやくの人とも申、さたをいたし、いらんさをい申候ハんともからハ、ちかふさかしそんにあらす候、このよやうをむねとして、さうてん候へく候、りんしふやくまんさう御くうしをとゝめ候うゑハ、いきのしさいあるましく候、こくかのなしものハ、しやうさもつ十文おくとにそうりやうにわきまふへく候、仍爲後日、うりけんのしやう如件、

暦應五年五月十二日　　建部ちかふさ（花押）

○五五一　世戸山のゆいあ請文

さたのにしかたいとはらのはしのきたの所たうまいの事、きたとのゝおほせニしたかい候て、わきまへまいらすへく候、よてのちのためにしやう如件、

建武五年壬七月卅日　　せとやまのゆいあ（世戸山）（花押）

○五五二　建部ちかあつ沾却状

ゑうようあるによて、うりわたしたてまつるおほすミのくにねしめのミなミまたのうち、いさしきのむらかミのわきあかをきた二たん事、

ミきのたハ、ちかあつかしふんちかあきらと、上のわきの三ふらちか（う脱カ）ミちとさうろんすといゑとも、おんたくのきをそんして、わよせしめて御けちを給ハりた地也、しか（る脱カ）るにゑうようあるによて、しろのせに四くわんもんにさためて、ねしめとのにゑいたいをかきてうりわたしたてまつるところ也、たゝし御くうしにをきてハ、御りやうもつのせに五十もんをわきまへらるへきなり、このほかりんしくわやくまんさうくうしハ、もとよりこれなきちなり、もしこのむねをそむきて、ゑらんをいたさぬともからハ、ちかあつかしそんのきあるへからす候、よてこけんのしやうくたんのことし、

けんかう（元亨）四年正月廿六日　たけへのちかあつ（花押）

『付箋』「右文書四十九通佐多家御文書之内ニアリ」

○五五三　建部親綱和与狀

親綱与宗親和与佐田村所務条〻御公事等事、

一後家分堺内宮田并新開發田事、

件若宮田戸柱田者、可避地本於社頭之由、宗親申上者、不及子細、次新開發田事、自本不相綺之上、自今以後不可有其妨矣、

一打止古道踏通宗親領内新道由事、

件道事、以繪圖朱被定大道畢、仍御判明白之上、不及別子細矣、

一國司初任時給畠事、

件給畠者壹町五段也、而宗親依論申於五段者、所避渡于宗親也矣、

一武安名公役可被省宛亡父遺跡由事、

件公役事、雖進訴狀、不可有訴訟之由、宗親申上者、不及子細矣、

一二女子分事、

件領事於親綱領内屋敷名田者、蒙御成敗令落居之程者、可爲親綱知行也矣、

一宗親代官爲貞奪取地藏女母子三人由事、

件条在國之時、相尋子細可糺返之由、宗親申上者、不及訴訟矣、

一佐田村後家分并宗親所領御公事等可懸于大淀浦条〻事、

一鞦三昧供　一安居布

一守護所御院(院)飯用途　一同借屋造

一同鎌倉長夫　一節析布

一大祓

一方〻御公事支配時者可觸申也矣、

右件条〻、親綱与宗親相共令和与畢、於自今以後者不可相違、仍和与之狀如件、

正嘉二年九月廿一日　　建部親綱(花押)

○五五四　関東御教書写

速馬入道西願申、大隅國佐汰村文書等事訴狀遣之、如狀者、同國御家人尼妙阿令押領之云々、早可令尋成敗、若又有殊子細者、可被注申之狀、依仰執達如件、

文永二年十月十二日　　相模守（北條時宗）（花押）
左京権大夫（北條政村）（花押）

陸奥左近大夫將監（北條時茂）殿
相模式部大夫（北條時輔）殿

○五五五　関東御教書写

大隅國御家人佐汰九郎宗親（定親）子息阿古丸代憲光申所領事、訴狀遣之、子細見狀、不日可令召進論人草井左衞門入道行念之狀、依仰執達如件、

文永六年正月卅日　　相模守（北條時宗）（花押）
左京権大夫（北條政村）（花押）

陸奥守（北條時茂）殿
相模式部大夫（北條時輔）殿

○五五六　関東御教書写

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸代憲光申所領事、去三月注進狀披露了、而論人行念死去之上者、相尋彼所領相傳仁、不日可被召進行念子息之狀、依仰執達如件、

文永六年六月廿四日　　相模守（北條時宗）（花押）
左京権大夫（北條政村）（花押）

陸奥守（北條時茂）殿
相模式部大夫（北條時輔）殿

○五五七　関東御教書写

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸代憲光申所領事、訴狀遣之、早任先度御教書之旨、可令召進論人行念子息之狀、依仰執達如件、

文永七年五月廿六日　　相模守（北條時宗）（花押）
左京権大夫（北條政村）（花押）

相模式部大夫（北條時輔）殿

○五五八　関東御教書寫

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸代憲光申所領事、去後九月十四日注進狀披露了、論人行念後家可召進相傳仁之由、乍進請文早々遅々之條、甚無其謂、不日可被召進彼輩等之狀、依仰執達如件、

文永七年十二月廿五日　　相　模　守（花押）
左京権大夫（花押）

相模式部大夫殿

○五五九　関東御教書寫

大隅國御家人佐汰九郎宗親子息阿古丸申當國佐汰村事、阿古丸者帯弘長三年宗親譲狀云々、舎弟倉二郎丸女子地藏等者、帯宗親譲狀否相尋子細有譲狀者、可令執達案文之条、依仰執達如件、

文永八年十月十六日　　相模（北條時宗）守（花押）
左京権大夫（北條政村）（花押）

相模式部大夫殿

○五六〇　鎮西探題裁許狀案

佐多大掾親治与伊佐敷掾親明相論條々

一大隅國祢寝院伊佐敷村事、

要段

至公事者、守惣領親治支配、且任先例、且隨分限可勤仕、但於案堵（安）御下文者、代々于今無其沙汰之間、親明申狀不及吹挙矣、

一悪口事

右、両方雖申子細、非指悪口之間、同前矣、以前條々依仰下知如件、

正和元年十二月廿七日　　前上総介（北條政顕）平朝臣在判

○五六一　佐多掾親治代建部親純申狀案

大隅國御家人佐多掾親治代建部親純謹言上

爲元行伊佐敷又三郎親明西方孫九郎信親後家分二方奈古代官孫三郎清貫等、正八幡宮御造營廻廊一間内修理用途

等、背支配狀、不致弁、不隨惣領親治所勘、令難澁無謂子細事、

副進

一通　御下知狀案 親明分領公事可隨親治支配由事 正和元年十二月廿七日

一　大工請取狀案

一通　檜皮請取狀案

一通　難澁人等交名注文

右御造營事、爲親治惣領主之間、依出支配狀、自餘名〻等、任件支配狀致弁之處、親明・信親・清貫等分、令難澁不弁申之条、招罪科者哉、就中親明者、背御下知之条、顕然之上者、欲被行罪科矣、然者早任注文之旨、以公人數輩、爲奉被責渡件用途等、粗言上如件、

文保二年十一月　日

○五六二　鎮西探題施行狀案

大隅國佐多彦四郎申、亡父親治遺領越訴事、今年八月一日関東御教書 副具書 如此、可被支申哉否、可被申左右也、仍執達如件、

元應二年十二月一日　　前遠江守（北條隨時）御判

下野前司入道殿

○五六三　関東下知狀寫

〔付箋〕「右文書十通上脇神平所持」

可早以尼妙智下総國相馬御厨黒崎内下黒崎村 加發士 并稲村文間郷内押手村事、

右、以亡母尼遺領所被配分也者、早守先例、可令領掌之狀、依仰下知如件、

弘安十年十月廿四日

前武藏守（北條宣時）平朝臣（花押）

相模守（北條貞時）平朝臣（花押）

○五六四　藤原時義譲狀寫

藤原時義謹辞

譲与　下大隅南方内野里村之弁済使職事

副進　調渡(度)次第證文等

右件弁済使職者、時義先祖相傳所領也、而雖有時義實子、依爲女子奉養祢寝殿子息亀壽殿、爲嫡子次第相傳文書等、限永代所譲与實也、於巨細等者、本験等明白也、但時義一期之間者、可知行之、時義一期之後者、爲亀壽殿之計、女子三人可被扶持也、仍爲後日譲与之狀如件、

元亨參年四月廿一日　　藤原時義(花押)

○五六五　沙弥行智譲狀寫

大隅國祢寝院南俣地頭兼郡司沙弥行智辞

譲与亀壽丸所

一郡本内

一所　河窪刑部太郎薗　一所　又四郎入道薗

一所　原次郎薗

四至　限東大道同孫三郎入道西垣根　限南大河　限西越前太郎入道東垣根同五郎入道東垣根　限北大道

此内加西信房薗定

田地分

稲葉三段清成作　小山下貳段半弥三郎入道作

柏木四段清成作

右田薗等者、任譲狀之旨、限永代可令領掌之、但御佃米貳斗御領物四疋可致弁、於其外御公事等者、隨分限可致沙汰之狀如件、

嘉暦二年二月四日　　沙弥行智(花押)

○五六六　沙弥行智所従譲狀寫

譲与　所従等

亀壽丸所

浦路女母子　安五郎男妻夫、同一類

一人六郎太郎男　光松三郎一類

一人朔童　一人自然童

一人袈裟亀女　一人濱緒三郎男

右奴原者、重代相傳下人等也、而任彼譲狀之旨、迄于子〻孫〻、可令服仕之狀如件、

嘉暦二年二月四日　　沙弥行智（花押）

○五六七　沙弥行智譲状寫

譲与亀壽得分

大隅國祢寝南俣松山新開田又太郎作四至東限溝下、南限平九郎田北のとも、西限岸、北限刑部太郎田南とも、此内東寄よしハら在之、可知行、此外先年以佐野大進房神助、任書置譲状之旨、可知行、仍譲状如件、

元徳二年十一月十九日　　沙弥行智（花押）

○五六八　禰寝院見作田畠注進状寫

祢寝院

注進　天授三年見作田畠里目録事、

合

一郡本村　拾柒町玖段参中（杖脱カ）　損肆町陸段参杖中

一鳥濱神河　壹町壹段参杖　損壹段肆杖

一濱田村　柒町参段参杖　損貳町貳段

一大姶良村　陸町柒段貳杖　損壹町柒段貳杖

一志〻女村　玖町柒段　損貳町柒段肆杖

一横山村　柒町伍段壹杖　損貳町壹段肆杖

以上伍拾町肆段貳杖中　損拾参町柒段加算失肆町肆段定

得田参拾陸町柒段貳杖中、

野稲畠濱田村貳段参杖　大姶良村柒段壹杖
志〻女村貳段十　横山村伍町中

右目録大略注進如件、同年十一月廿一日

○五六九　島津氏久軍勢催促状寫

凶徒末次覚栄已下一族等爲退治所打立也、來十五日以前、可被馳寄大姶良之狀如件、

貞治二年六月一日　　修理亮（島津氏久）（花押）

祢寝一族御中

『付箋』「右文書七通鳥濱分右衛門所持」

○五七〇　沙弥仏念譲狀

沙弥佛念謹言

譲与爲次男藤原義房御領曽小河村弁済使職事、

右件職者、前〻弁済使等或嬾公益、或捨去庄居之間、以奉正公益之人、蒙補任令相傳領掌者先例也、任譲狀之旨、蒙　上宣、令勤仕庄國兩方之公益、可永領掌之狀如件、

元仁貳年三月七日　　沙弥（花押）

○五七一　沙弥道勝重譲狀案

重譲渡藤原義子

祢寝院内横山村者、道勝重代相傳無相違所領也、雖然親父明意譲狀并安堵御外題等者、南郷大輔法橋観睿許仁入置質券訖、然而観睿者、依爲道勝師匠、以後日被譲与于道勝間、重義子仁所譲渡也、將又元應貳年七月廿日観睿重譲狀同所副渡也、云先日譲狀、云此狀等、明鏡上者、永代可令領知事、

右、委細具于先日正和元六月廿六日譲狀早任彼狀等、至于子〻孫〻無他妨可令領掌之狀如件、

嘉暦參年十一月十五日　　沙弥道勝在判

○五七二　沙弥道勝書下案

重申置横山村本證文道意譲狀并質券文書等者、下大隅万福女代小納言公宗俊与道勝所令和与契狀在之、口入人下大隅北方地頭代原田新左衞門尉重義加判此狀明鏡也、過年記（紀）之後、任契約之旨乞出者、可令取之狀如件、

嘉暦三年十一月十五日　　沙弥道勝在判

○五七三　沙弥道勝・藤原義子連署譲狀案

譲渡次男藤原義松

屋敷壹箇所　限東大道　限西本堀定　限南八中道　限北尾中通

水田壹町肆段廿内三反　横山田新開北垣根　福崎弁用　一丁

一反丁佛山次郎丸并五郎太郎作

右件屋敷水田者、道勝重代相傳所領也、然間限永代所譲渡于次男義松也、至于子〻孫〻、無相違可令領知、若有沽却心之時者、兄弟中可令和与、不堪之時者、一門中可有和与、更不可成他人領、又恒例臨時御公事等者、兄弟相談任置文之旨、可令勤仕也、猶以有難治之子細者、可依一門評定也、仍爲向後將來譲狀如件、

嘉暦三年十一月十五日　　藤原義子在判

沙弥道勝在判

○五七四　沙弥道勝・義子連署譲狀案

譲渡三男藤原義村

一所義子當時居屋敷

屋敷三ヶ所内一所中村薗

一所田尻薗

限東横大道限西義村

當作新開西堺

限南田尻垣根

限北立道

水田壹町内二反福崎弁用次

三反横山田新開南垣副

五反西俣村橋口溝代二切但無筆田也

若此溝代田令相違事有之者弁用内堺田下切五反ヲ割分天可令領掌也、

右、件屋敷水田者、道勝重代相傳之所領也、然間限永代所譲渡于三男義村也、至于子〻孫〻、無相違可令領知、若有沽却心之時者、兄弟中可令和与、不堪之時者、一門中可有和与、更不可成他人領、又恒例臨時御公事等者、兄弟相談任置文之旨、可勤仕也、有難治之子細者、可依一門評定也、仍爲向後將来譲狀如件、

嘉暦三年十一月十五日　　義子在判

沙弥道勝在判

○五七五　藤原義親置文

志〻女横山兩村堺事、自上田橋口以河久木崎尾ハナ大樋

口河くたり小山下自萠仁とをいて(り)兩村可爲堺、爲止末代違乱、所定之也、

暦應元年十二月廿二日　　義親(花押)

○五七六　沙弥道勝譲狀案

横山村庶子分ニ譲所之水田事、

右彼所ニ惣領御公事不合期間、道覚知行分内福崎井析壹反冊内弁用内下切一反、義村知行分内西俣溝代田上切二反、於兩方の以上田四反冊者、後日之以譲を、惣領ニ返付上ハ、永代知行すへし、子〻孫〻にいたるまて、いろんのきなく領知すへし、仍譲狀如件、

暦應貳年十一月十日　　沙弥道勝在判

○五七七　沙弥道覚・藤原義村連署証狀案

横山入道殿負物代ニ請文を被籠候間、其しちに水田三町被入候、惣領より此しちを被出候ハん時、所〻新開内道覚分壹段丁部、同坪義村分壹段丁、惣領方ニ可進候、若子細申候ハゝ、知行分之中ニ゛ゑらひ被充候へく候、仍爲後日狀如件、

暦應貳年十一月十日　　藤原義村在判
沙弥道覚在判

○五七八　沙弥道勝外三名連署契約狀写

契役(ママ)申大祢寝内横山村弁済使職之事、

領家地頭兩御方御年貢たいかんによて、かうこせさる間、藤原氏女日隈氏女兩人の米柒石、又兩方の銭貳貫文代ニ、横山村田薗荒野ニおいてハ、拾ケ年をかきてさりわたしたてまつる所也、但こうれいりんしの御公事御年貢諸方色〻の済物等ニおいてハ、沙汰をいたさるへく候、契役田より外の田薗等乃事、

一道勝やしきの薗水田ハ横山田弁用元四反道勝一後のほとふしう江領知すへし、

一水田ハ大牟田弁用壹町、毎年内検帳之得田ニ付て、領家地頭両方の所當米可致沙汰、田尻の薗下東横大道を限て、藤原義子領知すへし、

一福崎弁用玖段所〻新開内一反中薗ハ、道覚當時ゐやしき外薗下二ヶ所、二男道覚領知すへし、

一西俣溝代下切三反、福崎内元一反、所〻新開内元三段薗堀内やしき壹ヶ所、中村薗一ヶ所、田尻薗下壹ヶ所、三男藤原義村領知すへし、

右此外の田薗山野荒野等ニおいてハ、明年かのへたつのとしより拾ヶ年を限て、知行せられたてまつるへく候、年きの後ハ本米同本銭をかへしたてまつり候て、道勝か嫡子義子か方にさりわたさるへく候、若義子子細候ハん時、嫡孫の方ニ返付らるへく候、但道覚義村か知行分ニおいてハ、道勝か先日のおきふミにまかせて、諸方の御公事沙汰をいたすへき狀、さたむる所也、若又契役申なから、後日に子細を申候者、於此所者、永代知行せられたてまつるへく候、若此中にゐき申物出来候ハゝ、道勝か子孫たるましく候、仍爲後日契役狀如件、

暦應貳年十一月十日　　藤原義村（花押）
沙弥道覚（花押）
藤原義子（花押）
沙弥道勝（花押）

但此米錢ハ、當院惣鎮守河上大明神御神物にて候上、たとい御とくせい沙汰出来候とも、それニよるましく候、仍爲後日狀如件、

暦應貳年十一月十日　　藤原義子（花押）
沙弥道勝（花押）

○五七九　沙弥道心請取狀写

祢寝斜木右衞門五郎殿自手米八石二斗銭貳貫文請取候畢、

暦應參年十一月廿三日　　沙弥道心（花押）

○五八〇　藤原義子置文寫

横山村内ふくさきの名頭田壱町、同所弁用坪さかい田のしものきれ八段、新開内ゑひのこまつ貳段、かちのわきのその、同新開等事、嫡子彦三郎義武任和与狀不可有子細候、仍爲後代之狀如件、

暦應参年十一月廿三日　　藤原義子（花押）

○五八一　藤原義武契約狀案

横山村内かちのわきの薗皮代桑代の事、先日の和与時、所済物の註文にこれをのすといゑとも、堀内にしゆんするあいた、きやうこうにをいてハ、義武これを可弁、仍爲後日狀如件、

観應二年十月九日　　藤原義武在判

○五八二　藤原義武契約狀寫

大隅國祢寝院横山村田地貳町壹杖、薗壱ヶ所事、右於田薗者、去暦應三年十一月廿三日以和与義、祢寝右衞門五郎入道ゝ廣（于時重廣）奉避讓之處、同五年十一月楡井四郎頼仲爲御敵當村以下寄郡押領之時、依屬于彼頼仲、不慮外雖令悔返之、祢寝殿被對治頼仲之上者、亡祖父道勝并親父道念讓狀仁何様句お雖書載之、所詮任先日和与狀、不可有異儀候、若背彼条ゝ令返改候者、義武知行分於可被押取候、將又本證文等おも同可令返進候也、仍後證之狀如件、

観應二年十月九日　　藤原義武（花押）

『付箋』「右文書十四鳥濱庶子文書鳥濱分右衞門所持」

○五八三　鎮西探題裁許下知狀

宮原大掾清純与田代七郎助清（童名鬼熊丸）相論、大隅國祢寝南俣田代村参分壹中村名事、

右就訴陳狀、擬有其沙汰之處、去月廿三日和与訖、如助清狀者、當村者亡父心性不残段歩讓給助清之處、清純号有心性沽券狀參分壹、可宛給之由、依訴申、雖番訴陳、

以和平之儀、中村名田畠在家山野等半分清純方仁所避渡也、四至東限中村世戸上原大道上原南通尾土々目幾加尾登黒木世多尾大道登仁多保曽利狩返乃西平大谷下上渡頼猿葛尾下大河、西限河原河、南限下直世堺、北限田代河流目河狩倉等、限大浦路西通谷上者、大浦大道北限大河、南限寄郡堺、西限松波惠堺、此外狩倉壹ヶ所在之、字号長坂、四至東限山口大道、西限狩終大谷、南限通尾、北限長坂山猿走波狩倉、同避于清純訖、万雑公事者、可被勤仕六分壹、背此狀云助清之子孫、致違乱者、可被行罪科云々、如清純狀者、中村名田畠山野者、任田代七郎入道真念（助清祖父）、弘安十一年卯月九日沽券并同子息心性嘉元二年二月十二日沽券、同子息助清徳治二年三月十一日放券等、清純訴申之處、以和平之儀、任心性沽券、助清避与中村名田畠在家山野狩倉等半分於清純之間、止訴訟訖、背此狀、云清純、云子孫、致違乱者、可被行罪科云々者、此上不及異儀、且當村拜領之由、前々其沙汰訖、然則相互守彼狀、可令知行焉者、依仰下知如件、

元亨二年十一月十一日

修理亮平朝臣（北條英時）

○五八四　建部助清和与狀

和与

大隅國祢寝院南俣内田代村田地屋敷狩倉并安行名事、

一水田壹町内

葦牟田三段四至（四方田際）長田三段（東限小谷西北田際）南限河

池田壹段（東限定使作堺南限河西北田際）河副三段四至（東限岩鼻西限中嶋崎）南限河北限大坪通苗手

一屋敷壹所字口坪中大夫薗四至（東限參尾大道西限石渡瀬通谷）南限尾際目北限北尾山

一狩倉壹所（号字栗栖平）四至（東限射間立西限萩塚）南限大迫北限通谷

一安行名至（任本公験畢）

右於當者、助清相傳所領也、而當俣本主清重被拜領稱建仁三年御下文内、祢寝入道行智帯彼御下文等、被訴申之間、雖可明申以和与儀、止訴訟之由、被出狀之間、奉避渡田代村内田地屋敷狩倉并佐多村内安行名（御下知副之）於行智

方畢、但於田代村御公事者、可有勤仕五段分之、次當村仁方々知行分在之、爲和与之外上者、助清不可相綺者也、仍和与狀如件、

元徳二年四月廿三日　　建部助清（花押）

○五八五　今川満範軍勢催促書下

參御方、致忠節者、可注進狀如件、

永和二年二月九日　　兵部大輔（今川満範）（花押）

田代刑部少輔殿

『付箋』「右一通田代周右衛門所持」

○五八六　堯清証狀

連々奉公之しるへを以て二町之切紙を遣候、當時雖可遣候、所領指苦候、爰許弓箭属無爲候する時、貳町之事不可有相違候、爲其記、先々紙漉河内借申候、何時にても候へ、二町之所領遣候する時、彼紙漉河内之事者、可被還上事專要候、仍爲後日證文如斯、

天文十三年甲辰七月六日　　堯清（花押）

税所新左衛門尉殿　　進之候

○五八七　紙漉河内日記

小祢寝之内紙漉河内日記之事

一田数三段此外ニ有堀町、同山神田少有也

一人足（種子数、屋敷下七斗蒔、道上一斗三升蒔、鎮主ノ河そへ二升蒔）三十人、此内二人省略候、

一年貢春下五斗、此上ニ大黒之米とて

一舛計始上候、又五斗之内二升省略候、夫丸二人米二升留候事者、田數三段之内一斗蒔上候て、領主地作仕候、爲其分省略候、自然一斗蒔之田如本村付候ハヽ、米五斗人足可爲三十人候、

一七月盆、八月八朔、十二月本目一紙一束ツヽ三束上候、子孫各々同内へも二三条つヽ上候、さしをこなとへも上候、

一霜月山神祭折節、領主各々内者何人候へ、めしつれ罷

下、

一正月ハ各〻いもつと一ツゝ上候、自然此前をおとな前より油断申候ハゝ、八朔ニハおとな・ゝこ二人前より、(等)を一めつゝわた十ソ、五舛入候いもつと可上申候、

一かき年〻二十一人ゆい(結)申候、仍證文如件、

税所紀伊守敦長（花押）

天文二十四乙卯八月吉日書記之

○五八八　建部重虎証状

于時文禄二癸巳年三月廿四日

水口之方大根占室屋作志のミの池

壹段廿二分一石三斗八升

右之所領、田代之爲返地与、税所縫殿助へ遣候、仍證状如件、

筆者肥後利右衛門尉

重虎（花押）　盛貴（花押）

○五八九　建部重虎証状

于時天正廿一(マヽ)癸巳年貳月廿四日

田代かへの内

一壱段　九斗二升六合

同所中村之前

一五畝　貳斗八升四合

右之所領、爲返地税所縫殿助へ遣候実也、仍證状如件、

下村五兵衛尉

重虎（花押）　重治（花押）

根占城介

清重（花押）

（張紙）「右四通税所助右衛門所持」

○五九〇　建部重虎証状

于時文禄二癸巳年三月廿三日

小根占之内

一貳段壱畝　二石六斗四升二合肥後甚介作

大根占之内

一貳段二畝　三石五斗壱合

田代郷原村

一四段壱畝十五分　三斛五斗五升四合

同村畠　大豆

二石四斗六升六夕　一下屋敷一ツ　人ノをらさる所

一山畑 大豆二斛四升
小祢しめ 下村五兵へ作
一畠二反四せ十九分大豆二斗四升
大根占下村後兵へ作（五）畠 一二段大豆四斗八升
水田都合八段四畝十五分九斛七斗
畠 大豆都合五斛二斗二升六勺
右之所領、加扶持村山源兵衛尉へ遣之候、仍證狀如件、
重虎（花押）
筆者肥後利右衛門尉盛貴（花押）

○五九一　建部重虎証狀

十石衆　村山源兵衛尉
于時文禄五年丙申
中一町上田壱反　壱石六斗　森山作
きり口下田一段五せ十五ト（歩）一石八斗六升　同人
石神中田壱反二せ三ト　一石六斗九升四合　藤爲作
地蔵ほり中畠一段一畝　壱石一斗　北之三郎
七留上畠一段四畝六ト　一石七斗四合　北之門之内
居屋敷八畝　八斗
□んかく堀下畠　二反四畝六ト　一石五斗三升六合
惣合九反五畝九ト十石九升八合
右之分京押ニ而十三石三斗一升七勺
右之知行　遣之候、
実也、仍證狀如件、
須美越右衛門尉重暁（花押）
重虎（花押）
根占掃部介重能（花押）

○五九二　根占重張・野久尾重忠連署証狀

慶長貳丁酉年三月廿一日
中上田一反一畝九ト　一石八斗八合
石神上田壱反四畝十五ト二石三斗貳升
せ十五ト　貳石三斗四升
中畠一段三畝　一石三斗
七つ畠上畠一反　一石貳斗
畝六ト　三斗三升六合
三角畠中畠貳段壱畝　貳石壱斗
同所　一段三歩　一石貳斗一升二合

六せ廿七ト　六斗九升

御加扶持之分

石町
下田一段四畝六分一石七斗四合東九兵衛尉上地

中田一反　壱斛　二宮志摩助先

しろいつき
下畠一反　八斗　奥屋敷

たつかうおり
壱段　八斗　同

下畠一反　八斗　同

屋敷四畝　四斗　同

池ノ道（ロカ）
中畠七セ十五ト　七斗五升　二宮志摩助先

荒畠六畝十分　五斗六合　同人

田方五段九畝十五分　八石一斗七升二合

畠方一町貳反三せ一分　十一石八斗九升四合

惣合而一町八反貳畝十六分

分米廿斛六升六合

右之知行村山源兵衛尉へ遣之候実也、仍證状如件、

野久尾加賀右衛門尉
重忠（花押）

根占掃部助
重張（花押）

（付箋）
「右二通村山正左衛門所持」